
バカと未来と召喚獣

カイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと未来と召喚獣

【Nコード】

N9401R

【作者名】

カイト

【あらすじ】

バカテスの二次創作です。オリキャラの多数が他アニメ、漫画、小説をモチーフにしていますがそれでよかったですらどうぞ見てください。

未来はフューチャーじゃないよ(前書き)

明「…なにこのタイトル」

「いや…一樣親切のつもり」

直「最初からこんなんじゃないよこの小説のそこがしれるな」

「そこまで言う!」

明「それにこのく直>って絶対誰かわからないよ」

「うぐ…お、オリキャラ設定は明日にでも投稿するよ」

「今日しろよ!」

「それではどうぞ」

明「勝手に始めた!」

直「やれやれ…ちなみに俺の名前は直人^{なむと}だ、こんな小説だがよろしくな」

未来はフューチャーじゃないよ

「ねえねえアキ君アキ君」

「ん〜なに〜みーちゃん」

「わたしね〜大きくなったらアキ君のお嫁さんになってあげる〜」

「ほんと〜うれしいな〜」

「えへへ〜おつきくなるまでまってってねー」

「うんー」

「えへへ〜アキ君大好き〜（だきっ）」

「は、はずかしいよみーちゃん」

とそこで星野未来は目を覚ました。

天井を見つつ頬を赤らめしばし沈黙した

「……………いや、ないよこれはないって」

幼稚園の時だからってこれはないよ…もう時効だよ

「……………さて、朝のお勤めだ」私も忘れてたんだしアキ君も覚えてないよね……………残念なような嬉しいような

そして未来は黄色い腰の高さくらいある髪をリボンで結んで隣の吉井家に向かった。

「おじやましませーす」

何故未来が明久の家の鍵を持っているのかというと、明久が一人暮らしをするさい心配だからと明久の親が既に一人暮らしをしていた未来に明久の世話を任せただ。

案の定明久は最初の仕送りを趣味に使いはたしてしまい、それから仕送りも未来に送られているのだ。

「はーやっぱりまだ寝てる、アキ君起きて朝だよ」

「ムニヤムニヤ……あと三光年……」

「何言ってるのもう、しかも三光年を時間でおぼえてるし……早く起きてってばー!」

「スピー……」

「もう!こうなったら……」『アキ君、起きないとお嫁に行けなくなるチュウをしますよ?』「」

「邪悪な気配!?!?」

ライオンに寝ているところを襲われたシマウマのようにアキ君が飛び起きた

「やっと起きたねアキ君、」飯できてるよ」

「な、なんだみらいか…脅かさないでよもう！」

「一回で起きないアキ君が悪いんです」

「う、ごめん」

「フフツ、それじゃあご飯たべよ」

「うん」

時間もあつたのでご飯をゆっくり味わって食べて私達は学園に……走って向かっていった。

「も〜！な、なんで、む、昔の、玲さんの服着る、のかな」

「だ、だって急いだほうがいいと思ってあわててたから」

「ち、遅刻したら、アキ君の、せい、だからね」

自室から出てきた明久は、なぜか姉の玲さんのお古のセーラーを着ておりそれを見た食事中の未来が派手に吹き出して大惨事となった。結局明久に着替えさせ大惨事の後かたづけを終えてみれば、すでに遅刻上等な時間であり大慌てで家を飛び出し、今に至るといわけだ。

「ひい…ふう…はあ…も…むり〜」

暫くすると未来が地面にへたり込んでしまった。

小柄なうえ運動が苦手で体力がないからすでに限界だったのだろう。

「ひい…ひい…ちょっと…休んで…いくから…先いって…アキ君」
そう言いながら木の下に向かって行こうとするが、
「それはだめだ！」

突然明久が大声を上げてビックリしてしまった。

「ひゃう！ど、どうしたのアキ君」

「僕が遅刻するのは自業自得だけど、マジメなみらいがそれに巻き込まれるなんてダメだ！」

珍しく真面目な表情の明久に未来は一瞬呆けたが、すぐに眉根を寄せると

「いや、全部アキ君のせいじゃん」とツッコミをいれる。

「ぐ、と、ともかくほら」
言葉を詰まらせながらも明久は未来に背中を向けてしゃがみ込む。

「ええっ！い、いやだよ！！二年にもなったのにおんぶなんて!？」

「いいから急いで」

こうなるとアキ君は頑固なんだから。

ぶつくさ言いながらも未来は明久の背中に乗った。

「重くない…よね？」

「あはは、みらいみたいになっちゃな子の体重おもいわけが…いてててててて…！」

「アキ君は一言多いよ」

「ひゅみまひえんひゃなしてくだひゃい」

「まったく…ほら急いでゴー…！」

「うおおお！僕の底力見せてやるううう…！」

そう言つて明久は未来をせおい走り出した。

・・・そして五分後明久は・・・

「ゼイ……ゼイ……ゼイ」

力尽きていた

「こ、こんなばかな……」

「いくら何でも、人一人おぶって走ったらたいいの人はそうなると思うよ？それにさっきまでアキ君も走ってたんだし…」

「くぬうううう」

うなりながらも校門まで運んでくれたアキ君はやっぱり優しいな。

「遅いぞ吉井に星野」

校門に着くと浅黒い肌をスーツでかくし、その内に詰め込まれた針金の束ねたかような筋肉質の肉体を持っている人が立っていた。

「おはようございます、鉄じ……西村先生」

「おはようございます西村先生」

立っているのは文月学園のスネークこと生活指導担当教師、西村教諭である。

「ん？星野はどうした、怪我でもしたのか」

「あーいや、アキ…吉井君の遅刻に巻き込まれてしまいました、走ったはいんですが途中で力つきちゃってしまい……」

そう言いながら未来は明久の背中からすると降りた。

「吉井……星野にまで迷惑かけるんじゃない」

「えええっ！それじゃ、僕がいつも皆に迷惑をかけてるみたいじゃないですか！」

「自覚が無かったのか……」

「自覚無かったんだね……」

「そんな！みらいまで……」

なんか二人にため息つかれたよ！？みらいにまで言われたのショックなだけ！

「もう、アキ君いじけないですよ」

二人がそんなやり取りをしている間に西村先生がふところから封筒を出した。

「星野は残念だったな。お前の成績ならCクラス、調子が良ければBクラスに行けたんじゃないか」

「はは、まあ仕方ありませんよ」

みらいは封筒を受け取りながら苦笑いをしていた。

「しかしな、星野」

「はい？」

「お前がしたことは人として立派だったぞ」

「あ、ありがとうございます」

みらいは頬を赤く染めながらうなずいていた。

<星野未来…Fクラス>

「残念だったね、みらいなら絶対Cクラス行けたのに、僕も今回は調子が良かったからみらいと同じクラスになれると思ったんだけど」

そんな事を言いながらアキ君は貰った封筒を綺麗にあけるのに奮起していた。

「あはは、そうだねーアクション」

「なんで棒読みなの？」

たぶん、いや絶対同じクラスになれると思うよ。でもさっきのって私と同じクラスになりたいってことなのかな？……ちょっと嬉しいかも。

「?どうしたの mirai、顔を赤くして」

「ふえっ！な、なんでもないよ」

「そう？」

急に声かけられて声が裏返っちゃたよ、どうしよう顔もう戻ったよね。

「まったく、吉井……今だから言うが俺は今まで、吉井はもしかしたらバカで鈍感なんじゃあないかと疑っていたんだ……」

「あはは、それは大きな間違いですよ、とゆうか鈍感てなんですか」

そんな事を言いながらアキ君は封筒の袋を破いた。どうやら綺麗にあけるのは諦めたようだ。

「まったく。こんな勘違いを起こすなんて、俺の目は節穴だった
としか思えん」

そう言って、西村先生は深くため息をついた。

「そうですよ。そのうち、あだ名にふし穴が追加されちゃいますよ

「？」

「そうだな……吉井、お前への疑いは無くなった」

そしてアキ君は中から折り置まれた紙を取り出すと、それを開いて中を確認する。未来はそれをそおっと後ろから覗いた。

<吉井明久…Fクラス>

「お前は正真正銘のバカで鈍感だ」

そしてアキ君は石のように固まった。

「だから鈍感って何がですか」

「一つのシッコミをして。」

未来はフューチャーじゃないよ（後書き）

「どうでしたか？」

明「どうでしたか？じゃないでしょ！」

直「なんで俺出てないのに前書きにだしたんだよ！だすならみらいだしてやれよ」

「そういわれても」

未「そうだよ二人ともわがまま言っちゃだめだよ」

明&直「みらい」

「みらい…ありがとう」

未「いくら前の小説をまともに出さない駄作者だからって」

「……あの〜怒ってます？」

未「え、まさか〜怒ってませんよ」

「いやでも」

未「怒ってませんよ」

「…はい」

未「まったく…こんな小説ですがこれからよろしくお願いします」

明「前みたいにならないように頑張らるので」

直「どうか読んでやってくれ」

未&明&直「」「」「これからよろしくお願いします」「」「」

「お願いします」

オリキャラ設定（前書き）

「まず初めに：JACKさん、感想ありがとうございます！」

「前の小説の時も感想をいただきましたがとても励みになります」

直「さて、今日は予告どおり俺たちの設定だな」

明「結局一日あけちゃったね」

「いや、事実上まだ二十四時間は立っていない」

未「そんな細かいことはどうでもいいよ」

「…なんかみらいつめたくない？」

未「そんなことないですよ」

「そうか？」

明「まあ、ともかく始まりです」

オリキャラ設定

名前 星野未来ほしのみらい

身長 137.5センチ

特徴 腰の高さほどある黄色い髪を後ろに結んでポニーテールにしている。

瞳のいろは黄色で、胸もD〜Eカップほどある。背が低い事と童顔

なのを悩みにしているがスタイルはとてもいい。

性格 やさしい 冷静 友達思い（明久は特に） ツッコミやく
自分に素直になれない

好きなこと お昼寝 料理 読書 絵描き（あまり上手くない）お
花 明久から貰った髪留め

嫌いなこと 友達を傷つける人 明久をいじめる人 怖そうな人

軽い説明

両親は海外で働いていて中三の時から一人暮らしをしている。

明久とは生まれたときからの付き合いで一人で暮らしているときも明久家に交じって食事したりもしていた。

昔いじめにあい、その時助けてくれた明久の事が好きだが奥手のため相手に遠慮してしまう。

明久から貰った月型の髪飾りはいつも着けている。

本人はスタイルに悩んでいるが実はかなり人気があり中学の頃ラブ
レターを貰ったりしていた。

名前 霧乃直人きりのなおと

身長 175センチ

特徴 黒髪 片目が赤色でもう片方が青色 容姿は中の下くらい

性格 冷静 友達思い いじめに敏感

好きなこと 鍛錬 料理 友情

嫌いなこと いじめをするやつ 友達を気づつけるやつ

軽い説明

小学生のころいじめにあっていて心を閉ざしていたが中学で明久た
ちにあって心を開く

目の変色はいじめのられていたときなぐられて赤に変色した

自分より友達の事を優先している

子供のころ空手をやっていて今は古流空手を自分で研究している

名前 笹倉美沙 さしかうらみさ

身長 153センチ

特徴 イメージはESの更識楯無会長の髪に花の髪留めをつけている
いつも元気がよくてクラスのムードメイカー

性格 明るい 友達思い 誰にでも平等（他人を傷つける人を除く）

好きなこと ゲーム 音楽鑑賞 友達との会話

嫌いなこと 友達を裏切ること 人を傷つける人

軽い説明

成績はAクラスなみだがFの方が面白そうという理由だけでFクラスに入った

恋愛のお助けをするのが好き

家の習わしで柔道をやっていてそんじょそこらの男より強い

誰かのために頑張れる人が好き

雄二でも行動があまり読めない

元Cクラスでみらいの事を妹のようにかわいがっていた

名前 遠野李紗トリス

身長 150センチ

特徴 イメージはFateのセイバー あほ毛はスイッチ 二重人格

性格 冷静 クール 食事中はテンション高い

好きなこと 剣道 直人のご飯 ライオン

嫌いなこと ご飯を粗末にする人 直人を悲しませる人 タコ

軽い説明

基本的なことはFateのセイバー（黒セイバー）と同じ

直人の幼馴染で昔直人が唯一心を許していた

生まれつきの二重人格で、直人いわく黒李紗。極度の怒りかあほ毛が抜けると黒化

黒化すると冷静より冷徹、直人思いは変わらない

オリキャラ設定（後書き）

明「まあ、一先ずはこれくらいかな」

直「じゃっかんいい加減な気もするかな」

「ぐぐぐ、まあこれからも設定が増えてくるかもしれないし」

笹「はは、きつと面白くなっていくよ」

「これからも増える」ことに設定は追加されていくとおもいます」

未「これからもこの小説をよろしくね」

次元のはざま

霧「それで、なんで僕がここに」

「いやね、前の小説のことで言いたいことがあったからさ」

霧「ふん」

「ふんて…まあいいか。ひとまず前の小説は一旦更新停止とします」

霧「いきなり死刑宣告なんだけど」

「まあまで、終了というわけではない」

霧「あれ、そうなの」

「うむ、停止の理由は実力不足なのでいずれは再開したい」

霧「へーそれじゃあがんばってね」

「そこで霧きりさわあきと沢明人君におしらせ」

霧「へ？」

「明人君はたまにこちらの世界に来てもらうかもしれませんが」

霧「なんで！」

「いきなり更新停止だからそのための措置」

霧「ふーん、わかったよ」

「なにかあったらよぶからあしからず」

霧「うん、でもどうやって？」

「そちらの世界にはいるじゃないあの人か」

霧「ああ…あの人ね」

「そう、あのひと」

霧「まあいいよ、それじゃ何かあったら呼んでね」

「うむ、そちらも武術がんばれ」

霧「うん、みんな、またあおうね」

「それじゃ、そついでとでよろしくお願いします」

自己紹介（前書き）

明「きせきだ！」

「なにいきなり！」

直「まあ、一日に二話も投稿したしな」

霧「まあまあ、そこまでいわなくても」

未「ところであなたは誰？」

霧「ああ、僕は霧沢明人つています。詳しくは前回の後書を見てください」

「一先ず明人君は前書きにちよくちよくできてきます」

明&直&未&霧『それでは第二話どうぞ』

自己紹介

「あゝあ振り分け試験は結構できたと思ったんだけどな」

「あはは、でも同じクラスにはなれたじゃん」

「ま、そうなんだけどさ」

シヨックから立ち直ったアキ君と一緒に今は廊下を自分達のクラスに向かつて歩いている。

「はゝ10問に1問はとけたんだけどな」

「いや…それでどうしてCクラスに行けると」
まったくアキ君は

暫くすると一つのクラスが見えてきた。

「うあゝでっかい教室だね」

「去年は三階なんてほとんど来たことなかったけど、こんなに教室おっきかったんだね」

標準設備の教室の五倍はあろうかという教室の教壇には、知的な眼鏡の美人教師が立っている。その後方には黒板ではなく巨大なプラズマディスプレイ置かれてあり『Aクラス担任：高橋洋子』と映し出されていた。

「やっぱり学年主任は高橋先生かゝ憧れるな」

みらいは低身長のうち童顔なので高橋先生が羨ましい様だ。けどみらいだってスタイル抜群で可愛いんだから気にすることないと思うんだけどな〜

「あ、アキ君そんな面を向かって言われるとその…」

「え!?!もしかして声にだしてた?!」

「う、うん」

ま、まずいこれはかなり恥ずかしい

「そ、それにしてもエアコン、ノートパソコン完備なんてすごいね」

「う、うんそうだね」

ふう〜なんとかごまかせたな、さすが僕!

なんだか?ごまかせた?みたいな表情してるな〜

よし、ここでもうひと押しだ!

「天井もガラス張りだし……高級ホテルのロビーみたいだよ」

「そうだね〜」

よし、完璧だ!

ここはアキ君に合わせたほうがいいよね。

「では、最初にクラス代表を紹介します。霧島さん、前へどうぞ」

「はい」

呼ばれて出てきたのは、物静かな雰囲気をかもし出す少女だ。絹のような黒髪は肩までのばされていてまるで日本人形がそのまま動きだしたようにも見える。

「霧島翔子です。よろしくお願いします」

ブルズマディスプレイには、大きく名前が映し出されている。

「綺麗な娘だね……わたしなんかとは正反対だ」

「みらい……」

みらいは、羨望の眼差しを向けていたが、不意に明久がみらいの手を握った。

「え！」

「行こうよ！Fクラスに僕らの教室に！」

「……うん！」

そして笑顔になった未来と明久はFクラスに向かった

「えっと教室は渡り廊下向こうの旧校舎の一番手前だよね」

「一番奥だよ」

「え、あれ」

「まったくアキ君は」

そして明久は未来に引きずられるようにクラスに向かった。

「……………」

「……………」

「なんか、Aクラスとは別の意味ですごいよね」

「そうだね」

ところかわってFクラス前。明久も未来も、呆然と立ちすくんでいた。手前にあるEクラスと比べても、明らかにオカシイレベルでボロイ。

「基本的人権を無視してるとしか思えないよ」

そう言ってみらいは教室のボロイ扉をあけた。

「遅いぞっ！このウジ虫やる……………」

教壇に立っている野生味あふれる少年がみらいの方を見て固まった。とん、とみらいが手にした学生カバンが床に落ちる。

「ふえ……………」見る見るうちに涙が目溜まりポロポロとこぼれ始めたのであった。

「すっ、すまん！てつきり明久のバカだと思『総員ねらえっつ！

「!!」うおっ?!?!」

明久の号令に呼応して、Fクラスの男子生徒の大半が上履きを教壇の男に構えた。

「お、おまえら!まだ知り合って間もない奴の号令に、何で即対応できるんだよ?!?!」

「やかましいっ!みらいを泣かすやつは世界、いや宇宙の敵だ!!」

「こんな可愛い子を泣かす奴に人権など存在しない!!」

「ロリっ娘最高!!」

「ロリは人類の宝!!」 清々しいほどのバカの集団である。

「わかった!!謝るっ!!土下座でもなんでもするから構えを解け。それから……君、悪かった。さっきの君の後ろにいるうじ虫に言おうと思った言葉で決して君のことを言った訳じゃ」

精悍そうな少年は意外なほど素直に頭を下げようとしたが

「ぐすっ、アキ君の悪口言った」

「総員ねらええええ!!」

「「「ラジャアアアア!!!!」「「「

「結局かああ!!ぎゃあああああ!!」

「ふう、みらい安心してゲスのゴリラは退治したから」

「ひいつく……うん、もう大丈夫」

「……マアベラーズ!!!!」

みらいの涙目上目ずかいによりクラスの大半が海に沈んだ。

「まったく、雄二はもう少し考えてから行動しなよ」

「ぐう、てめえにだけは言われたくねえ」

タコ殴りにされた雄二が揺らりと立ち上がった。

「すみません。通してもらえませんか？」

と、明久とみらいの後ろから声がかかる。そこには、スーツ姿に眼鏡の冴えない男性が立っていた。

「席に着いて下さい」

どうやら、担任教師が到着したようである。

明久も雄二もみらいも、そして海に沈んだ男子生徒達もひとまず席に着いた。

「大丈夫みらい？それにしてもすごい教室だね」

「ぐす…もう大丈夫。ありがとうアキ君。でもすごいって言うより酷い教室だね」

「畳敷きに卓袱台と座布団。畳はカビていてもろそうだし、クモの

巢が教室の四方にできてるし……」

みらいがあたりを見回しているうちに、教壇に立った教師が自己紹介を始める。

「えー担任の……福原慎です、どうぞよろしくお願いします」

一旦黒板にむかってすぐ振り返った。チョークもないの！一体どうやって授業するきだろう。

「すさまじい教室だね」

「まあそうだろうな、黒板にはチョークの粉しかなかったしな」

「あ、えっと」

「自己紹介がまだだったな、俺は坂本雄二。そのバカとは、去年からの付き合いだ」

「あ、星野みらいです。アキ君とは生まれた直後からの付き合いです」

「？それはどういうことだ？」

訳がわからんというふうに雄二が首をかしげる。

「はは、僕とみらいは同じ病院で同じ日に生まれたんだ」

「でね、よく確かめたら家もお隣同士。これも何かの縁だろうって、付き合いが始まったんですよ坂本君」

「ほおー。そういやたまに明久が誰か知らないやつ帰ってるときがあつたな」

「私は去年Cクラスでしたからね。でも、Dクラスの噂はよく聞いていましたよ?」

それを聞いて雄二は苦笑いをする。

「ククク、ろくな噂じゃなかっただろう?」

「そこはノーコメントで」

「設備の確認は終わりましたね? では端の列から自己紹介をお願いします」

軽い談笑をしていると福原教諭に促されて、男子の制服を着た可愛いらしい女の子が立ち上がり自己紹介がはじまった。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる、これから1年間よろしくたのむぞい。……最初に断っておくが、ワシは男じゃ」

「!?!」

その時みらいが目を見開いた

「う、嘘だよな」

「星野、気持ちは分かるが紛れもない事実だ。それと明久、なに体をくねらせてる、気持ち悪いぞ」

「くー！信じない僕は信じない、秀吉は秀吉なんだ」

「アキ君……」

みらいは何かもどかしい気持ちになっていた

「霧乃直人だ、いろいろ言いたいことはあるがよろしく頼む」

みらいが振り返るとそこには身長が170センチ程ある少年が立っていた。

「あ、見てアキ君、直人君だよ」

「ほんとだ。直人も同じクラスだったんだ」

直人と明久達は同じ中学だったのだがその話はまたいずれ。

「土屋康太」

今度は小柄な少年が立ち上がってそれだけ言うと座った。

「あはは、やっぱり無口だね」

どうやらアキ君の知り合いのようだ。

「笹倉美沙です 皆よろしくー！」

あ、次は美沙ちゃんだ。一年のころクラス同じだったんだよね。

「ふむ…たしか奴は成績が良かったはずだが」

坂本君がそんなことを呟いてる。確かに結構頭良かったはずなんだけど。

「ちなみに、ここには面白そうという理由できたよん だから皆いっぱいもりあげてね」

「……イエス！姉さん！！」「」「」

美沙ちゃんらしいといったら美沙ちゃんらしいね。

「島田美波です。ドイツ育ちなので日本語は会話以外苦手です。あ、あとドイツ育ちなので英語も苦手です」

みらいはまたスレンダーな子だと落ち込んでいたが、美波から見たらよっぽどみらいの方が羨ましいだろう。みらいがそんな事を考えていると聞こえてきた声にギョットなった。

「趣味は吉井を殴ることです」

美波は振り返って明久に手を振ろうと思ったができなかった。

「え…あ……なに？」

明久の隣にいる小さな女の子が睨みつけていたのだった。

睨んでいるのは当然みらいなのだが、なぜ睨んでるのかというところ明久がたまに怪我をして帰ってくるがあった。その原因がこの人だと思うといってもたっってもいられなくなったのだ。

「?…みらいどうかした？」

「なんでもないよアキ君」

みらいが明久とそんなやり取りをしている間に美波は席につき次の人に自己紹介が始まっていた。

「吉井明久です。気軽にダーリンと呼んでください」

「……ダアアーリイーン!!」「」「」

なんて不快な大合唱

「……すみません忘れてください。とにかく、よろしく願います」

なんだか少し顔が青くなってる。さすがに不快だったみたい。

「何やってるの、アキ君」

「いや、その、皆に少しでも印象残そうと思って……おえ……」

結構きつかったみたい。あ、そろそろ私だ。

「星野みらいです。趣味は料理と絵描きです、よろしく願います」

ああ、皆なにかひそひそ話してる…やっぱり私変かな。

みらいはそんな事を考えているが

『なあ、あの子』

『ああ、あんな小つちやいのあのスタイル』

『ああ、半端ねえよ』

『幼女最高!』

ここはFクラス、みらいの不安は杞憂のごとし!

ガラッ

すると扉が突然開いて一人の女の子が入ってきた

「あの、遅れて、すみま、せん・・・」

「くくくえっ!」「くくく」

その子は走ってきたのか少し息が荒れていた。

「丁度いいです、今自己紹介の最中ですからそのままどうぞ」

「あ、はい。姫路瑞希といいます。皆さんよろしくお願いします」

その女の子はみらい程ではないが小柄で、みらい以上のスタイルを縮こまらせて自己紹介をした。

「はいつ、質問です!」

「あ、はいっ。なんですか？」

「何でここにいますか？」

誰が聞いても失礼極まりない質問だ。けれど、クラスの大半がその疑問を抱いてることであろう。何故かというところ、この少女は、入学試験で学年二位をたたき出している少女なのだ。その後の試験でも常に上位十番以内には入っている才女なのだ。

このクラスの誰もがAクラスに違いないと思っているはずだ。…一人の小柄な少女を除いて。

「あ…その……」

少し緊張したようすで口をうごかす。

「振り分け試験の最中に高熱を出してしまいました……」

そう、彼女は振り分け試験で倒れてしまったのだ。文月学園でテストの途中退席は0点となる。その際みらいが姫路、その小さい体で保健室に運んだため、みらいもFクラスになったのだ。その際明久の先生に反抗したが受け付けてもらえなかった。

「そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ。化学だろ？あれは難しかったな」

「俺事故にあった弟が心配で集中できなくて」

「黙れ、一人っ子」

「実は、朝まで彼女と一緒にいてさ……」

「異端者だ！これより審問を始める！！」

「すみません！嘘つす！見え張りました！！」

「実は家が火事なって……」

「だから嘘は……ってなんでお前制服新しいんだ……すまん、ジュースおごるよ」

「俺も帰りに焼きそばおごるよ……」

「……ありがとう……」

バカばかりだ。それと最後の人、希望を持って！

「はあ、緊張しましたあ……」

そして瑞希は安堵の表情で卓袱台に突っ伏した。

「あのさ姫『姫路』……」

アキ君が瑞希ちゃんに声を掛けようとする、それに被せるように、強い声で坂本君が声を掛けた。この二人ほんとに友達なのかな？

「あ、はい何ですか……えつと」

「坂本だ。坂本雄二。よろしくな」

「はい、よろしく願いします坂本君」

「ところで姫路体調もう大丈夫なのか」

「あ、それは僕も気になる」

「私も」

今だとはかりに明久が口を挟み、みらいも声をかけた。

「あ、明久君！？ それにみらいちゃん！」

緊張のあまり周りが見えてなかった姫路は、会話に参加してきた二人の登場に驚いていた。

しかし雄二が

「すまん姫路、明久が不細工で」

場の空気を壊した。

「そ、そんなことないです！ 目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗ですし、全然ブサイクなんかじゃありませんよ！」

「そうだよ！ 坂本君。アキ君は余計なこと言わなきゃレベル高いんだからね！」

すかさず明久のフォローを入れる二人：若干貶めている気もするが。

「ふむ…確かにみてくれは悪くないかもな。俺の知ってるやつも明

久に興味を持っている奴がいたはずだしな」

「え！それってだ『それってだれですか（なの）！！』……しくしく」

嬉しそうに詳細を聞こうとした明久を押しつけ、姫路とみらいが身を乗り出す。

「確か久保……」

「『久保……？』」

「……利光だったかな」

久保利光 性別

「……僕、もうお婿にいけない……」

「『ホッ……』」

二人は安心したようだが明久は心に傷をおったようだ。

「明久うつとうしいからさめざめと声を殺して泣くな。冗談ださ」

なんだ、やっぱり友達なんだ。アキ君のフォローして……

「……半分はな」

「もう半分は！」

傷をえぐっただけだったみたい。やっぱり友達かどうか疑わしいよ。

「ねえ！もう半分は！」

「それで姫路、もう体調は問題ないのか？」

「ええ、もうすっかり」

どうやら無視することを決め込んだようだ。

「うっっっ……」

「大丈夫だよアキ君、きっと大丈夫だから」

「ぐすっ……ありがと……みらい」

「あの……みらいちゃん」

すると瑞希ちゃんが話しかけてきた。

「どうしたの？」

「あの……振り分け試験の時はすみません。私のせいで」

「ああ、その事ならいいよ。過ぎたことだし、瑞希ちゃんも大丈夫だったんだし」

「ほんとうにありがとございます。吉井君も」

「へっ？僕何かしたっけ？」

アキ君は自分が何をしたのか覚えていないようで首をかしげていた。

「ほら、必死に試験監督の先生に訴えてくれたじゃないですか」

「ああ！…いや、その時は無我夢中だったから」

「！！明久お前!？」

「え、なに雄二？」

「お前…無我夢中なんて言葉知ってたのか!!」

「どついつ意味だごらあ!!」

アキ君が勢いよく掴みかかる。

「坂本君言い過ぎだよ！」

「ああ、すまんすまん」

坂本君がぶつきらぼつに謝った後、パンパンと教卓を強めに叩く音が教室に響いた。

「はいはい。その人たち、静かにして下さいね」

さすがに騒ぎすぎたせいで福原教諭に注意されてしまった。謝ろうとした瞬間

バキィッ　バラバラバラ……

教卓が崩れ落ちた。きつと腐っていたのだろう。

「えゝ替えを用意してきます。みなさんはしばらく自習していて下さい」

福原教諭はバツが悪そうにそう告げると足早に教室から出ていった。

「あ、あははは……」

瑞希ちゃんが苦笑いをしていると、アキ君が珍しくまじめな顔で雄二に声を掛けていた。そして坂本君をつれ教室から出て行った。

うゝんアキ君も行っちゃたしどうしよう。……直人のとこいこ。

私が直人君の席に向かうと、直人君は木下君と土屋君……だっけ？と話していた。

「おゝい直人君」

「ん？…なんだみらいか、どうした」

「え？いや、たんにアキ君と坂本君が行っちゃったから来ただけだよ」

「ほう、明久とあのゴリラがね」

ゴリラって……

「なんじゃ直人、その女子と知り合いだったかの」

「ああ、行ってなつかたな。俺とみらいは中学が同じでな」

「みんなよろしくね」

「う…うむ、よろしくの」

「…ツツッ！！ブシャアアア！！！！」

未来の笑顔にムツツリーニは耐えられなつかたもよう

「ええ！！だ、大丈夫土屋君！！」

「ああみらい、今ちかづくのは逆効果だから」

「で、でも…」

「大丈夫だろムツツリーニ？」

「……………（グッ！！）」

「ほらな」

ほらって…鼻血が凄い勢いで吹き出てたけど。土屋君もそれでいいの？

「なになに、面白そうな事やってるね君たち」

「む、おぬしはたしか笹倉…だったかの」

「そっだよ〜でも笹倉じゃなくて美沙って呼んでほしいかな」

「おはよう美沙ちゃん」

「おはよう、ミラリン今日も可愛いねー」

「ちょ、ちょっと美沙ちゃんやめてよ〜」

「ん〜相変わらず抱きここち最高」

「ブシャアアア！！！」

「うお！ムツツリーニさすがに大丈夫か」

今回はさすがに心配みたい、というよりそろそろ離してほしい。

「死してなお、一片の悔いな…し」

「ムツツリーニ！！……で二人は知り合いなのか」

「変わり身はやくない！！」

「大丈夫だろう、カメラを構えてる余裕があれば」

見てみると土屋君は倒れながらもカメラのシャッターを切っていた。

「諦めるのじゃムツツリーニ。レンズはすでに血でそまっておる」

木下君がそういうと、どこからともなく輸血パックを取り出して輸血を始めた。ほんとに大丈夫だったみたい。

「あはは、面白いね君たち！気にいったよ」

「ねえ、そろそろ離してよ美沙ちゃん」

「ん〜わかったよ〜」

そういうと美沙ちゃんは離れてくれた。そのあとは瑞希ちゃんと美波ちゃんもまざって皆で話していた。

そのさいに美波ちゃんと和解もできた。ん〜アキ君もモテるな〜。

暫くするとアキ君と坂本君が戻ってきた。そのすぐ後に先生が戻ってきたので席に戻った。

「お待たせしました、それでは自己紹介を続けてください」

「えー、須川亮です。趣味は……」

そのように自己紹介が続き、最後に坂本が立ちあがり教卓の前に立った。

皆の視線が坂本君に集まる。

「俺がFクラス代表の坂本雄二だ。俺のことはまあ、坂本でも代表でも好きに呼んでくれ」

「それはさておき皆に聞きたいことがある」

そう言いながら皆に視線を向ける。

「かび臭い教室、ひび割れて隙間風が通る窓や壁、綿が殆ど入って

いない座布団、ボロイ卓袱台、教室の四方に蜘蛛の巣」

たんとFクラスの設備を上げていく坂本君。心なしか教室内に負の空気が漂ってる気がする。

「そしてAクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい」

そして今度はAクラスの設備を上げる坂本君。あ、次になにするかわかった気がする。隣を見るとアキ君も苦笑していた。

そして坂本君が一呼吸して

「不満はないか？」

そう言い放った。当然Fクラスの反応は……

『『『大アリじゃあつ！！！！』』』』

二年Fクラス魂の叫び！

「だろう？ 俺だって不満だ。このクラスの代表として、大いに問題意識を抱いている」

そうやって坂本君は皆に訴えかけていき、皆もそれに同調する。そして最後にある一言を言って騒動の引き金を引いた。

「Fクラスは、Aクラスに対し試験召喚戦争を仕掛けようと思う」

これがこの物語の全ての始まりだった。

自己紹介（後書き）

直「なんだか長くね」

「今回はね」

明「文字数がバラバラで読みづらいでしょ」

「うぐ…」

直「やれやれ。まあ、これからもよしくたのむ」

明「どうか見放さないでやってください」

士気向上と蒼赤の悪魔（前書き）

バカテスト

以下の問いに答えなさい

「調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい。」

姫路瑞希の答え

「問題点：マグネシウムは火にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。」

合金の例：ジュラルミン」

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』ではダメという引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

星野未来の答え

「問題点：マグネシウムは火にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。」

合金の例：鉄」

教師のコメント

問題点は正解ですが、用いるべき金属は引っかかってしまいましたね。鉄は合金ではないので不正解となります。

笹倉美沙の答え

「問題点…
合金の例…」

教師のコメント
おや？白紙ですか。解き忘れにはきおつけてください。

吉井明久の答え
「合金の例…未来合金（すごく強い）」

教師のコメント
すごく強いと言われても。

霧沢明人の答え
「問題点…マグネシウムは火にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。
合金の例…ジュラルミン」

教師のコメント
おや？知らない生徒の解答がありますね。正解ですが一体誰でしょう？

士気向上と蒼赤の悪魔

坂本君は教卓に立ちとんでもないことを言い放った。それに対して、Fクラスから反発が起きた。

「勝てるはずがない」

「これ以上設備が落ちるのは嫌だ」

「姫路さんがいたらなにもいらない」

「笹倉さん最高！」

「星野を思いきりめでたい」

Fクラスから発せられるブーイングの数々。しかしその半分以上がおかしい気がする。

いくら底辺Fクラスでも、Aクラスとの実力差に気が付かないものはいない。

ここで一度文月学園の制度をおさらいしておこう。

ここ文月学園では、点数の上限がないテストが採用されている。一時間の制限時間内に、無制限にテスト問題を解いて何点でもとることが出来るのだ。

そして、ここは科学とオカルトと偶然から生まれた試験召喚システムを世界で唯一搭載している。

試験召喚システムとは教師立ち会いの下、テストの点数に応じた強さの召喚獣を呼び出し戦わせることが可能となる。これを試験召喚戦争という。

試験召喚戦争はコレを利用したクラス単位の戦争となる。ゆえに、

クラスごとの生徒数は一定である以上、個々のテストの結果の合計が、そのままクラスの総合的な戦力となる。そしてこの戦争にかつたクラスは負けたクラスと設備を交換することができるとだ。

つまり、最高クラスの、Aクラスの生徒にFクラスの生徒が勝つにはAクラス一人に対してFクラス五、六人、相手によっては十人束になってかつかても勝つことができないのである。

よってどうあがいても勝つことなど不可能としか思えない。しかし、坂本君は自信満々に言い放つ

「皆の言いたいことはよくわかる、だがこのクラスには勝つことのできる要素がそろっている。今からそれを説明してやる」

坂本君は自信満々にそう言い切りクラスを見回しあるいつてんで視線を止めた。

「おい康太。姫路と星野のスカートの中をのぞいてないで、前に出てこい」

「……………!!!(ブンブン)」

「「ひゃっ!!」」

うう、いつのまに、見られてないよね。

土屋君はいまだに明らか覗き否定している。そして土屋君は頬の置の痕をさすりながら教卓に向かった。

「みんな紹介しよう。こいつがあのある有名なムッツリーニだ」

「……………！！（ブンブン）」

ムツツリーニと言う名に、クラス全体がざわめいた。

その名は男子から畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑を持ってあげられており、その正体は謎…だったんだけどさっきの会話ですっとムツツリーニって言われてたし、今坂本君にばらされたからもう謎じゃないね。

「バカな、奴がそうだと言うのか？」

「だが見る、いまだ必死に手で押さえて隠そうとしてるぞ？」

「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ」

周りは皆納得しているのに、土屋はいまだに否定していた。

「姫路の事は説明するまでもないだろう。皆だってその力は知ってるのと同じだ」

「えっ？ わっ、私ですかっ?!」

「ああ、主戦力だ。期待している」

「そっだ、俺達には姫路さんが居るんだ！」

「彼女なら、Aクラスにも引けを取らない」

「ああ。彼女が居れば何もいらぬ」

「それに笹倉美沙もAクラスなみの成績を持っている」

「私の出番かい？」

「なに！」

「凄そうと思ってたけどここまでとわ……」

「そうだよ、皆がんばるお」

「……イエス！姉さん！！」「」「」

凄い勢いで士気があがっていく。

「木下秀吉だっている」

「うむ？ワシかの？」

「確かあいつ、演劇部のホープで木下優子の……妹？」

「弟じゃ……！」

「星野みらいもテストを途中で抜けただけで、CとBクラスなみの
実力を持っている」

「おお！そうなのか……！」

「ロリっこ最高！」

「まさに見た目は子供、頭脳は大人だ！」

「私子供じゃないよ！？それと最後の人なに上手いこと言ってるの！」

まったく失礼な！私はちっちゃくなんてないんだからね。

「ククク……コホン、まあそれはそれとして」

「ちよつと坂本君！なに笑ってるの！」

「すまんすまん、続けるぞ」

「このクラスにはこいつがいる！おい直人でてこい」

「いちいち命令するなよ」

そついうと直人君はゆっくり立ち上がって前にでてきた。

「聞いて驚けこいつはあの蒼赤そつせきの悪魔だ！！」

「」「」「なんだと！！」「」「」

坂本君がそついうとクラス全体から驚きの声が上がった。なに？蒼赤の悪魔って？

「まさか、奴がそつなのか！」

「そつ言われると確かに目が蒼と赤だ」

「もしそうなら俺たちはどうなるんだ！」

なに！？一体なんなの！？直人君一体なんて噂されてるの！？

「ねえ坂本君、一体なんなの蒼赤の悪魔って」

「ああ、俺が聞いた噂では、早朝に木々をなぎ倒してるやつを見たとか」

それってただ直人君が早朝訓練してただけなんじゃ。

「それと、街中でチンピラをボコボコにして子供を誘拐したとか」

それってこの間の買い物とき、変な人たちに絡まれて撃退した時のことなんじゃ………というか誘拐って私の事！？

「俺が最近聞いたのはこんなところだな。他にもたくさんあるが目撃者の共通証言が目の色が蒼と赤だった。よって蒼赤の悪魔っていうわけだ」

「……何か凄く誤解されてるとしか」

「まあ集団心理ってわけだ、それに噂してもんは大げさに広まるもんだ。あいつも気にはしてないさ」

「まあ落ち着け、その蒼赤の悪魔も今は俺たちの仲間なんだ」

「そ、そうなのか」

「だがそれなら、これほど心強いことはない」

たしかに頼りになるけど…今の話戦争と関係ないんじゃない

「それにこの俺も全力をつくそう」

「確かに何かやってくれそうな雰囲気があるよな」

「そういえば坂本のヤツは、小学生の頃は神童とか言われてたはずだ」

「てことは、振り分け試験の時は体調不良かなんかだったのか」

「なんだよ、Aクラスレベルが三人もいるんじゃないか、このクラス」

クラスの士気がこれでもかと言うくらいにあがった

「そして吉井明久だっている」

のがいつきに下がった。

「ちょっと雄二ー!!どうして僕の名前がそこででてくるのさ!ぜんぜんそんな必要なかったよね?!」

「誰だ? 吉井明久って」

「いや知らん」

「なんとなく聞き覚えがあるようなきが…いや、気のせいだな」

皆あんな大合唱したのに覚えてないの!?

「知らないなら教えてやろう、この明久はなんと、観察処分者だ」

「それってバカの代名詞じゃなかったっけ？」

「ち、ちがうよっ！ちょっとおちゃめな十六歳につけられる愛称だよ！」

「そつだ、馬鹿の代名詞だ」

「肯定するなバカ雄二！」

「で、でも観察処分者の召喚獣は、特例として物を触れるようになってるし便利だよ」

「お、よく知ってたな星野は」

「アキ君の手伝いよくしてたもん」

「む？星野の召喚獣は観察処分者ではないのにどうやって手伝ったのかの」

「うん、確かに触れないけどアキ君の召喚獣には触れるから、押したり持ち上げたりして負担を減らしてあげてたんだよ」

「まあそれでも教師立ち会い下でしか召喚できないし、星野が言ったようにフィードバックで疲労やダメージの何割かを召喚者が被るんだがな」

「てことは観察処分者は召喚獣がやられると本人も苦しいってことか」

「おいおいそれじゃあ、あまり召喚できないヤツがひとりいるってことじゃないか」

「そつだ、まあ居ても居なくてもいい雑魚だ。いざとなったら楯にでもすればいい」

「ひどい！」

「ちょっと坂本君言いすぎだよ！アキくんはちょっと頭が悪いけど、実は優しいし頼もしいんだから！」

「……吉井死ね……」「……」

「miraiストップだ。嬉しいけどそれ以上言うと僕の命にかかわる」
周りを見るとみんな畳にカッターを刺していた。

「それくらいにしとけmirai。そのゴリラにはいずれ罰がくだる」

「んだとこの悪魔野郎！！」

「まあまあゴリ君、それより話を進めよう」

「笹倉！お前までゴリラ扱いなのか！？」

「ほら、笹倉も言ってるだろ。ゴリ男」

「……てめえらあとで覚えとけよ」

坂本君凄く罵倒されてるけどなんだろう？まったく同情できないや。クラスもなんだかしらけきってるよ。

「とにかくだ。まずは小手調べにDクラスを攻め落とす」

「皆この境遇には大いに不満だろう！」

「……当たり前だ！」「……」

「さっきも言ったように俺たちにはこれほどの戦力がある！」

「……おおー！」「……」

「負ける要素など一つもない！」

「……そつだ！」「……」

「ならばペンを執れ！ 出陣の支度を始めるぞ！」

「……おおーっ！」「……」

「お、おー……」

秀囲気に飲まれて瑞希ちゃんまでもが小さく拳を作って挙げていた。かという私も手を挙げているんだけど。

Fクラスの戦争前のテンションは最高潮だ。次回はDクラスに宣戦布告だ。

士気向上と蒼赤の悪魔（後書き）

明「一気に短くなったね」

「基本はこれくらいだ」

直「まあいいんじゃないか」

「次回はDクラスに宣戦布告に作戦会議だ」

明&直&作「お楽しみに！」

ミーティング……したかったなあ（前書き）

バカテスト

問、以下の意味を持つことわざを答えなさい。

「（１）得意なことでも失敗してしまうこと」

「（２）悪いことがあつたうえに更に悪いことがおきる喩え」

姫路瑞希の答え

「（１）弘法も筆の誤り」

「（２）泣きつ面に蜂」

教師のコメント

正解です。他にも（１）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（２）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

坂本雄二の答え

（２）弱り目に蒼赤の悪魔

教師のコメント

私が聞いた噂では困っていた人をボコボコにしたと言っていましたね。

吉井明久・霧乃直人の答え

（１）雄二も木から落ちる・ゴリラも木から落ちる

教師のコメント

君らの友人関係がよく解りました。

遠野李紗の答え

(1) 猿人…ゴリラも木から落ちる

教師のコメント

まさか女子でもいおうとは…最初のは訂正の意味があるのでしょうか？

ミーティング……したかったなあ

「さて明久宣戦布告のための死者になってくれ。大役だぞ」

「下位勢力の使者つて、たいがいひどい目にあつよね？しかも今字が違ったよね」

「気のせいだ。いいから行ってこい。俺を誰だと思っている」

「ゴリラ」

「ゴリ男だな」

「ゴリ君だね」

「……お前ら、そんなに俺を怒らしたいのか」

「まあまあ、坂本君も落ち着いてよ」

荒れる雄二をみらいがなだめている。

「と、とにかく大丈夫だから俺を信じる。俺は友人を騙すようなマネはしない」

「じゃあ、私がいつてくるね！」

雄二がそう言うと、みらいが使者に立候補した。

「ちよつま、待て！お前は行ったらダメだ！！」

「なんで？安全なら、私が行っても問題ないよね？」

「そ、それは」

純真無垢なみらいにはさすがの雄二もかなわないようだ…つつか

「もしかして雄二。僕を騙そうとしてるな！！」

「いや、明久とみらいは人を疑うことを少しは覚えるよ」

「とにかくだ明久、Dクラス宣戦布告してこい」

「いやだよ！ボコられるとわかって行くほど僕はバカじゃないよ！」

「そんなにいやなら私が行こうかアキ君」

「だ、だめだよ、みらいが行くなんて」

「大丈夫だよ。女の子にならきつと手は出さないよ」

「みらリンの場合別の意味で手を出されちゃうかもよ」

「ぶ、物騒な事言わないでよ」

「……だ〜もう！僕が行けばいいんだろ！いいよ！死んできてやるよ！〜っおおおお！〜」

「がんばって〜っ」

そう言うとアキ君は奇声を挙げながら教室を出て行った。

「坂本君大丈夫なの？」

「なにがだ？」

「なにがってアキ君だよ」

「ああ、大丈夫だろう。きつちり死んできてくれるさ」

「酷すぎるよ！ねえ直人君何とかならない」

「ん〜、じゃ、俺も行ってくるよ」

『おい、悪魔が動いたぞ』

『Dクラスの奴ら何人無事かな』

『もしかしたら、不戦勝かもしれないぞ』

「……ともかく行ってくる」

「う、うん行ってらっしゃい」

「やれやれ、あいつはよく明久の世話をやくな。相変わらず噂とは大違いの奴だよ」

やっぱり皆直人君のこと誤解してるのかな。

「うむ、実際あやつは何を考えておるのかわからんからの」

「確かにね。噂だけ聞くとただの極悪人に見えるのよね」

「も〜、木下君も美波ちゃんも誤解しすぎだよ。直人君ほんとうはとっても優しいよ」

「なんだ、星野はあいつのことなにかしってるのか」

「え!…しってることはしってるけど…」

「なになに！何か面白そうな話隠してないかいみらりん」

「…ううん、面白かってわけじゃないんだ」

そう言った後みらいの顔が暗くなってしまったため、それ以上みんなが追及することはなかった。

「……ほぐら、みらいちゃんびろ〜ん」

「ひよ、みひゃひゃんなひひゅんの」

「みらリンには暗い顔は似合わない ほぐら、にっこりにっこり」

「ただいま〜」

そうしている間に二人が戻ってきた。

「おや、あっき〜に、なお君おかえり」

「あ、ただいま。ところで美沙なにやってるの？」

「ただのスキンシップだよ」

「そ、そう」

みらい凄くいやそうにしてるけど。

「なんだ明久、無事だったのか」

人に厄介ごと押し付けて…なんてふてぶてしい奴だ。

「まったく、直人が来てくれなかったらどうなってたか」

「吉井無事だったんだ」

「あ、島田さん。もしかして心配し…」

「じゃあ、うちが殴るよちあるね」

「もうだめ！死にそう！」

とたんにアキ君がのたうち回る。美波ちゃん照れ隠しなのはわかるけど逆効果だよ。

「美波ちゃん…」

「だ、だって」

「それにしても明久よ、よく無事じゃったの」

「え？ああ、最初は確かに襲い掛かられたんだけどね…」

そついうと明久は言いよどむ。

「？ けどなんじゃ？」

「直人が入ってきたとたん襲ってきた人たち、急に動きを止めたと思ったら土下座し始めたんだよ」

「ま、いくら使者とはいえ殴りかかってくるほどの奴らだ、蒼赤の悪魔の事も知ってたんだろ」

「どうでもいいがゴリラ…このクラスの惨状は何があつたんだ」

直人くんがそういうのも無理はないね。クラスの大半が鼻血を出してたおれているんだもん。一体何があつたんだろ？

「…そろそろゴリラって言うの止めないか」

「…で、なにがあつたんだ雄二」

「ああ、星野と笹倉がいちゃつき始めたら、百合の花が見える！！>とか言っつてぶっ倒れたぞ」

なんか直人くん凄いあきれ顔になってるよ。

「…ここがFクラスと思いき知らされる」

「まあ気にするな。それよりほら、ミーティングすんぞ。ついてこ」

いお前ら

「坂本くん、今は授業中ですよ。ミーティングならお昼にしてください」

そういえば今って授業中だった。普通に休み時間と勘違いしてたよ。

時がたちお昼

「よし今度こそ屋上いくぞ。ついてこいお前ら」

坂本くんがそう言うと、私とアキ君と直人くと美沙ちゃんと瑞希ちゃんと美波ちゃんと木下くと土屋くんが立ち上がって屋上に向かった。あ、ちゃんとお弁当も持っているよ。

「ねえムツツリーニ、いつまで頬抑えてるの？畳の後ならもう消えてるよ」

「……………！（ぶんぶん！）」

「いや、いまさら否定しなくてもムツツリーニがエッチなのは皆知ってるから」

「……………（ぶんぶん！）」

「……………何色だった？」

「水色と黄色」

即答だよ

「ちょっと土屋くん何言ってるの！アキ君も聞かないでしょ！」

「ごめんごめん」

「お前ら、いちやっついてないで早く来い」

気が付いたら皆は先に行ってしまった。まずいまずい。

屋上に通じる扉を開けてくぐると、太陽光が差し込んできた。雲ひとつない青空に、爽やかな春風が吹いた。

その春の日差しに、はためく女子のスカートに注視するムッツリーニ以外のメンバーは目を細める。

「やっぱりムッツリーニはある意味凄いよ」

「……………（ぶんぶん！）」

「で、明久、開戦は午後からでよかったな」

「うん」

「それじゃあ、お昼食べたらずぐね。大丈夫なの坂本」

そう島田さんが聞くと雄二はじゃっかん笑みを浮かべながら言った。

「ああ、だいたいの作戦はもう考えた。あとはあとは伝えるだけだからまずは昼をしっかりくっつけ」

「そうだね、はいアキ君今日のお弁当」

「あ、ありがとみらい」

そんな私とアキ君のやり取りを直人くん以外の皆が驚いたように見
ていた。

「え、どうしたのみんな」

「いや、な」

「う、うむ」

「…明久、うらやま死ね」

「ちょっとムツツリーニ！なに物騒なこと言ってるの！？」

なに！みんな一体どうしたっていうのさ。僕なにかした！

「あ、あの」

すると姫路さんがおそろおそろ手を挙げて訪ねてきた。

「あ、なにかな姫路さん」

「その、明久くんとみらいちゃんて、っ、っ、っ、つき合ってるん
ですか！」

姫路さんがそう言うと場の空気が一気に凍った。

「い、いやいやいやいやなんでそうなるの!」

「そ、そうだよ瑞希ちゃん、どうしてもそういう結論に至るの!」

「だ、だって、ねえ美波ちゃん」

「ええ、手づくりのお弁当作ってるし」

「う、うむカップルにしかみえん」

「ち、違うからね皆!もうちょっと落ち着いて、話をさせて」

もう、なんでみらいからお弁当貰っただけでこんな騒ぎになるの。

「やっぱり面白いねこは。ところでなお君は落ち着いているけど何か知ってるのかい」

「ん、まあな。明久とみらいの家隣どうしだしな、あの二人毎日交代で弁当作ってるんだよ」

「ぶくんそうなんだ。みらリンの家に行ったことあったけど気が付かなかったよ」

「ぶつちやけるとな、明久の親がみらいに明久の世話を頼んでるんだよ」

「ほんとぶちやけたね。というよりホントなの!」

「ああ、さらにぶつちやけると、仕送りもみらいに送られている」

「ぶっ…あはは、それはそれは、くくく」

「女子がくくくはないと思うぞ」

「そうかい、でも面白いじゃんそう思わない」

「まあ少しわな。でも実際明久は仕送りは自分におくってほしいって言ってるがな」

「へ」

「俺は今の方がいいと思うがな」

「おや？なんでだい？」

「明久は自分の生活費よりも趣味に金を使うからな。すってんてんになって毎日の食事が塩水になることは必至だ、つつかそうなた」

「なっただんだ！」

「ああ、初の仕送りの時にな。それから仕送りがみらいに送られるようになったというわけだ」

「うんやっぱ面白い　ここにいと退屈しなさそうだよ」

「面白さを求めるなら俺の話よりあの二人の説得のほうが面白いぞ」

そう言つと笹倉は必至で雄二たちに俺が話したような事情を説明している二人を見た。

「確かに面白そう でも聞く限りじゃさそれってね」

「ん？」

「通い妻じゃん」

「……ま、そうなんだけどさ」

「あ、認めちゃうんだ」

「別に否定することじゃないだろ。つつかそれあいつらに言っなよ。場の収集がまたつかなくなるから」

「面白さを追求したい私としては言いたいけどね」

「やめとけやめとけ、これ以上混乱したら戦争に影響がでかねん」

「それもそうか」

明久たちの方もだいぶ収集ついたようだなもう少ししたら落ち着く
だろ。

「実際さ……」

「ん？」

「なお君はどう思ってるあの二人の事」

「お似合いじゃないか」

「はやー！」

「いや、聞いたのそっちだろ」

「私としてはもう少し考えるものかと」

「実際そうじゃないか？むしろつき合っていないのが不思議に思えてくる」

「付き合いの長さかかなり説得力あるね」

「みらいは何故か自分に自信が無いからな。明久はモテるからうかうかしてたらとられちまうぞ」

「まあ、確かにね。私としては皆平等に応援したいんだよね」

「いいんじゃないか、好きにしたら」

「おやん？なお君はアキ×み派じゃないの？」

「アキ×み派って…別にそういうのじゃないって」

そんな話をしていると収集が付いたのか向こうで弁当を食べる準備をしていた。

「お、向こうも終わった見ただし混ざるか」

「なんか誤魔化してない？」

「してないしてない」

明久達のところに行くのと明久がよってきた。

「直人美沙さんとなに話してたの」

「なに、ただの世間話さ、それより早く食おうぜミーティングもしないといけないからな」

「そうだね」

そして作戦をききながらの昼食が続いた。

「それにしても、みらいちゃんのお弁当おいしいですね」

「え、そ、そうかな」

「ええ、かなりおいしいわよ」

「そうでもないよ、直人くんと比べたら」

「そりゃどつうことだ？」

「そのまんまの意味だけど」

「みんな知らなかったけ？直人は料理凄いうまいよ。みらいが教わってるくらいだもん」

『ええっー！！！？』

「おい、その驚きはどつうの意味だ」

「だ、だってねえ」

「はい、どう見ても」

「疑うなら食べてみたらどう」

「そうだな」

「でははいしゃくするかのう」

そう言うと皆は直人の弁当をつまんでいった。それにしてもやけに多いな直人の弁当。

『……………う、うまい』

「ほんと凄く美味しいです！」

「ええ、でも自信なくすわ」

「美味しいねえ。お嫁さんは大喜びだね」

みんな思い思いの感想を言っていく。

「美味じなのう」

「……………（こくこく）」

「人は見かけによらんな」

「お前には言われたくねえよゴリラ」

「まったくです。猿人ごときに直人の事を言われたくありませんね」

「んだとてめえら！もう一片言ってみ…ろ」

「解りました。猿人ごときに直人の事を言われたくありませんね」

「……………いや」

『だれえー！！！』

なにあの人！一体だれ！？何時からいたの！なんで黙々と直人のご飯食べてるの！

「……………あの〜誰ですか」

沈黙に耐えられず姫路さんが謎の女子に訪ねた。

「私か、私は遠野李紗だ」

「で、お前は何をしている」

「見てわからないのか猿人、昼食だ」

「おいおい李紗、いくらなんでも猿人は失礼だろ。せめてゴリラにしとけ」

「てめも失礼なんだよ！大体てめえもなに平然と飯くってんだ！」

「五月蠅いぞゴリラ、食事中は静かにしろ」

「……女子をここまで殴りたいと思ったことは初めてだ」

「お、落ち着いてご、坂本くん」

「今ゴリラって言いかけなかったか」

言いそうになったね。皆がゴリラゴリラ言ってるか言いそうになったね。

「まあまあ雄二、ともかくご飯食べちゃおう」

ここは一先ず昼食を終えたほうがいいだろう。なのでそのまま遠野さんを放置しつつ食事をとることにした。

「ごちそうさま、直人、相変わらず美味でしたよ」

「そうかい、それはなによりで」

「では夕飯も気体していますよ」

「またうち来るのか？たまには自分の家で食べよ」

「私の家は食卓とはいいいません」

「ま、わからんでもないが」

「ですので今日もおじゃまさせていただきます」

「へいへい」

「まてまて、何かつてに終わらそうとしてんだ。直人、そいつとど
ういう関係か説明しろ」

雄二の問いかけももつともだろう。ぼくも果てしなく気になる。特
に遠野さんとおとまりというところが。

「アキ君なにか不純なこと考えてない？」

「え、まさか」

なんでわかったのだろう。

「それでどういう関係なんだい？もしかしてなおうちの恋人かな」

「お前楽しそうだな」

「え、そう」

「ああ、顔に面白そうって書いてある」

「あはは、で、どづいう関係」

「ん、、しいて言うなら明久とみらいの関係かな」

え、僕とみらい？一体どづいう意味。

「あ、美沙が考えてるような関係ではないからな」

「え〜そうなの〜」

「明久達と違って生まれ時からじゃなくて、関係ができたのは保育園あたりだけだな。あと似てることといったら家が隣同士ってところかな」

「恋人じゃないの〜」

「違うといってるだろ」

「お前の色恋はどうでもいい俺が聞きたいのは…」

「恋人じゃないって言うてるだろ、学習しろゴリラ」

「んだとこの悪魔が！」

「おいお前」

「あ、なんくバキツ>だ」

うわ〜屋上の手すりが真っ二つ。一体どこから木刀だしたんだろ。

「ゴリラ、つぎ直人の事を悪魔と呼んでみる！その手すりが未来のお前の姿だ」

「い、イエス」

未来の雄二は真ん中から真っ二つか。

「まあ、落ち着け李紗」

「しかし直人！」

「二度言わせるきか」

「…ッ、わかりました」

何だろう、今直人が凄く怖かったような。まあ直人のおかげで場は収集できたね。

「改めて自己紹介いたします。私は遠野李紗。二年Cクラスです」
なんだ、改めてみたらまともそうじゃないか。

「趣味は剣道です。それと、直人を悪魔と呼んだり傷つけるやからは男女問わず叩き切りますのであしからず」

やっぱり普通じゃなかった。

「それとその貴女、星野みらいさんに間違いありませんか」

「え、あ、はい」

「何時ぞやは直人の事ありがとうございます」

「へ？」

「そちらにいる吉井明久さんです、ありがとうございます」

「ほえ？」

あの時ってなんたる。ぼく直人に助けられたことあっても助けたことなかった気が…

「おい李紗！」

「すみません直人。しかしこれだけは言っておきたかったので、それでは失礼します！」

「あ、おい！…たく」

「ねえみらい、なんのことかわかる」

「…うん、たぶんだけど」

「言うなよみらい、忘れてるならそれでいい」

「う、うん、わかった」

「え、教えてよ」

「明久、世の中には覚えてない方がいいこともあるんだよ。できればみらいにも忘れててほしかったがな」

「なにやら三人で盛り上がっておるようじゃがワシらの事忘れておらんか」

「なんか凄く気になるんだけど」

「一体何があったんです？」

「…気になる……」

「まあまあ、みんな落ち着きなさいな。人には言えないことの二つや二つあるもんさ」

「意外だな」

「何がさ」

「いや、美沙の事だからもつと聞いてくると思った」

確かに。あつて間もないけど美沙さんの性格ならもつと突っ込んでくると思った。

「あのねえ…私だって雰囲気で入り込んでいい話かわわかるよ」

「そうかい、それは助かる」

「まあ、聞いてほしくなつたいつでも聞いてあげるけどね」

「そんな日が来ないことを祈るよ」

「つれないねえ」

「まあ、そんなに知りたきゃみらいにでも聞き入れればいいさ」

「え！さつき僕に教えるなつてみらいに言わなかった！」

「明久は、忘れてるからだ。もしくは解つてないか。それならそれ

で解らないほうがいい」

なんかすごい疎外感。

「だから本当に知りたかったら別に聞いてもいいさ」

「あの、さりげに私に重要なこと丸投げしてない」

「してないさ、別に答えるとは言ってない。みらいの好きにしているさ。ただ聞く方も聞くほうも聞いてはいいが、みらいに無理強いはするなよ」

なんだかんだで、みらいのこと心配してるんだ。

「ところで雄二、さっきから黙りっぱなしだけどどうしたの？」

何時も騒ぎの中心の男が静かだとなにか不気味だ。

「……み」

「み？」

「ミーティングをさせるおおおお……！！！！」

屋上に 雄二の叫び こだまする

ミーティング……したかったなあ（後書き）

明「また伸びたね」

「すみみません」

未「しかも無理やり切った感もあるよ」

「ぐう…仕方ないんだ。気が付いたらいつの間にか」

未「しかもタイトルの割には重たい内容含んでるよ」

明「ねえみらい結局なんだったの？」

李「気にしてはいけません明久」

明「あ、遠野さん」

李「まだ知るときではありません」

明「で、でも…」

李「ありません」

明「は、はい」

未「はは、それではまた」

未&明&李&作『次回をお楽しみに』

戦争前のひと時（前書き）

バカテスト

問、以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly
y.
」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「 *x
」

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

戦争前のひと時

「雄二少しは落ち着いた？」

あれから暫くして雄二がなんとか落ち着いてくれた。

「ああ、すまん、少々取り乱した」

「少々どころじゃなかったがな」

「原因はお前だ……それより確かめたいことがある」

「なんだ？」

「あいつだ、遠野李紗の事だ」

「雄二……またその話題を繰り返すのかい」

まったく、デリカシーの欠片もな奴だな。

「その事じゃねえよ、聞きたいのは何時からいたのかだ」

何時から？そんなことを聞いてどうする気だろう。

「なんだ？李紗が自クラスに情報を流さないか心配なのか？」

あ、そのことか。確かにそれは心配だね。

「ああ、で、どうなんだ？」

「まあかなり最初のほうからいたが問題無いだろう」

「どうしてだ？」

「李紗は食事中は大抵の事は眼中に無いからな、作戦の事は記憶に無いと思うぞ」

「……確かにあの食欲は尋常じゃなかったね」

かなりあつた直人の弁当がみるみる亡くなっていったもん。

「しかも、あれだけ食ってまったく太らないときた。一体栄養がどこにいってるのかね」

「」「」「うらやましい」「」

「なんだ三人とも？ため息なんかついて」

「なお君、女の子には男の子に言えない秘密が一つや百つくらいあるんだよ」

「いや、さすがに百はないよ」

「おややー！」

「話を戻すぞ。あいつの事は解つたがそれだけじゃ信用にかけんな」

「大丈夫だって、李紗は騎士道を重んじる。情報を流すような卑怯なまねはしないぞ」

「はっ！どうだかな！あんな腹ペコ大魔王の騎士道なんて信用なるか…ってどうしたお前ら？急に合掌なんかして」

「雄二、短い間だったけどさようなら」

「おぬしの事は忘れん」

「………来世であおう」

「は？何をいつ…て…」

「遺言はすみましたか」

「ちよっ…まつ…話をき…ギヤアアアアア…！」

さよなら雄二君の事は忘れるまで忘れないよ。

「あの、遠野さんいくらなんでもやりすぎじゃ…」

さすがみらいだ。こんなゴリラにも情けをかけるなんて。

「心配しないでください、みらいさん」

「え？」

「四分の三殺しですので死んではいません」

「ほとんど死んでるじゃん！」

どつやら遠野さんにも情けはあったようだ。

「落ち着けみらい。あいつはこんなことじゃ死なんよ」

「そつだよみらい。大丈夫さ心配しなくて」

「……二人がそう言うなら」

「……俺だけ扱い酷くねえか」

ほら大丈夫だ。

「ところでなんで戻ってきたんだ？」

「一つ言い忘れた事があったので」

言い忘れた事？なんだろ一体。もしかして戦争の事じゃ…

「なんだ？」

「今日の……」

今日のこととはやっぱり戦争の…

「今日の夕食はできたら魚にしてください」

「はいはい」

「それでは戦争頑張ってください。私はみなさんが不利になる情報は流さないのだから」

こ、この人のキャラが読めない。

「それでは失礼します。夕食期待してますよ直人」

「へいへい」

……こんなでこの後の戦争大丈夫かな？

「ほら雄二さつさと起きてこの空気を何とかしてよ」

「それが怪我人にかける言葉か… ったくいいかお前ら、今からあいつが来てからの事を全て忘れる！今日の戦争が終わるまででいいあいつの事は口にするな、わかったな」

『は、はい』

雄二の鬼気迫る表情に皆二つ返事でうなずいた。だいぶ追いつめられてみたいだね。

「ところで雄二一つ聞きたい事があるのじゃが」

「なんだ秀吉？」

「いや、なぜDクラスを攻めるのじゃ？段階を踏むならEクラスじゃし勝負に出るならAクラスであろう？」

「あ、それウチも気になってた。どうしてなの」

実は僕も気になっていた。

「簡単なことだ。明久、今ここにはどんな奴がいる」

「え〜と、美少女が三人と美少女が一人と親友が一人とバカが二人とムツツリが一人いるね」

「誰が美少女だと!?!」

「ええっ!?! 雄二が美少女に反応するの!?!」

「……………(ポツ)」

「ムツツリーニまで!?! どうしよう、僕だけじゃツッコミ切れない!」

「アキ君私幼女じゃないよ!」

「アッキー酷いよ、私をバカなんて言うなんて」

「だ〜もお! 直人なんとかして!」

「はあ…取りあえず落ち着けお前ら。美沙は悪乗りすんな」

「さすが直人じゃの」

「うん、ここまで冷静に対処できるのはむしろ神業だね」

「ムツツリーニは自覚しろ、雄二、お前はそれを本気で言っているのか? それによってこれからお前えの接し方を変えるぞ。みらいは…………取りあえず落ち着いてくれ」

「ねえ！私への説得は！」

「すまん、否定材料が見つからない」

「」「同感だ」「」

「皆なに言ってるの！みらリンは立派な大人だよ」

「美沙ちゃん……」

「みらリンは……こんな立派な果実を持ってるじゃない」

「ちよ、美沙ちゃん！」

「「マーベラスー！」」

「なにやってんだお前ら」

「……なお……と」

「なんだムツツリー」

「しゃ、写真を……たの……む」

「何を言ってるんだお前は」

「やれやれじゃの」

「秀吉、二人の介抱たのむ」

「心得た」

「ん〜ん、肌も柔らかいけどこっちも柔らかい」

「ちょ、それ以上は…ひゃん!」

「ほんと、おっきいわね。どうしたらこんなになるのかしら」

「あの、二人ともそろそろやめた方が……」

「こっちはこっちですさまじいカオスだな。」

「ほら、いい加減にしるお前ら」

「いたっ」

「あっっ」

「はあ、はあ、助かった。ありがと直人くん」

「別に気にすんな」

「うっ、あんた普通女の子をぶっ?」

「口で言ってたら聞いたか?」

「……………」

「なお君…あなた」

「なんだ、美沙も島田と同じこと……」

「私に一発入れるなんて大したもんだよ」

……ほんとこいつは考えが読めん。

「雄二、そろそろ真面目にやれ。時間も時間だ」

「ん？ああ、そうだな」

時計を見ると昼休みはあと十分ほどであった。確かにふざけてる場合じゃないね。

「とまあ、ここにはこれだけのメンツがそろっている。負けるわけがない」

さっきのやり取りを赤の他人に見られたら、ただのバカの集団だな。

「姫路と美沙に問題がない以上Eクラスには真向からいっても勝てる」

「その言い方だとDクラスにはまだ正攻法では勝てぬのか」

「ああ、确实とは言えない」

「それじゃあ、他の理由としては初陣の景気づけか、召喚獣のなれあたりか」

「ああ、その通りだ。いいか、ここにいるメンバーは最強だ、お前達が俺を信じて協力してくれるなら勝てる！」

「いいわね……面白そうじゃない！」

「まあ、頑張るとするよ」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「いっぱい楽しむよ」

「……………(グツ)」

「頑張ろうね！みんな！」

「が、頑張りますっ！！」

みんなやる気もあって士気も高そうだね。

「それじゃやるか、明久」

「うん、僕たちFクラスの力を見せてやるっ！」

「お前の力はあてにしていけないかな」

「ちょっと雄二！」

こうしてFクラスVS Dクラスの戦いが幕を開けた。

FクラスVS Dクラス前編（前書き）

明「とうとう始まったよDクラス戦」

直「気を引き締めていかないとな」

霧「頑張ってね。向こうの世界から応援してるよ」

未「それじゃ始めるよ」

四人「」「」「試験召喚獣召喚！サモン！！」「」「」

FクラスVS Dクラス前編

先ほどDクラスとの戦争が開戦され廊下では激しい戦いが繰り広げられていた。その中で私と瑞希ちゃんと美沙ちゃんは回復試験を受けていた。

「先生、次お願いします」

「私も次おくれ〜い」

「笹倉さん、教師には敬語を使いなさい」

二人はAクラス並みの実力をもっているためどんどん問題を解いていた。

「それじゃ二人とも、私行くね」

「みらいちゃんもう行くんですか?」

「うん、これ以上はできなさそうだからね」

「頑張つてねみらリン、私もすぐ行くよ〜。あ、でも少しは取っ
いてね」

「私に言われても……」

「笹倉さん私語は謹んでください」

「ごめん、ごめんタカッチ」

「……あなたがこの成績をとれるのが不思議です」

美沙ちゃん先生も全員あだ名で呼ぶんだね。

「お、星野、回復試験はもういいのか」

「うん、私はどうしたらいい？」

「そうだな……明久達のところに行つて手をかしてやつてくれ。あと明久にこの手紙を渡してくれ。星野は中身を見るなよ」

「わかったよ」

見ちゃだめつて一体何が書いてあるんだろ？

所かわつて戦闘中の廊下前最前線

「お前ら、絶対一人であたるな！必ず二人以上であたるんだ！」

最前線では直人と秀吉が隊長として指揮をとっていた。

「不味いぞ直人！少しずつじゃが押されはじめておる！」

「わかつてる。実力は向こうの方が上だからな。このままじゃじり貧だ」

「Fクラス隊長の首この勝木正平が貰つたー！！」

するとDクラスの人が突っ込んできた。

「直人！」

「心配するな、秀吉は他の奴のフォロワーに専念してくれ。Fクラス霧乃直人が受ける！」

「「サモン!!!」」

光とともに現れる直人と相手の召喚獣。

Dクラス勝木正平 数学104点 VS Fクラス霧乃直人 数学89点

「……直人よ」

「なんだ秀吉？点数なら大丈夫だこれくらいどうとでもなる」

「おぬしの召喚獣……どこかでみた事のあるベルトをしておらんか」

「お、知ってたか秀吉。これはあの仮○ライダーディケ○ドのベルトだ！」

いや〜召喚獣の装備がこれとか最高だな。

「いや……どうしてそれが召喚獣の装備になるのかすさまじく気になるのじゃが？」

「さあな、俺が好きなものにシステムが影響受けたんじゃないか？」

「そんなバカなことが」

ほんと掟破りの男じゃの。対戦相手も呆れておるようじゃ。

「そんな幼稚な召喚獣、一撃で倒してやる！」

そう言いながら相手は直人の召喚獣に突っ込んでくる。

「なんだお前、知らないのか？」

そういうと直人は、相手の一撃を剣でいなしてその召喚獣の顔を殴り飛ばした。

「仮面ライダーのパンチ力を一トンを超えているんだぞ」

「それ召喚獣と関係ないじゃろくдар>!!！」

勝木正平 数学84点

やはり点数差があるせいかあまり減っていない。

「ふむ…やはりそこまでははんえいされないか」

「直人…大丈夫なのか」

「心配ないさ、いくら点数が高くて…」

「このおおお!!！」

また相手の召喚獣が剣を構えて突っ込んできた。

「真つ二つになれば死ぬだろ」

その攻撃をかみひとえで躲して相手の首を一刀両断した。

「なっ！！」

勝木正平 数学0点

「戦死者は補習室で補習！」

「げ！て、鉄人！」

試験召喚戦争のルールにのっとて、点数が0点になったものは戦争が終結するまで補習室で補習を受けることになるのだ。

「さあ来い！みっちり補習してやる」

「い、いやだ、あれは補習なんかじゃない、拷問だ」

「これは立派な教育だ！趣味は勉強！尊敬する人物は二宮金次郎という理想的な生徒になるようにしてやる！」

「それって洗脳じゃ…くはっ！」

「五月蠅い、西村先生早く持って行ってください」

「ごちゃごちゃ言うDクラス生徒に直人が一撃をいれ気絶させた。

「霧乃…これでは補習させられないではないか」

注意するところはそこじゃないと思つたのじゃが

「容赦ないのおぬし」

「いいんだよ、相手の戦意も下がるし一石二丁だ」

「そういうものかのう?」

「それより来るぞ! 気を引き締める秀吉!」

「こころえた!」

こうして最前線の戦いは激しさを増していった。

所変わって中堅部隊待機場所そこは吉井明久と島田美波が隊長を務めていた。

「吉井! 木下たちがDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入つたわよ!」

旧校舎の廊下をポニーテールの少女が駆ける。報告を聞きながら、明久は真剣な面もちでつぶやいた。

「ああ、胸か」

「あなたの指を…く、お、落ち着くのよ私」

明久のつぶやきが聞こえたのか、美波は肩をワナワナとふるわせる。

「そ、それよりも！ 試召戦争に集中しないと！」

危険を感じとつたのか明久はそう言い場をごまかした。

前線では、直人と秀吉率いるFクラス先遣隊が戦端を開いており、明久たちからも、展開されたフィールドに召喚獣が召喚される様が見えた。

明久と美波は渡り廊下とFクラス中間点、Eクラス近辺に中堅部隊を展開していると、生徒を連れた鉄人の姿が見えた。その生徒はどつやら気を失っているようだ。

まさか戦死した生徒は気絶させられるのか！

すると明久の顔が引き締まった。

「島田さん！ 部隊全員に通達！」

「なにか作戦を思いついたの？」

「総員退避と」

「待ちなさい！ いきなりどうしたの！」

「大丈夫！ 直人がいれば何とかしてくれるさ！」

直人の作戦は逆効果だったようだ。

「落ち着きなさい吉井！ 部長がなに臆病風にふかれてるの！」

そ、そうだよねここは落ち着かないと。そうさ、きつとあの生徒は負けたシヨックで目の前が真っ暗になっただけさ。

「島田さんゴメン。少々取り乱したよ。僕たちが逃げだしたら、戦線が崩壊してイッキに押しこまれちゃう。そうなったらせつかく回復試験を受けている三人に顔向けができない」

「ええ。だからウチ達は頑張らないといけないの」

島田さん、君はなんて男らしいんだ。

なんだか凄く残念なほめ方をされた気がしたわ。

「そうだね島田さん。とにかく今は、勝利することを目指そう」

「吉井隊長、前衛部隊が後退を開始したぞ」

明久と美波の時が一瞬止まった。

「吉井……ウチらガンバったわよね」

明久はくえ！>とした表情になる。

「……………そうだね。悔しいけど僕たちはよくやったよ」

悩んだが誘惑に負けたようだ。

きつと大丈夫さ。直人がきつと何とかしてくれる。

「おいアキ君、美波ちゃん」

「みらい！」

すると補充をおえたのかみらいがこっちに向かってきた。

「早いわね。もう終わったの？」

「私は終わったけど、まだ二人が途中だよ」

そうなのか、せっかく来てくれたのにこれから撤退するとは言わずらいな。

「ごめんみらい。実は今から……」

「あ、そうだ！坂本君にこの手紙渡してってたのまれたんだ」

雄二から？一体なんだろう？

「なんて書いてあるの」

「解らない。私は中を見ないでって言われたから」

「なになに、なんて書いてあるの」

『逃げたらクロス』

「総員突撃ー！！」

僕は紙をみた瞬間そう叫びながら戦場に向かって全力ダッシュして

いた。もちろんFクラスの勝利のためさ。

「ちょ、ちよとアキ君！一体なんて書いてあったの!？」

「は、今は戦争に集中しましょ」

「う、うん」

僕が走っていると可憐な少女が見えてきた

「秀吉！無事だったんだね！」

「おお明久、助太刀にきてくれたのか」

「うん、戦況はどんな感じ？」

「知つての通り一部戦線が押されてきておる、直人のおかげで持つてはいるが時間の問題じゃ」

「そっか、秀吉自身はどう？まだ戦えそう？」

「うむ、正直言うときつい。点が減ってないのは直人くらいなものじゃ」

周りを見ると直人の召喚獣が全員分のサポートをしていた。

「よく直人はあそこまで召喚獣を動かせるのかの」

「まあ直人もみらいと一緒に仕事手伝ってもらったこともあるからね」

「そうであつたか」

「おいアキ君」

「吉井！」

「みらい、島田さん、来てくれたんだ」

「何言ってるの、あんたが総員突撃って言ったんでしょ」
「そう言えばそうだった。」

「おい明久たち！来たんだったら手伝ってくれ。さすがに一人じゃ限界がある」

「解つたよ直人。秀吉は回復試験に行つてきて」

「わかつたのじゃ。あとは頼むぞい」

「他にもやばそうな奴らは秀吉についていけ」

「」「」「おう！」「」

「逃がすな！」

「打ち取るんだ！」

「させるか！明久、みらい、手を貸せ！島田は他の奴らのサポートだ」

「了解！！」

「所詮Fクラス三人だ！袋叩きにしてしまえ！」

「サモン！！」

「気を抜くなよ二人とも！」

「わかってる！」

「頑張るよ！」

「サモン！！」

すでに現れていた直人の召喚獣の両隣に、学ランを着て木刀を持った明久の召喚獣と、白衣を着て注射器をもったみらいの召喚獣が姿を現した。

Dクラス×6 数学平均110点

Fクラス 霧乃直人 吉井明久 星野未来 数学 84点 68点
156点

「吉井の召喚獣は見るからに雑魚だ、霧乃と星野をねらえ！」

Dクラスの塚本くんが作戦を飛ばす。なんて失礼な！

「星野の召喚獣も点のわりには弱そうだな」

「「ちよつと！失礼だよくじゃないか>！」

「言わせとけ、明久、みらい」

「それじゃ、まず一人だ！」

「ひよつと！」

「え！」

明久の召喚獣に突っ込んできた召喚獣を足を引っ掛け転ばせる。

「みらい！」

そして木刀でみらいのもとに吹き飛ばす。

「了解！えい！」

そしてその召喚獣を直人の方に蹴り飛ばす。

「有言実行だな、まず一人だ」

そして直人の召喚獣が剣で切り裂くと、相手の召喚獣は消えっ
つた。

「なっ！」

やられた本人とDクラスは啞然としていた。

「ひ、ひるむな、一斉にいけ！」

「みらい、サポートよろしく。明久行くぞ！」

「OK」

みらいの召喚獣を挟んで直人と明久の召喚獣がたたずむ。

「くっ！なんであたらないの！」

「そんな単調な攻撃なんて」

明久の召喚獣は観察処分者の操作技術をいかして相手の攻撃を避けていく。

「ち、近寄れない！」

「どうした？かかってこいよ」

「畜生！！！」

直人の召喚獣は、ガンモードで相手の召喚獣を寄せ付けず挑発をして相手をイラつかせていた。

「隙ありだよ！」

明久の召喚獣に攻撃するため大振りになった手に、みらいの召喚獣が注射器を投げつけ武器を落とした。

「しまった！」

「これで二人目」

そして明久の召喚獣が相手の首に木刀を突き立てた。

「安尾！」

「ぼつつとしていいの？」

「え？」

仲間がやられて油断していた召喚獣に、みらいが大量の注射器を投げつけ串刺しにした。

「うっ、なんか寒気がするよ」

串刺しになった召喚獣は静かにめされていた。

「これであと二人だ」

直人の方も動きが鈍った召喚獣の脳天を打ち抜き倒した。

「一気に決めるか、みらいあれ頼む」

「わかったよ、何点くらい？」

「二十点あればいい」

「了解」

そう言つとみらいは自分の召喚獣の手首に注射器をさし、そしてそ

の注射器を直人の召喚獣に刺した」

「見方をさした！」

「いや見ろ！あいつの召喚獣の点数があがってる」

みらい 数学136点 直人 数学104点

「見たか！みらいの召喚獣は自分の点数を見方に与えられるんだぞ」

「明久、敵に余計な情報を与えるな」

「あ！……ご、ごめん」

「まあ、いいさ。これでしまいだ」

すると直人の召喚獣はカードを取り出しベルトに通した。すると電子音が鳴り響いた。

『ブラスト』

そして直人の召喚獣が銃口を相手に向けると、そこから無数の弾丸が発射された。

「な！」

「にー！」

予期していなかつたかた弾幕になすすべなく、相手の召喚獣は飲み込まれていった。

「ぜ、全滅だと」

『すげえよ、三人でDクラス六人倒しちまった』

『さすが蒼赤の悪魔だ』

『勝てる！これなら勝てるぞ俺たち』

Dクラスを三人で倒したことにより、こちらの士気も上がった。

「よし、明久は島田たちの方にサポートに行ってくれ、みらいは引き続き俺のサポート頼む」

「わかったよ」

「了解！」

「いいかお前ら！全力で行け！油断はするなよ！」

「……ラジャー」「……」

「くっ……Dクラス勢いに流されるな！」

こうしてFクラスVS Dクラスの戦争は佳境に入っていた。

FクラスVSDクラス前編（後書き）

召喚獣プロフィール

霧乃直人

装備は仮面ライダーディケイドの装備。ライドブッカーのソードとガンモード、を駆使して闘う。日頃鍛錬にいそんでいる空手の技が反映されているため素手でも強い。点数に応じて使えるカードが増える。

例)五十点『スラッシュ』 百点『ブラスト』 百五十点『ファイナルアッタク』

カードを使うと二点消費する。ファイナルアッタクは一回の戦闘で一回限りで二十点消費。

カメンライドカードは何点でも使用可能。

腕輪使用でコンプリートフォームになる。

通常カードに消費点数がなくなる。ライダー召喚に十点消費。

ファイナルアッタクじ五十点消費。三回ファイナルアッタクをしようしたらもとに戻る。

星野未来

装備は白衣に注射器。白衣の裏にはほかにメスなどの治療道具がある。

特殊能力で自分の点数を分け与えられるほか、パワー強化、防御強化などサポート能力に優れている。強化は使用点数により持続時間がアップ。自分にも使用可

例)五点『三十秒』 十点『一分』 百点『そのバトル中』

重ねて使うことで強化の度合いが上がるが、持続時間は増えない。

腕輪使用で自分を含め五人まで全ての点数をもとに戻し全能力五分間強化。

FクラスVS Dクラス後編（前書き）

「今回でDクラス戦は終了だ」

霧「今日は皆はいないんだね」

「皆は戦争中だからね」

李「直人の活躍に期待するがいい」

「読者になんて事を…」

霧「はは…」

「それとオリキャラ追加のお知らせが」

？「私たちは清涼祭からの登場よ」

？「よろしくね」

「ヒントは姉妹、姉は老け専、妹は幼児愛倒錯者、わかる人ならこれわかる」

？「また直くんに会える」

？「いい感じに老けてくれてるかしら」

FクラスVS Dクラス後編

あれから少したち、一部戦線が押され始めた。

「くっ…秀吉たちはまだなの」

「まだよ、もう少し耐えるのよ吉井」

こっちの戦力も減ってきてしまった。直人とみらいも囲まれちゃってるしどうしよう。

「お姉様！ やつと見つけましたわ！ 五十嵐先生早くこちらに！」

そう言いながら縦ロールツイント少女が美波に向かって行った。

「み、美春?! く、抜かったわ」

美波はあわててそちらにサーベルを向けさせる。

「行きます！ サモン！」

光が収まると、魔法陣の中から美春と呼ばれていた少女にそっくりな召喚獣が出現していた。

「……お姉さまに捨てられて幾数日、美春は、美春はこの瞬間を待ち続けていました！」

「もう！ いい加減うちのことは諦めなさいよ！」

そう言うと、島田さんの召喚獣が打ち込んできた相手の召喚獣と打ち合いを始めた。

「イヤです！ お姉さまは、いつまでも……いつまでも、美春のお姉さまなんです！」

点数の差があるのか島田さんの召喚獣が押されはじめた。

「来ないで！ ウチは普通に男が好きなの！」

「嘘です！ お姉さまは美春のことを愛しているはずですよ！」

どう見ても島田さん本気で嫌がっているよ美春さんとやら。

「島田さん！ 点数差があるから真向からの勝負は不利だよ！」

「そんな、こと、言われても、細かい、動作は、できない、のよ、きやつ！？」

明久のアドバイスのむなしく力負けした美波の召喚獣が武器を弾かれる。

島田美波 化学53点 清水美春 化学94点

遅れて二人の点数が表示された。これだけの差なら弾かれても仕方ないだろう。

「ここまですっ！」

そのまま倒れた美波の召喚獣に、清水さんの召喚獣が剣を突きつけ

た。

「さあお姉さま、ここまでですね」

「ほ、補習はいやくー!!」

「補習？何を言っているんですお姉さま、行くところは……」

そう言いながら清水さんは保健室に目をやった。

「よ、吉井フォローを！このままじゃ私、補習より恐ろしいめに合
いそうだわ！」

「邪魔をすれば殺します。誰であろうとも……」

ほ、本気の殺気だ。

「明久！怖いと思うが頑張ってくれ！」

「アキ君頑張つて！」

遠くから二人の声援が聞こえてくる。そんな事言われたら……やる
しかないじゃないか！

「Fクラス隊長吉井明久まい……」

「邪魔者は！ コロス…コロ…スコロ…コロコロ」

決意がへし折られそうだ。

「死になさい!!」

「しまった!」

僕が怯んだ瞬間に清水さんが突っ込んできた。不味い!かわせない!

「明久!」

すると横から銃弾が飛んできて、清水さんの武器を弾き飛ばした。

「なっ!?!」

「いまだ!」

直人が作ってくれた隙に、清水さんの召喚獣の首に木刀を突き立てた。そのまま清水さんの召喚獣は消えて行った。

「霧乃の首貰ったー!」

「ぐっ!」

僕を助けるために隙ができてしまった直人の召喚獣を相手の召喚獣が切りつけようとした。

「くらえ!」

「やられるかよ!」

相手は直人の召喚獣の腕を一本落としたが、残った腕で相手の召喚獣の脳天を打ち抜いた。

「直人くん大丈夫！」

「なんとかな。でも少しきついな」

直人がそういつと召喚獣の点数が表示された。

霧乃直人 化学21点

どうしよう、僕のせいで……

「明久、ポケットとしてないで島田を早く何とかしてやれ」

島田さんの方を見ると、清水さんは召喚獣がやられたのにも関わらずいまだ島田さんを襲っていた。

「吉井！早く何とかして！」

「お姉さま、お姉さま、はあ、はあ」

「う、うん西村先生！戦死者です、補習室に連行してください！」

ここは鉄人に任せるのが得策だろう。

「おお清水か、みっちり勉強漬けにしてやるっ」

「せ、先生！後少し時間を……おのれ吉井明久に霧乃直人め……この恨み必ずはらします！」

清水さんは危険な台詞をはきつつ連行されて行った。

「吉井、待たせたな」

「須川くん！もう終わったのかい」

「いや、まだもう少しかかりそうだ、俺は単独できただけだ」

「そう、それじゃあ直人救出を手伝って！島田さんも！」

直人とみらいは限界だ！早く救出しないと。

「わかった！」

「飯は返すわよ！」

「行くよ！」

「「おお！……」

「くらえ！」

「「おお！」

「「やあ！」

「ひえ〜！」

直人の腕が一本になったことで、囲まれていた直人とみらいは危険な状態に陥っており、直人がフォローしていた部隊は二人を除いて全滅していた。

「直人くん何とかならないの!」

「さすがに避けるだけで手一杯だ」

いくら操作技術がある二人とはいえ限界が近づいていた。

「何か使えるカードないの!」

「点数が点数だ、それにこの状況で片腕じゃ装填もできん!」

「二人とも!今いくぞ!」

「合流させるな!確実に打ち取るんだ!」

二人に合流しようとしたがDクラスの人に阻まれる。

「しょうがない、みらい、お前の召喚獣を明久達の方に投げろぞ!」

「え!それじゃ直人くんが!」

「心配するな、腕一本で不安だが奥の手がある。行くぞ!」

そう言うと直人くんは武器を放り投げ、相手が怯んだすきに私の召

喚獣をアキ君たちのもとに放り込んだ。

「うわ！」

なんだ！何かが飛んできたぞ！

「つて、みらいの召喚獣じゃん！」

「危なかった、着地失敗するところだったよ」

「みらい無事だったんだね」

「うん、でも早くしないと直人くんが」

そうだった、まだ直人があの中にいたんだ。

「おい！早く何とかしてくれ、もってあと三十秒くらいだ！」

「くそ！近づけない」

「何なの一体！？」

直人の召喚獣は片手一本で近づくと相手を吹き飛ばしていた。

「ち、単体で行くな、一斉にかかるんだ！」

Dクラスの塚本くんの指示が飛ぶ。直人の表情もなんだか険しくなつたようだ。

「どつすんのお吉井！このままじゃやばいわよー！」

「そんな事言われても」

「アキ君痛いけどちょっと我慢してね」

「ほえ？ま、まってみらい！せめて心の準備を」

「そんな時間ないよ！えいつ！」

そう言うとみらいは明久の召喚獣に二本の注射器さした。

「く~~~~!!」

フィードバックで痛いのが明久はうなり声を上げていた。

「ちょっとみらい！何してるの！」

島田さんは、みらいのした事の意味が解らないようで声を荒げていた。

「大丈夫だよ島田さん、それよりみらいどれくらい？」

「パワー、スピード、ともに一分だよ」

「わかった、行くぞ！」

そう言うと明久の召喚獣は、今までとは段違いのスピードで敵の間を抜けて直人のもとにたどり着いた。

「な、なんなのみらいあれ！吉井の召喚獣がものすごく速くなった

「んだけど！」

「あれはね、私の召喚獣の能力の一つで能力強化だよ。消費点数に応じて指定した能力をその時間帯だけ強化するんだよ。さっきアキ君に使った強化はパワーとスピードを一分間だよ」

「なるほどね、それで吉井の召喚獣のスピードが上がったのね」

「うん」

「でもそれなら霧乃の召喚獣にした方が良かったんじゃないの？」

「さっきは使ってる暇がなかったの。できればアキ君には、フィードバックがあるから使いたくなっかけど場合も場合だから」

「そう、それじゃ私たちも頑張りましょ」

「そうだね」

「直人無事かい」

「何とかな」

霧乃直人 化学9点

「それより明久、強化の時間はあとどれくらいだ」

「えっと…あと四十秒くらい」

「そうか、それまでに何とかしなくちゃな」

「くそ、なんで一人増えただけで突破できなくなるんだ」

明久が入ったことで何とか態勢を整えられたようだ。すると遠くから声が響いた。

「明久、直人無事か！」

「雄二！」

「やっと増援が来たか」

「く、Dクラス！ここは一端ひくぞ」

そう言うとDクラスは二人の包囲を解いて退散していった。

「よし、こちらも残存戦力を回収して教室へ戻るぞ」

こうして、一時的に両軍は戦力の回復をはかるために撤収した。

「よくやったなお前ら。おかげで、補給組はだいぶ回復できた」

「そう？　じゃあ、もしかして……」

「ああ、授業を終えて下校する生徒も、教師も増えている。頃合いだろっ」

雄二はニヤリと笑って回復を終えた2-Fのメンバーに振り向き

言い放つ。

「そろそろDクラス代表の首級を獲りに行くぞ！俺も出る！みんな続けえっ！！」

「くくくおおー！！！！！！！！」

こうして、Dクラス最終戦が幕を開けた。

下校生徒に紛れてDクラス一人に対し、3〜4人で一斉攻撃を行い、瞬時に倒すことで、反撃させることなく撃破していく。

「確実に倒すんだ！絶対に一人で当たるな！」

雄二の指示が飛ぶ。

「さて、俺はあの時の借りを返そうかな」

「Fクラス霧乃直人がDクラス塚本浩二に物理勝負を申し込む。サモン！」

「くつ、Dクラス塚本受けて立つ！サモン！」

霧乃直人 物理266点 塚本浩二 物理109点

「なに！Fクラスが何故そんな高得点を」

「悪いな、物理は得意科目なんだよ」

「ち、ちくしょおおー！！」

塚本がやけになって突っ込んでくる。

「じゃあな」

そう言うと直人は一枚のカードを装填した。

『ファイナルアタック』

その音声が響くと、召喚獣の前にホログラムカードが現れ、それに向かつて銃口を引くと、カードを通過するたびにエネルギーが肥大化していった。

「それ反則だろおおお!!」

そう言うと塚本さんの召喚獣はエネルギーにのまれ消滅した。

「Dクラス塚本打ち取ったぞ!」

直人がそう言うとFクラスから歓声が上がった。

『すげえ!さすが蒼赤の悪魔だ!』

『あんな恥ずかしい召喚獣で勝てるなんてさすがだ』

「お前ら…打ち抜かれなくなったらとっととDクラス狩ってこい
!」

「「ら、ラジャー!!」」

直人がそんな事を言ったその時…

「援護に来たぞ！ もう大丈夫だ！ 落ち着いて取り囲まれないように動け！」

こちらもよく通る声が響く。Dクラス代表の平賀だ。

「Dクラス本隊が来たぞ！」

これで、この周辺には双方の主力が集まったことになる。

「正念場だよアキ君」

「そうだね、みらい、行こう」

明久、みらいコンビも戦場に赴いた。

「本隊の半分はFクラス代表の坂本を狙え！ 残りは包囲されている者を救出だ！ 悪魔には必ず五人以上で当たれ！ 召喚獣の装備に惑わされるな！」

平賀くんの号令に、Dクラス部隊は即座に反応する。そんなに大声で悪魔と言ってしまったって大丈夫なのだろうか？ 遠野さんに聞こえたら真つ二つになる平賀くんを見ることになるのか… 戦争ちゅうだからそれは止めてほしいな。

それはさておき、雄二を中心としたFクラス本隊はあつと言つ間に囲まれてしまった。

「Fクラス、撤退だ！分散して敵を攪乱しつつ後退するんだ！直人は自分で何とかしろ！」

「おい！」

「逃がすな！ 個人戦ならそうそう負けはない！ 追いつめる！」

声に従ってDクラスは行動を始めた。雄二……直人に対して酷くないかい？

ん？Dクラスの人の大半が行ってしまつて平賀くん周りに人がいない。これはチャンスだ！

「みらいチャンスだ！」

「うん！竹内先生Fクラス星野みらいと吉井明久が現代国語でDクラス代表平賀くんに勝負を……」

「Dクラス玉野美紀が受けます！サモン！」

「近衛隊?!」

その後さらに五人ほど追加された。

「悪いけど、君達の動きには特に注意させて貰ったよ。悪魔の使い魔さんたち」

「誰が使い魔!!」

なんて不本意な呼ばれ方だ！

「どちらにしても、悪魔がない君たちに勝ち目はないよ」

「くっ、そうだね、僕たちじゃ無理だったよ」

「残念だねアキ君」

「点数は低いがコンビネーションは凄いと聞いていたからね、確実に倒させてもらっよ」

「できれば僕たちで倒したかったよ」

「まあしょうがないよアキ君」

一呼吸おいて二人は言った。

「あとはよろしくね姫路さん<瑞希ちゃん>に美沙さん<ちゃん

」>

「は？何を言ってるんだ？ 君たちは……」

困惑する平賀は、後ろから肩を軽く叩かれた。

「あ、あの……」

振り向くと、あの有名な姫路瑞希とある意味有名な笹倉美沙が立っている。

「あれ？ 姫路さんに笹倉さん。Aクラスはこの廊下を通らなかつたはずだけど、どうしたんだい？」

「いえ、そうではなくて……Fクラスの姫路瑞希です。よろしくお願ひします」

「同じくFの笹倉美沙だよ」

「あ、はい。どうも」

姫路の丁寧なお辞儀に、平賀も頭を下げる。

「えと、Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

「……あ、はい」

「さ、サモンです」

「サモン」

呆然としながら平賀も召喚獣を召喚する。

姫路瑞希 現代国語339点 笹倉美沙 現代国語312点 平賀
源一129点

姫路さんと美沙さんの召喚獣が、手にした巨大な剣と双剣を素早く振るうと、平賀の召喚獣は、体が三つの肉片になって倒された。

こうしてFクラスVS Dクラスの戦争は終結した。

FクラスVS Dクラス後編（後書き）

明「Dクラス戦終了だ！」

未「なんとか勝てたね」

笹「私は欲求不満だよ」

瑞「まあまあ美沙さん」

「Bクラス戦では出番ありますから」

笹「ホント！頑張るよ」

「今回は戦後処理です」

明「ところで直人どうしたのさつきから黙って？」

直「いや、なんだか前書きのあたりから寒気がしてな」

戦後処理（前書き）

召喚獣データ

笹倉美沙

装備は鎧に双剣をまとった姿。しかし剣で戦うよりも素手で戦うことを好む。操作制度があまりないため難しい技は使えないが、それでも一般生徒に比べると強い。

制度が上がれば難しい柔術の技も使えるため強さはまだまだ未知数。腕輪使用で召喚獣がISの装備をまとった姿になる。飛行能力を得て水を自在に操るほか召喚獣とリンクすることができる。そのため召喚獣を自分の手足のように操れるようになる。

戦後処理

Dクラス代表 平賀源二 討死

「「「「うおおーっ!」「」「」」」」

その報せを聞いたFクラスの歓喜とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡った。

「凄えよ!本当にDクラスに勝てるなんて!」

「これで畳や卓袱台ともおさばらだな!」

「坂本雄二さまさまだな!」

「坂本万歳!」

「姫路さん愛しています!」

「姉さん最高!」

「星野さん結婚して!」

雄二を崇める声が所どころから上がった。そろそろみらい達に熱烈アタックしている輩を見つけたほうがよさそうだ。

「まさか姫路さんや笹倉さんがFクラスだなんて……信じられん」

そう言ったのはDクラス代表の平賀くん。

「あ、その、さっきはすいません……」

姫路さんが平賀くんに謝る。

「いや、謝ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ」

平賀くんは潔くそう言い返した。

「ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか？」

「もちろん明日で良いよね、雄二？」

さすがにもうこんな時間だ、今から作業させるのは苦というものだろう。

「いや、その必要はない」

「え？　なんで？」

「Dクラスを奪う気はないからだ」

は？何を言っているんだこいつは？

「何を言ってるのさ雄二！　せっかく勝ったのに設備を交換しないのさ」

「落ち着け明久、雄二にもなにか考えがあるはずだ」

「直人の言うとおりだ。明久、俺たちの目標はAクラスだ」

「それは分かっているけど、別にDクラスの設備を得てもいいんじゃない」

「今設備を変えてしまうと、それで満足して今後の試召戦争に反対する人が出るかもしれないからか？」

「そのとおりだ直人。明久、少しは自分で考える。そんなんだから、お前は近所の中学生に＜馬鹿なお兄ちゃん＞なんて愛称をつけられるんだ」

「なっ！ そんな半端にリアルな嘘をつかないでよ！」

「おっとすまない。近所の小学生だったか」

「……人違いです」

「まさか……本当に言われたことがあるのか……？」

見ないで！そんな可哀そうな人を見るような目で僕を見ないで！

「と、とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない」

「それは俺達にはありがたいが……それでいいのか？」

「もちろん条件がある」

「一応聞かせてもらおうか」

「なに、そんなに大したことじゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。ただそれだけの事だ」

そういつて、雄二が指したのはDクラスの窓の外に設置されているエアコンの室外機。けどこの室外機はDクラスの物じゃなくて、Bクラスの物だったはずだけだど。

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあると思うが、そう悪い取引じゃないだろう？」

確かに、うまく事故に見せかければ嚴重注意で済み、クラスの皆からうとまれないですむ。

「それはこちらとしては願ってもない提案だが、なぜそんなことを？」

「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな」

「……そうか、ではこちらはありがたくその提案を飲ませて貰おう」

「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行っていいぞ」

「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ」

「ははっ、無理するなよ。勝てっこないと思っっているだろう？」

「それはそうだ。いくら蒼赤の悪魔がいてもAクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社交辞令だな」

じゃあ、と手を挙げてDクラス代表の平賀くんは去っていった。最後まで悪魔って言ってたけど無事に家にたどり着けるかな？

「ねえ雄二、平賀くん無事に帰れるかな？」

「さあな？あいつの運にかかってるだろ」

遠野さんが帰っていれば無事、まだ残っていたら死。平賀くんの運命はいかに。

「まあそのことはおいといて、さて皆、今日はご苦労だった！明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆっくりと休んでくれ！解散！」

雄二が号令をかけると、クラスの皆は雑談を交えながら自分のクラスに戻っていきました。

「みらい、僕らも帰ろうか」

「そうだねアキ君、直人くんもいこ」

「ああ」

僕たちが教室へ戻ろうとしていると、姫路さんがなにやら真剣な表情で雄二と話していた。一体なに話してるんだらう？

「どうした明久？」

「あ、うん、何でもないよ」

まあいつか。

「で、なんだ姫路？」

「実は、坂本君に聞きたいことがあるんです」

手を胸の前に持ってきてきて少し興奮気味のようである。

「なんだ？」

「あの…坂本くんが試験召喚戦争をした理由って」

「ああ、その事か。ま、元々興味があつたが、きっかけは明久が…
な相談をしてきたってコトだ」

「あの、吉井君がそんなことを言い出した理由って……」

「さあな、そう言えば、振り分け試験で何かあつたみたいだが、それと関係があるかもしれないな。バカにはバカなりに譲れないものがあつたってコトだろ？」

「振り分け試験って……それじゃ、やっぱり」

「俺の口から言って良い範囲はこれが限界だと思つが……多分、姫路の想像は間違つていないと思つぞ」

「そうですね…わかりました。ありがとうございます坂本くん」

「ああ、じゃあまたな」

「はい、また明日」

side 明久

「ところで直人聞きたいことがあるんだけど」

「なんだ？」

「あの時遠野さんと暮らしてるって言ってたけどホントなの？」

「……明久、いつ暮らしてるっていった」

「あれ、違ったっけ」

「暮らしてるんじゃないかって、ただ夕食をこちそうになってるって言ったんだよアキ君」

「そうだったっけ、まあいいや。じゃあなんで夕食をこちそうになってるの？」

「ああ、李紗の家はな誰も料理ができないうえに、帰りが以上に遅いんだ。だから俺の家で食わしてやってるだけの事だ」

「ふーん、直人くんも大変なんだね」

「別にそうでもないさ、もう慣れてるし。それよりも問題なのは食費だ」

「へ？」

「昼も言ったがあいつの食欲は尋常じゃない、それに何故かまったく太らん。そのせいで食費が以上にかかるんだ」

「わかる、わかるよ直人。僕もぜんぜん趣味にお金が使えないからよくわかるよ」

「アキ君は十分使っています」

趣味に月十万しか使えないなんて、少ないのもいいとこだ。

「それより明久、今日はちゃんと勉強しとけよ」

「う、うんわかってるよ」

「大丈夫、私がちゃんと見張ってるから」

「そんな、犬じゃないんだから見張らなくても勉強は…ってあれ？」

「どうした？」

「いや、教室に教科書忘れてきちゃったよ。とりに行ってくるから先に帰ってて」

「そうか、それじゃ先に行かせてもらう」

「ご飯作って待ってるね」

「うん、よろしくみらい。直人また明日ね」

「ああ、またな」

ふう、教科書を忘れるなんて僕はドジだなあ。……ドジなだけだよ、
けっしてバカじゃないよ！って誰に言ってるんだろ僕。

「たっだいまー」

どうせ誰もいないし我が家のような気分だよ。

「よ、吉井くん!？」

「え、姫路さん？」

まだ残ってたんだ何してたんだろ？

「あ、あのこれはですね……きゃー！」

「あ、だいじょうぶ……」

すると卓袱台につまずいてしまい倒れてしまった。その拍子に一枚
の紙が流れてきた。そこには

『あなたの事が好きです』

と書いてあった。

「あ、あのそれは」

「……変わった不幸の手紙だね」

「あの、それって凄く困る勘違いなんですけど」

はっ！いけない、少し動揺していたようだ。

「ごめん、少しびっくりしただけだから。その手紙このクラスの人へ？」

「は、はい」

少し照れたように姫路さんが答える。このクラスっていうと雄二あたりかな。あんな外見だけど女の子には頼りになるようにみえるんだろう。……憎たらしい。

「その手紙、いい返事がもらえるといいね」

「あ、ありがとうございます」

「それじゃ僕はこれで。また明日ね姫路さん」

「はい、また明日」

その後明久は帰路につき、みらいと夕食をすませ、直人に言われたとおり勉強して眠りについた。

恐怖の昼食（前書き）

バカテスト

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい
「光は波であって、（ ）（ ）である」

姫路瑞希の答え

「粒子」

教師のコメント
よく出来ました

土屋康太の答え

「寄せては返すの」

教師のコメント

君の回答には、先生はいつも度肝を抜かれます

吉井明久の答え

「勇者の武器」

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

霧乃直人の答え

「ウルトラマンの力」

教師のコメント

「先生はセブンが好きです」

恐怖の昼食

「うあー疲れるよ」

今日は昨日の戦争で消費した分補充にいそしんでいた。

「うむ。疲れたのう」

いつの間にか近くに来ていた秀吉が答える。今日は髪をポニーテールにしているようだ。ううっ、僕のストライクゾーンど真ん中だ。男のくせに僕を惑わすなんて！

「……………（コクコク）」

いつも無口で存在が薄く思われがちなムッツリーニもいる。

「なんかムッツリーニを久しぶりに見た気がするよ」

「……………そんな事実はない」

「そう?」

「よし、昼飯食いに行くぞ！ 今日にはラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

「炭水化物ばかりとりすぎじゃない?」

確かにみらいの言うとおりだと思う。

「ん？ 吉井達は食堂に行くの？ だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「それじゃ、混ぜてもらおうね」

「……………（コクコク）」

ムツリリーニがうなずいているのは下心のせいだろう。島田さんに色気を求めても無駄だというのに。

「なんかウチの悪口考えてない？」

「滅相もごさいません」

なんて恐ろしい勘なんだ。

「そうだ、アキ君お弁当は？」

「あ、まだ渡してなかったけ、食堂で渡すよ」

「なんだ、今日は星野の手作りじゃないのか？」

「別に私が毎日作ってる訳じゃないよ」

「みらいにだけ作らせちゃわるいしね」

「あ、あの。皆さん……………」

立ち上がり、学食に行こうとしたところで姫路さんに声をかけられ

た。

「うん？ あ、姫路さん。一緒に食堂に行く？」

「あの昨日の約束、忘れたんですか？」

「なんだ、なにか約束してたのか明久」

「ああ、そういえばお弁当作ってきてくれるんだっけ」

「ヒメっちの手作りかい、おいしそうだね」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

そう言っつてバックからお弁当を取り出した。

「それじゃこれだけ弁当持ちがいるんだ屋上で食おうぜ」

「そうだね」

屋上で食べたほうがいい気分で食べられそうだ。

「むー……っ。瑞希って、意外と積極的なのね……」

島田さんがそんなことを言っていた。なにが積極的なんだろ？

「それじゃお前らは先に行ってくれ」

「ん？ 雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買って来る。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

「あ、それならウチも行く！ 一人じゃ持ち切れないでしょ？」

「悪いな。それじゃ頼む」

「おっけー」

「きちんと俺達の分をとっておけよ」

「大丈夫だってば。あまり遅いとわからないけどね」

「そう遅くはないはずだ。じゃ、行ってくる」

「じゃあ俺は李紗をさそってくるわ」

「あ、うん行ってらっしゃい」

飲み物を買に行った雄二と美波、遠野さんを誘いにいった直人をおいて僕らは一足先に屋上に向かった。

「天気良くてなによりじゃ」

「そ、そうだね」

何故だろう？ 天気はいいのに寒気が止まらない。

「どうかしたのアキ君？」

「あ、うん、何でもないよ」

きつと気のせいだよな。

「気持ちいいねー」

「……………（コクリ）」

「あの、あんまり自信はないんですけど……………」

姫路さんが重箱の蓋を取る。

「……………おおっ！」「……………」

僕らは一斉に歓声をあげた。凄く旨そうだ。から揚げやエビフライにおにぎりやアスパラ巻きに卵焼きなど、定番のメニューが重箱の中に詰まっている。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に……………」

「……………（ヒョイ）」

「あっ、ずるいぞムッツリーニっ！」

動きの素早いムッツリーニがエビフライをつまみ取りそして、流れるように口に運び……………」

「……………（パク）」

ボタン　ガタガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

「「「「」」」」」」」」」」」」」」

「わわっ、土屋君!?!」

姫路さんが慌てて、配ろうとしていた割り箸を取り落とす。

「……………(ムクリ)」

ムツツリーニが起き上がった。

「……………(グツ)」

そして、姫路さんに向けて親指を立てる。多分『凄く美味しいぞ』と伝えたいんだろう。

「あ、お口に合いましたか? 良かったですっ」

ムツツリーニの言いたいことが伝わったのか、姫路さんが喜ぶ。

「良かったらどんどん食べてくださいね」

「……………みんな、あれどう思う?」

姫路さんに聞こえないくらいの小さな声でみんなに話しかける。

「……………どう考えても演技には見えん」

(土屋くん親指立ててるけど震えてるよ)

みらいの言うとおり、ムッツリーニは足がガクガクと震えていてK
O寸前のボクサーのように見える。

「おう、待たせたな！　へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ
？」

「あつ、雄二」

止める間もなく素手で卵焼きを口に放り込み、

パク　バタン　　　ガシャガシャン、ガタガタガタガタ

ジュースの缶をぶちまけて倒れた。

「さ、坂本！？　ちよっと、どうしたの！？」

ムッツリーニ同様激しく震える雄二を見る。すると、雄二は倒れた
まま僕の方をじっと見て、目でこっ訴えていた。

毒を盛ったなど。

毒じゃないよ。

僕も目で返事をする。いつも一緒に行動している僕らだからこそで
きる技。こっという時は凄く便利だ。

「あ、足が……攀ってな……」

姫路さんが傷つかないように嘘をつく雄二。

「あはは、ダッシュで階段を昇り降りしたからじゃないかな」

「うむ、そうじゃな」

「そうなの？ 坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど」

事情のわかっていない島田さんが不思議そうな顔をする。

(アッキー、ここは事情が分かってないミニミーは退場させた方がいいよ)

確かに余計なことを言い出さないうちに退場させた方が良くもしれないな。

「ところで島田さんその手をついてるあたりにさ」

「ん？ なに？」

「さっきまで虫の死骸があったよ」

「ええっ！？ 早く言ってよ！」

慌てて手をよける。ここらへんは一応女の子みたいだ。

「ごめんごめん。とにかく手を洗ってきた方がいいよ」

「そうね。ちょっといつてくる」

「島田はなかなか食事にありつけずにおるのう」

「全くだね」

はっはっは、と六人で朗らかに笑う。一方その後ろ側で僕らは必死に作戦会議を行っていた。

(明久、今度はお前が行け！)

(む、無理だよ！)

(流石にワシもさっきの姿を見ては)

(と、ともかくアキ君のお弁当もだそう)

(そ、そうだね)

「ひ、姫路さん僕の弁当も食べてみてよ」

「あ、はい、それじゃいただきますね」

「お、俺も貰おうか」

「わしも貰おうかの」

「……………貰う」

「いただくよ」

みんな僕の弁当をつまんでいく。……つつか取りすぎ！さては僕の弁当で腹を満たそうって根端だな！

「お、おいしいです……（もっと気合いを入れて作らないと）」

これ以上気合い入れられたら死んじゃうよ。

「よ、吉井くん、私のお弁当も食べてみてください」

「う、うん」

（ど、どうすればいいの雄二）

（明久……くグツ）

僕に向かって笑顔で親指を突き立ててくる雄二。

食えってか！誰かあの指へし折って！

「もしかして…迷惑でしたか…」

「そ、そんなことないよ！」

ここはもう腹をくくるしかない！

（逝くのか明久）

(おぬしのごとは忘れん)

(生きていたら次の取引の時値引きする)

(アッキーまた来世で会おうね)

(アキ君……)

みんな止めて！死なないよ僕は死なないよ！

「い、いただきます！」

劇物侵入まであと五秒。神よ！救いの手を！

「すまん遅れた。まだ残ってるか？」

神様ありがとうございます！

「大丈夫ですよ霧乃くん、まだ残ってます。それより李紗ちゃんは
どうしたんですか？」

「いやな、なんだか不穏な気配がするって言ってこなかったんだよ。
だから弁当だけ渡してきた」

その直感が羨ましい！

「なんだ明久食わないのか？」

「い、今食べるころだよ」

「よかつたら霧乃くんもどうぞ。できたらアドバイスしてください」

「それじゃ、貰うぞ」

そして直人の手がエビフライに伸びていきそれをつまむ。そしてそのまま口の中に入れ…ない？

「?どうかしましたか霧乃くん」

「ちょっとな、姫路このエビフライに何か特別な事しなかったか？」

さすが直人！僕らができないことを平気でやってのける。

「あ、わかつちやいましたか。実は隠し味に硫酸を入れてみたんです」

笑顔で飛んでもない事を言い放った。この場にいた全員の顔が引きつっている。特に食べた二人は顔が真っ青になっている。

「よし、まず明久はその弁当（危険物）をこっちによこして俺の弁当食ってる。姫路はちょっとこい、話がある」

「なんですか？」

何もわかっていない姫路さんが直人についていく。

「どうやって手に入れたかが気になるところだけど、どうしてそんな物をいれた？」

「ちょっと、酸味が欲しいと思ひまして」

「……なあ姫路、俺の知識に間違いがあるかもしれないから、硫酸の特性を教えてくれないか？」

そこから直人の説教タイムが始まった。少し罪悪感が残るけどしようがないよね。直人の説教が終わるまで僕は直人の弁当を堪能することにした。

数分後。

「……まさか、姫路にこんな欠点があったとは」

「……………意外」

被害者2名は、殺菌作用のあるお茶を大量に飲みながらの会話。顔色も悪く、小刻みに震え続けたまま。

「……………すみません」

「気にしなくて良いよ、姫路さん。誰にだって失敗はある物だし」

「そつだぞ姫路。失敗を言ったら明久なんか、土下座どころか死んでも詫びきれない量あるんだ」

「失礼な！」

姫路への明久のフォローを、雄二が茶化す。それを見て、瑞希もようやく落ち着いていたのか笑みを浮かべた。

「でもうまそうなのは事実だし、筋は良いと思うぞ。みらいにでも

習えばすぐ上達するんじゃないか」

「え！私に振るの」

「……みらいちゃん、もしよかったら教えてくれませんか」

「あ、うん、それじゃ今度の休みにでも」

そのまま弁当がなくなるまで談笑が続いた。

「それで試召戦争だけど、次はBクラスなんだったな？」

「ああ、Bクラスにも、Dクラスと同様に俺達がAクラスに勝つための要素がある。俺たちじゃ真正面からぶつかった処で、勝ち目はないからな」

Aクラスは当然、この学園選りすぐりのエリート達。試召戦争は代表を倒す事が勝利であるが、Aクラス代表はそれすなわち学年首席Fクラスの戦力では、困った処で返り討ちに遭う事は容易に想像がつく。

「それで、どうする気だ？」

「Bクラスとこの戦争のシステムを使って、Aクラスとの戦争は一騎打ちにする」

「システム？」

「ああ、下位クラスが戦争で負けたらどうなるか知ってるか明久？」

「え！？ えーつと……」

いきなり話を振られた明久は、どきまぎし始める。

（負けたクラスは一ランク設備を下げられるんですよ吉井くん）

困っていた明久に姫路が助け舟をだす。

「設備が一ランク下げられるんだよね。もちろん知ってたよ！」

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

「ムツツリーニ、ペンチ」

「ややつ。僕を爪切り要らずの身体にするきか！」

「坂本くんやりすぎだよ！」

「ちつ、相手のクラスと設備が入れ替えられるんだ。これくらい覚えとけ明久」

「えつと、つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるわけだね」

「ああ。そのシステムを利用して、交渉をする」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたならFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな、まずうまくいくだろう」

「ふんふん。それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する、< Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ>といった具合にな」

「なるほどねー」

「姑息な手だな」

学年で二番手のクラスと戦った後に休む間もなくまた戦争。Fクラスも連戦になるけど皆体力が余っているような人達ばかり。でもAクラスは勝っても何も得られないし、Fクラスを相手にするのも嫌がるんじゃない……

「じゃが、それでも問題はあるじゃろう。体力としては辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては一騎討ちよりも試召戦争の方が確実であるのは確かじゃからな。それに……」

「それに？」

「そもそも一騎討ちで勝てるのじゃろうか？ こちらに姫路と美沙がいるということは既に知れ渡っていることじゃろう？」

「そのへんに関しては考えがある。心配するな」

「ふーん。ま、考えがあるならいいけどな」

それもこれも、まずはBクラスを倒してからだね。

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行つて宣戦布告して来い」

「断る。雄二が行けばいいじゃないか」

「やれやれ。それならジャンケンで決めないか」

「ジャンケン？」

坂本くんのことだからまた卑怯な手でも使うのかな。

「OK。乗った」

「よし。負けた方が行くで良いな？」

アキ君がコクリとうなずく。

「ただのジャンケンでもつまらないし、心理戦ありでいいっつ」

心理戦つて、何を出すのかを言つて、その裏をかくのかどうかっていうやつだっけ？

「わかった。それなら、僕はグーを出すよ」

「そうか。それなら俺は……」

坂本くんはどうでるのでるんだらう？

「お前がグーを出さなかったらブチ殺す」

……どんな心理戦

「行くぞ、ジャンケン」

「わああっ!!」

パー（坂本くん） グー（アキ君）

「決まりだ、行ってこい」

「絶対に嫌だ!」

「Dクラスの時みたいに殴られそうになるのを心配しているのか?」

「それもある!」

「それなら今度こそ大丈夫だ。保証する」

その根拠はどこからやって来るんだらう。

「なぜなら、Bクラスは美少年好きが多いらしい」

「そっか。それなら確かに大丈夫だねっ」

「いや明久、確実に騙されてるぞ」

アキ君：騙されすぎだよ。

「でも、お前不細工だしな……」

アキ君は不細工じゃないよ！

「ゴリラよりましだろ」

「そつだ！365度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「二人なんて嫌いだっ！」

そついつて、アキ君は走り出しました。木下くんまで……

「とにかく、頼んだぞー」

「直人くん……」

「わかってる、またついていくさ」

そしてまた直人くんがアキ君について行った。

それから暫くして無傷の二人が戻ってきてアキ君は坂本くんに掴み

かかった。

やっぱり襲われそうになったんだね。そしてアキ君を鎮めて昼食は
お開きになった。

FクラスVS Bクラス前編（前書き）

明「いよいよBクラスと対決だね」

未「気を引き締めていかないかね」

笹「あばれるよー」

直「ほどほどにしとけよ」

雄「必ず勝ってやる」

「それじゃあ始めよう」

五人「……試験召喚獣召喚！サモン……」

FクラスVS Bクラス前編

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った坂本くんが机に手を置いて皆の方を向いています。今日も午前中がテストで、さきほどテストが終わって昼食を取ってきたところです。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は十分か？」

「……………おおーっ!」「……………」

「先に説明したとおり、昨日のうちにBクラスへは宣戦布告済みだ。すなわちこの後すぐに開戦だ。腹ごしらえはすんでるな?!」

「……………おおーっ!」「……………」

「今回の戦闘は、敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

「……………おおーっ!」「……………」

「そこで、前線部隊は姫路瑞希と笹倉美沙に指揮を執ってもらおう」

「が、頑張ります」

「張り切っていくよ」

「戦力も、クラスの四十名をつぎ込む、これで負けたら後はない、野郎ども、きつちり死んでこい！」

「……うおおーっ！！」「……」

雄叫びをあげるFクラス生徒。そしてその瞬間、運命を告げるチャイムが鳴った。

「よし、行ってこい！ 目指すはシステムデスクだ！」

「……サー、イエッサー」「……」

気合いとともに出陣するFクラス前線部隊。廊下で待機していた、数学の長谷川教諭、英語Wの山田教諭。それに物理の木村教諭も移動を開始する。

すると、渡り廊下向こうにBクラス生徒が現れた。

「高橋先生を連れているぞ！」

「人数は十人程度だ囲んでフクロにしろ！ 生かして帰すなっ！」
どこのチンピラのようなセリフを皮切りに、戦闘が開始される。

次々と召喚獣が召喚され、戦いが開始されるが、表示される相手召喚獣の点数はどれも高く、Fクラス生徒の点数の二倍以上はある。

Fクラス 近藤吉宗 総合764点 Bクラス 野中長男 総合1943点

Fクラス 武藤啓太 数学69点 Bクラス 金田一祐子 数学159点

Fクラス 君島博 物理77点 Bクラス 里井真由子 物理15
2点

「くっ、とどめを刺されていない人は一度下がって別フィールドへ。
点数に余裕のある人は他の人をフォローして！」

矢継ぎ早に指示を出す。

「戦力を分断されないように、各個撃破を避けるんだ！」

各教科フィールドでは仲間たちが奮戦している。

「おらっ！」

「くそ！」

「なんでこんな恥ずかしい召喚獣なんかに！」

「…どいつもこいつも…ライダーのどこが恥ずかしいというんだ！」

「「全てだ!!」「」

「うるせーくたばれ!!」

『スラッシュ』

剣先が分裂し相手の召喚獣を一気に切り裂いた。

『みたか！これが蒼赤の悪魔の力だ！』

『お前らごときが触れられる人ではないのだ!』

なんで直人が倒したのにエラソーにしてるんだろ。

「お前ら……とつととBクラス狩ってこい!!」

「「イエツサー!!」」

物理は直人がいるから大丈夫そうだね。

「アキ君、ぼつとしてないで行くよ!!」

「あ、うん」

いけないいけない、集中しないと。

「Fクラス星野みらいと」

「吉井明久が」

「「総合科目で勝負を挑む」」

「「サモン!!」」

「Fクラスの雑魚風情が」

「返り討ちだ!」

「「サモン!!」」

吉井明久&星野未来 総合 890点&1890点 志村光&出雲
弾 総合 1634点&1598点

「なっ！男の方はともかく女の方は点数高いぞ」

「いや、装備はしょぼそうだ」

「酷い言われようだ！」

「落ち着いてアキ君！昨日直人くんもいったでしょ」

「そ、そうだね」

そうさ、油断してるんなら丁度いい。

「じゃあ、パワー一本いっとくね」

「どんどんい！」

みらいの召喚獣が僕の召喚獣に注射器を刺す。…やっぱり痛い。

星野未来 総合1790点

「準備万端！みらいサポートよろしく！」

「任せて！」

「返り討ちだ！」

明久の召喚獣が突進して相手もそれに応戦する。

「くらえ！」

「甘いよ」

振るってきた剣を木刀でいなし、そのまま相手の召喚獣に頭、わき腹、眉間の三か所に攻撃を加える。

「なんだと！」

志村光 総合795点

みらいによって強化されたおかげで明久の点でもかなり点を減らせたようだ。

「みらい今だ！」

「わかってるよ！」

そう言うとみらいの召喚獣は、どこからか巨大な注射器をだし倒れていた相手の召喚獣に向かって投げつけた。

「ちょ、ま、ぎゃあああ！！！」

何の抵抗もできなく相手の召喚獣は頭から串刺しになり消滅した。

「なに！Fクラスなんかに」

「甘く見てると痛い目見るよ！」

さて、あと一人だ。

「おおよくアッキー達も頑張ってるねい 私も頑張らないとねい」

「Fクラス笹倉美沙がその女子に数学勝負挑むよ」

「笹倉さんが相手…」

「美津子、私も手伝う」

「」「サモン！！！」「」

笹倉美沙	数学	374点	金井桐栄&水野奈津子	数学	164
点	176点				

177

「う…点数は負けてるけど二人がかりなら」

「さあ、かかつといで」

召喚獣と一緒にになって挑発をする美沙。

「なめてくれるじゃない！」

「あ、桐栄！」

どうやら片方の女子は短気ならしく、挑発に乗り一人で突っ込んで行ってしまった。

「よいしょ」

武器を構えて突っ込んできた召喚獣を紙一重で躲して、その手を掴みもつ片方の召喚獣に向かって投げ飛ばした。

「きゃあー！」

相手の召喚獣はそのまま仲間にも激突してしまった。

「あ、あなたなんでそんな召喚獣の操作上手いのよ！」

相手が怒鳴るのも無理ないかもしれない。いくら一度戦争の経験があるといっても、召喚獣で背負い投げをするなんて芸当なかなかできるものではないのだ。

「そう言われてもねい、私よりあちらの三人の方が上手いよ」

美沙がさす先には、巧みなコンビネーションでBクラスを翻弄している明久とみらい、一人でFクラスのほぼ全体をサポートしている直人がいた。

「ね、私より上手いでしょ」

「……………」

黙ってしまふ二人

「ま、そういうことだからバイバイ」

笑顔でそう言うと、双剣で二人の召喚獣を切り裂いた。

しかし、戦線はよさそうに見えるがあまりよくわかない。一部は押しているが直人のフォローが入らないところ、決定打にかける人がいない所は押され気味だ。

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

「おいおい、大丈夫か？」

「はい……平気、です……」

そこへ、息絶え絶えだがFクラスの勝利の女神登場！

「来たぞ、姫路瑞希だー！」

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です！ Fクラス姫路瑞希さんに、数学勝負を申し込みます！」

「律子、私も手伝う！」

「「サモン！！」」

「サモンです！」

姫路が現れた途端、Bクラス陣営は表情を引き締める。

姫路瑞希 数学412点 岩下律子&菊入真由美 数学189点&
151点

「あつ、腕輪！」

「腕輪……それって確か、何点かオーバーしたら、特殊能力が付加されるって言うっ?」

「まあ、姫路ならおかしくはないか」

「さすが姫チンだね」

「じゃ、いきますね」

そういつて、瑞希の召喚獣が左腕を敵の方に向ける。

「ちよつと待つてよ!？」

「律子! とにかく避けないと!」

二人は大袈裟なくらいに横に跳んだ。その直後に瑞希の召喚獣の腕輪が光を発した。

キュボツ!

「きゃあああーっ!」

瑞希の召喚獣から光がほとばしり、逃げ遅れた敵の召喚獣の一体が炎に包まれる。

「り、律子おーっ!」

思わず叫ぶ相方の少女。だが、次の瞬間、瑞希の召喚獣が彼女の召喚獣に巨大な両手剣を振りきる。悲鳴を上げる間もなく、彼女の召

喚獣は上半身と下半身斬り裂かれて消滅した。

「い、岩下と菊入ペアが！」

「そんなバカな!？」

「い、一撃だなんて……。姫路瑞希、噂以上だ」

Bクラス側に動揺が走る。

「よそ見はいけないな」

『ブラスト』

「え!うわあ!？」

「きゃあああ!？」

姫路さんに気を取られてた隙に、直人の召喚獣が相手を蜂の巣にした。

「み、皆さん、頑張ってください！」

そして姫路が一見指揮官らしくない指示を出したけど

「やったるでえーっ！」

「姫路さんサイコーッ！」

「愛してます姫路さん！」

そこはFクラス、他のクラスとは常識が当てはまらない。

「姫路、一端さがれ！」

直人は、瑞希に余計な消耗をさせないためにも一端下がるように指示する。

「中堅部隊と入れ代わりながら後退して、戦死は絶対するな！」

そんな相手からの声がある。こちらの予想外の攻撃力に一端態勢を立て直す気だろう。

「直人よ、話があるのじゃが」

「どうした秀吉」

「実はの、Bクラスの代表あの根本らしいのじゃ」

根本ってたしか、カンニングの常習犯で、球技大会では相手に一服もった、喧嘩では刃物はデフォルトという黒い噂がたえないあの根本くん？

「ああ知ってるよ」

「なんと、知っておったか」

さすが直人だ、敵のこともちろんと調べているなんて。

「あのな、宣戦布告に行ったのは俺と明久だぞ、知らないわけない

だろ」

「そういえばそうであったな」

「あれ？どうしたのアキ君」

「な、何でもないよ」

見ないで！今の僕を見ないで！

「わかっておるなら話が早い、さっそく教室に向かおうぞ」

「そうだな、明久、身悶えてないでお前もこい。みらい達は戦線維持を頼む」

「わかったよ」

「頑張ります！」

「まかせとけい」

「いつちよやってやるわよ！」

戦線を四人の女性人に任せて僕と直人と秀吉は一端教室へ向かった。

3人は駆け足で、Fクラスへ。教室の扉を開けるや否や、そこに広がっていた光景は……

「うあ……」

「これは……」

「まあ予想の範疇だな」

そこには、どこかに一撃をくらい気絶させられて吊るされた三人の生徒と、お茶を啜っていた李紗がいた。

「……おや、直人と吉井さんに木下さんお早い到着ですね」

「じくろつさん」

「いえ、どうということではありません」

「あのさ直人、これはどういうこと？」

「ああ、Bクラスの妨害は予想の範疇だからな、雄二が教室を離れたときのためにセキリユティを導入しておいた」

「なるほど、さすが直人だね」

「しかしいいのかのう？」

「え、何がさ秀吉」

「試験召喚戦争のルールに他クラスは戦争に干渉してはいけない、というルールがあったはずじゃ。これではルール違反になってしまふんじゃないのかの」

へーそんなルールがあるのか……って

「そそそ、それってかなり不味いんじゃないの！」

下手したら不戦敗になりかねないよ。

「大丈夫です、この程度の者たちに顔を見られるまでもなく仕留めました」

「問題はそこじゃないような気が」

「それにちゃんと証拠も押さえました」

そう言うと遠野さんはどこからかデジカメを持ち出した。そこには僕らのクラスの卓袱台を壊している生徒が映し出された。

「……ですがそのせいで卓袱台がいくつか壊されてしまいました。面目ないです」

「別にいいさ、本当ならもっと壊されていたんだ。それに秀吉の心配も杞憂だ。こいつら多分だがBクラスの生徒じゃない」

「え！？そうなの！？」

「はい、直人の言うとおりです。情けないことにこの男子たちは私のクラスメイトです」

「ということはCクラスの生徒かの」

「はい、ですので壊した卓袱台は私のクラスから修理費を出させます」

「すまないな李紗」

「いえ、全てこちらの不祥事ですので。その方達が起きてても面倒なので、そろそろ私は失礼します」

「ああ、ありがとな李紗」

「いいえ、直人の頼みですから」

そう言うと遠野さんはFクラスから出て行った。

「ところで直人この人達どうするの？」

「一先ずこのまま起きるまで放置でいいだろ。雄二たちが戻ってきたら後は雄二に任せるさ」

「それじゃワシらは戦線に戻るかの」

「いや、もしかしたらまた襲撃に来るかもしれないから雄二が戻るまでここにしよう」

「了解くわかったのじゃ」

こうしてBクラスとの戦争は激しさを増していった。

FクラスVS Bクラス中編（前書き）

バカテスト

問 自分のクラスの代表の印象を書きなさい

木下優子の答え

寡黙で物静かだが意思の強い人

教師のコメント

この解答から霧島さんがAクラスで頼りにされているのがわかりますね。

Bクラス全生徒の答え

最低の屑野郎

教師のコメント

根本くんがいかに信頼されていないかわかる解答ですね。

Fクラス明久以外の男子の答え

ゴリラ

坂本雄二のコメント

お前から一歩前にでろ。

吉井明久の答え

チンパンジー

坂本雄二のコメント

お前に期待した俺がバカだった

FクラスVSBクラス中編

あれから暫くして雄二が帰ってきた。吊るされた三人はいまだ目覚めていない。李紗のやつどれだけ強くあてたんだ。

「……まず事情を説明してくれ」

戻ってくるなりいきなりそんな事を言った。まあ確かに戻ったら目の前に吊るされた三人の男がいるんだ、当然の反応か。

俺は合ったことをそのまま伝えた。

「そんなことが…すまんうかつだった」

「まったくだよ、一体なにをしていたのさ」

「明久、えばってるがお前は何かしたのか？」

「も、もちろんさ」

ちゃんとツツコミという仕事をしたさ。

「で、何してんだ？」

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印のために、教室を空にしていた」

「協定じゃと？」

「ああ。4時までには決着がつかなかったら、戦況をそのままにして
続きは明日午前9時に持ち越し。その間、試召戦争にかかわる一切
の行為を禁止するってな」

「それ、承諾したの？」

「そつだ」

時間的には、こちらの作戦通りに事が進み、そのころには教室へ押し
込める戦況から始められるはず。

Fクラスとしては、好条件ではある。

「確かに、それなら姫路が万全の状態で始められるから、俺達とし
ては都合が良いが、どうにも解せないな」

「ああ。確かにあの根本がそんな協定を結ぶなんて引つかかるが、
今回もクラス全体と言うより姫路の個人戦力がカギとなる以上、乗
った方が勝率が高くなる事は事実だ……一応、用心してくれないか
？」

「わかった、大方こいつらに姫路の弱みでも握らせてこさそうとし
たのかもしれないしな」

「まあ今はお前らは前線に戻れ。俺はこいつらから何か情報を引き
出す」

「わかった、任せたぞ」

「ああ、もうへまはしないぞ」

雄二の言葉を聞いた後俺たちは戦線に戻った。

しかし戦線に戻った俺たちがまず聞いたことは衝撃的な事だった。

「なに！島田が人質に取られただ！」

「そうなの、気が付いたら捕まってて」

「おかげであと二人なのに攻めあぐんでるよ」

「どうしよう直人！」

「仕方ねえ、姫路とみらいは少し休んでろ。男子の一部は俺と明久についてこい。残りは秀吉と美沙に従って敵がまた良からぬことをしないか見張ってる。」

「『『『了解！』『』『』」

「そこまでだ！それ以上近づくとこの女を補習室送りにするぞ！」

「島田さん！」

「吉井！」

なんかドラマみたいな展開だな。

「吉井隊長、どうするんです」

須川が明久に聞く。どうするんだろつな。

……暫く考えた後目を見開き

「総員突撃用意ーっ!!」

「それで良いのか隊長！」

と、言い放った。一樣妥当な判断だと思いがな。一人のために全員を危険にさらすわけにはいかない。

「いいのか霧乃隊長！」

「どついう考えでそついう結論に至つたかは知らんが、そこまで悪い判断ではないと思つぞ」

「ま、待つんだ吉井に霧乃！」

敵からちよつと待つたコールが出た。

「コイツがどうして俺達に捕まつたと思つている？」

「バカだから」

「殺すわよ！」

味方のはずの島田からとてつもない殺気が伝わってくる。

「さすがに言いすぎだぞ明久、せめてその先も聞いてやらんと」

「そうよ、最後まで聞くのよ吉井！ほらあんたらさっさと行ってやりなさい」

本当に捕虜か？何故命令してるんだ。

「あ、ああ」

お前らもなんでしたがつてんだ？殺気にあてられたか。

「コイツはな、吉井が怪我したって偽情報を流したら、部隊を離れて1人で保健室に向かったんだよ」

「島田さん…」

「な、なによ」

「怪我した僕にとどめを刺しに行くなんてアンタは鬼か！」

「違うわよ！！」

日頃明久にしている仕打ちを考えれば当然の反応だと思うがな。たとえそれが照れ隠しとしても。

「ウチが吉井の様子を見に行っっちゃ悪いっての！？ これでも心配したんだからね！」

「島田さん。それ、本当？」

「そ、そうよ。悪い？」

ちよつとは素直になつたのか美波の耳が紅い、そんな島田の発言に明久は驚いている。

「へっ。やっとわかつたか。それじゃ、おとなしく」

「総員突撃ーっ!」

「何だよ!?!」

「あの島田さんは偽物だ!変装している敵だぞ!」

「おい待てって! コイツ本当に本物の島田だって!」

動揺するBクラス生徒。

「霧乃!あんたもなんか言つてよ!」

あ、そこで俺に振るんだ。

「それじゃ島田、お前はなんで保健室に向かつたんだ?」

「それは、吉井が瑞希のパンツを見て鼻血が止まらなくなつたって聞いて」

「総員突撃、Bクラスを撃破しろ!」

「だから何だよ!?!」

(いいの直人、あれって本物の島田さんじゃ)

今の発言できずいたのか明久。

(いいんだ、相手は同様している。そのまま偽物扱いすれば被害ゼロで突破できるはずだ)

(なるほど、さすが直人だね)

「行くぞみんな突撃ーっ!!」

「だからこいつは本物の島田だと……」

狼狽するBクラス生徒。

「黙れ！ 見破られた作戦にいつまでも固執するなんて見苦しいぞ！」

「だから本当にーっ！」

なんかノリノリだな明久。

Bクラス鈴木二郎 英語W33点 Fクラス田中明 英語W65点

Bクラス吉田卓夫 英語W18点 Fクラス須川亮 英語W59点

死にかけの二人を撃破すると俺と明久を除いた者たちが島田を包囲する。

「ぎゃあああー……!!」

「たすけてえー……!!」

近くにいた補習教師に二人は連れて行かれた。

『隊長！こやつどうしましょ』

『薄っぺらい変装なんかしやがって』

「あ、包囲中止、これ本物の島田だから」

「「え！？」」

島田を罵った二人に向って島田が揺らりと立ち上がり虐殺を始めた。

「「ぎゃあああつ！！」」

「ど、どうしよう直人、こっちに来てるよ」

明久が言ったとおり島田はユラユラとこっちに向かってきていた。

「取りあえずお前らはやられた二人を教室に連れてけ」

直人は冷静に指示を出していた。その間も島田さんはユラユラとこっちに近づいてきていた。そして右フックが直人に向かって放たれる。

「ほっと」

「きゃっ！ー！」

それを普通にさげ逆に島田さんに拳骨をいれた。

「うっ……なにすんのよー!!」

それはこっちのセリフだと思う。

「人質にされて皆に迷惑をかけた罰だ」

「だってそれは……」

「だいたい明久は俺と一緒に教室に向かっただろうが。どうしてそれなのに『吉井が瑞希のパンツを見て鼻血が止まらなくなったって聞いて』だ。明久が最初に言ったバカだからを否定できないぞ」

「でも……」

「まだ言うか……大体あれも作戦だ。結果を見る、お前は無事でBクラスも撃破できた。なんの問題がある」

「……………」

島田さんが押し黙った。

「まあ、一瞬でもお前への攻撃を躊躇した明久に感謝するんだな」

「え、本当なの吉井!」

「う、うん」

ホントに一瞬だったけど……

「じゃあ俺は先に行ってるぞ」

それから暫くして明久と島田が戻ってきた。島田が明久のことをアキ、明久が島田のことを美波と呼んでいたあたり何かあったのだろう。

その後、Bクラスの教室前まで攻め込んだところで時間となり今日の戦争は終了となった。

「とまあ状況はこんな感じかな」

今は雄二に戦争の状況を話しているところだ。

「そうか、その辺りは予想通りだな……だとしたら、やっぱり解せないな」

「解せないって何がさ」

「あの協定だ、何の利点もなしに根本の奴が協定を結ぶとも思えない」

「ところであのCクラスの連中はどうした」

「ああ、情報を聞き出してる途中で鉄人に見つかっちまってな、連れて行かれちゃった」

「そうか……何かわかったことあるか？」

「ここに来たのは代表の命令という事くらいかな」

「それじゃCクラスも敵になりかねないな」

「……………」

「ん？ムツツリーニ。何か変わった事があったか？」

「……………（コクリ）」

気が付くとムツツリーニがいつの間にか戻ってきていた。彼は今回出番が来るまで情報収集にいそしんでおり、警戒に当たっている。

「Cクラスが、試召戦争の準備を？」

「……………（コクリ）」

「狙いはAクラスじゃないだろうから……………大方、漁夫の利を狙うつてところか？」

「んー、そういうことならCクラスと協定でも結ぶか……………と言いたいとこだが、教室の件があるからなあ、Bクラスとつるんでる可能性が高い」

「それじゃどうするの？このままじゃBクラスに勝ってもCクラスの餌食になっちゃうよ」

「そうだな……………いっちょ探りいれてくるか。CクラスがBクラスとつるんでいるか見てくる。もしつるんでいないならDクラスを使って協定を結ぶ」

「もしつるんでいたら？」

「その時はその時の作戦を考えてある。直人ついてきてくれ」

「わかった」

そう言うと雄二は直人を連れてCクラスの教室に向かった。

「ここがCクラスか……邪魔するぞ」

「本当に邪魔ですね、ゴリラがなんのようですか」

「出会いがしらに罵倒か！」

「せっかくのバイト代のお菓子が不味くなります」

「よ、李紗」

「おや、直人も一緒でしたか何かようですか」

「俺とはえらい違う扱いだな！」

「落ちて着け雄二、代表はいるか？雄二が話があるそうなんだ」

「代表ですか、わかりました。小山さん！」

「ひっ！な、なんでするか遠野さん」

「Fクラスの代表が訪ねてきています」

なんか怯えてないか？

「なあ李紗、なんだか怯えてるように見えるんだが」

「さあ、先ほど他クラスの設備を壊したことに對してお話してからなにやら怯えているのです」

李紗の説教が原因か……

それからすぐ俺と雄二はCクラスを後にした。

結論から言えば、罨だった。根本自身もCクラスにおり、協定違反を盾に、雄二を討ち取る腹つもりだったのだろう。だが雄二は、世間話をしにきたと言って、Cクラス代表の小山と話すあいだにCクラス内の根本を発見。堂々と辞去した。

しかし李紗の説教を受けてなおBクラスとつるむか……ある意味大物だな。

「それで戻ってきたわけだね」

「ああ、情報がなかったら危ないところだった」

「そこは直人くんのお手柄だね」

「別にたいしたことじゃないさ」

「兵が將に利益をもたらすのは当然だろ」

「素直に感謝すればいいのに」

「無茶を言つなよ明久。ゴリラにそんな高度な事を求めるなよ」

「あ、それもそうだね」

「てめえら……一度しめてやろうか!!」

「まあまあ、落ち着きなさいなゴリゴリ」

「それは俺を落ち着かせたいのか、怒らせたいのかどっちだ!」

「坂本くんおちつきなよ。二人も言いすぎだよ」

「ぐぐぐ……」

みらいに言われ少し落ち着く雄二。みらいの癒しのオーラは場を和ませるよね。

「ところでCクラスはどうするのじゃ?協定が結べんとわかった以上敵にしかならんぞ」

「Cクラスについては対策がある。今日は解散でいいだろう」

こうして一抹の不安を残しつつ今日は解散となった。

ところ変わって霧乃邸。そこでは直人と李紗が夕食をとっていた。

「しちそう様です、おいしかったですよ」

「それは何よりで」

「ところで今日の料理は豪華でしたが、何かいいことでも合ったのですか？」

「なに、明日李紗のクラスに迷惑かけちまいそうだからな、早めのわびだ」

「あのゴリラの仕業ですか」

「まあそんなとこだ」

「まあ今回はこちらのクラスも非がありましたし余計な干渉はしないでおきます」

「それは助かる」

「ただし、明日も今日くらいのごちそうを用意してもらいます」

「はは、それは厳しいことで」

「ふふ、それより話は変わりますが、直人のお父様はいまだお帰りにならないのですか？」

「ああ、一体どこで何してるのやら。仕送りが来るから生きてはいらんだらうが」

「大変ですねあなたも」

「そうでもないさ、これで意外と楽しんでるんだぞ」

「そうですか、それならいいのですが」

「ああ、今のままでいいのさ……さて、デザートでも食つか？」

「いただきます」

「あいよ」

こうして夜は更けていった。そしてBクラス戦、最後の戦いの幕が切って開けられるのだった。

FクラスVS Bクラス後編（前書き）

「今回でBクラス戦は終了だ」

霧「意外と長くなっただね」

「まあそこはクライマックスという事で」

霧&作「それでどうぞ」「」

FクラスVS Bクラス後編

「今から昨日言った作戦を実行する」

翌朝、登校した俺たちに雄二は開口一番にそう告げた。

「作戦って、Cクラス対策のか？」

「ああ、その為には、秀吉にこいつを着てもらおう」

そう言いながら雄二はカバンから文月学園の女子制服を取り出した。

「お。雄くんがどういう経緯でそれを手に入れたのかそこが気になるねい」

「気にしたら負けだぞ美沙。例え雄二にどんな性癖があっても今までどつりに接することが大事なんだ」

「誤解を招くこと言うんじゃないねえ！」

朝から雄二の怒りゲージはマックスのようだ。

「ともかくだ、秀吉着てくれるな」

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃない？」

そこは構わない方がいいんじゃないか？秀吉はホントに男として見てもらいたいんだろうか。

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう」

秀吉にはAクラスに双子の姉がいる。一卵性双生児かと思われるほど似ていて、違う箇所なんでテストの点数と喋り方くらいなのだ。

「と言う訳で秀吉、用意してくれ」

「う、うむ……」

明久をはじめとした何人かの男子生徒が、若干頬を染めながら凝視している。ムツツリー二に至っては、いつの間にか取り出したカメラのシャッターを切っている。

「よし、着替え終わったぞい。ん？ 皆どうした？」

「さあ？」

秀吉、雄二が疑問符を浮かべ、直人は呆れたようにその面々を見ていた。

「つか秀吉もよく女子の前で平然と着替えたな」

「は！す、すまぬ。見苦しいものを見せてしまったようで…」

若干落ち込んだ様子で秀吉は言った。

「いえ、いいですよ」

「何故か違和感感じなかったしね」

「むしろちよつと嫉妬しちゃた」

「凄い色っぽかったよ秀くん」

「……何故じゃ、凄く悲しくなってくるわい」

落ち込む秀吉…とは言えないな

それから雄二、秀吉、明久、直人、面白そうという理由で美沙、の5人は一路Cクラスへと向かった。

「さて、ここからは秀吉一人で行ってもらう。頼んだぞ、秀吉」

「気が進まんのう……」

秀吉自身は気が乗らない様子だ。

「そこを何とか頼む」

「むっ」

やはり、どうにも気がすすまないという秀吉。

「頼む、Fクラス勝利のためなんだ」

「…そこまで言われたのでは仕方ないのう」

そこまで言われたらと立ち上がる秀吉。

そして秀吉がCクラスのドアに手をかけた。いきおい良くドアが開

けられ、堂々と憤ましかかな胸を張った少女が声を上げる。

『静かになさい！ この薄汚い豚ども！』

「さすが秀吉だ」

「おお。秀くんとは思えない罵倒っぷり。そこに痺れるぜい」

「これ以上ない挑発だよね……」

「つつか秀吉の姉がこんなことなのか？」

「「「しらん！」「」」

んな無責任な……

『な、なによアンタ！』

そう答えたのはCクラス代表の小山。既に相当怒ってんな。そりゃあいきなり豚呼ばわりされたら誰だって怒るか。

『話しかけないでくれる？豚臭いわ！』

自分から話しかけといてその返しはどうなんだろう。

『あんだ、Aクラスの木下ね？ちょっと点数良いからって、良い気になるんじゃないわよ！一体何の用よ！』

怒る小山を小馬鹿にするように見ながら、優子（秀吉）は腕を組んだ。

『私はね、こんな臭くて醜い教室が、同じ校内にあるなんて我慢がならないのよ！貴女たちなんて、豚小屋で充分だわ！』

『なっ？！い、言うに事欠いて、私たちにはFクラスがお似合いですってえ！？』

おい、いつFクラスと言った。

「小山さんの中では、Fクラス」豚小屋みたいだね？」

「否定はできないがな」

「俺はいま李紗の視線がとてつもなく痛い」

李紗の奴、秀吉が来たときからこっちずっとがんみしてるんだよな。

「確かに李紗ちゃんずっとこっち見てるね」

「なに！それは不味いぞ」

「どうしよう！作戦がばれちゃうよ」

「安心しろ、李紗は昨日のうちに懐柔しておいた…家の食費と犠牲でな」

「さすが直くん抜け目がない、そこに痺れるあこつがれる」

「どつでもいいが、なんでさっきからラップ調？」

「何でかな 何でかな 知りたい聞きたい教えたい？」

「いや、もうわけがわからん」

「あえて言うならラップじゃないよ 美沙ラップだよ」

「……………」

「あれ！？そこでスルーは予想外！」

「静かにしろ美沙」

美沙が騒いでる内にも秀吉の挑発は進んでいく。

『手が汚れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相應しい教室に送ってあげようかと思うの。ちょうど試召戦争の準備もしている様だし、覚悟しておきなさい。近いうちに、私達が薄汚いブタの貴女達を始末してあげるから！』

一方的に通告し、有無をいわず教室を出て、ピシヤリとドアを閉める。

最後の最後まで李紗はこちらを凝視し続けていた。瞳から口止め料は高いですよと言ってるようだった。

「これで良かったかのう？」

秀吉は、何故かスッキリしたような顔をしていた。

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！ Aクラス戦の準備を始

めるわよ！」

Cクラスから小山の叫び声が聞こえてくる。

『しかし小山さん、昨日あれほど言ったのにFクラスを豚小屋呼ばわりするなんて。お話が足りませんでしたか』

『ひっ！ち、違うの遠野さん、あれはその…言葉のあやで…』

今度は別の意味で小山の叫び声が聞こえてくる。ご愁傷さま。

『まあいいです、この感情はAクラスの人にぶつけるとしましょう』

『ほっ………』

「作戦もうまくいったことだし、俺達もBクラス戦の準備を始めるぞ」

4人は一路、Fクラスへ帰還した。

そしてBクラス戦再開。

「ドアと壁をうまく使っんじゃ！ 戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が飛ぶ中での、右側と左側の扉でぶつかりあうBクラス教室攻略戦。代表の指示は、<教室内に敵を閉じ込めろ>であり、戦況的には順調。

「勝負は極力単教科で挑め！補給も念入りに行え！」

始まってから数時間、事は順調に進んでいるが、ここにきて異変が起こっていた。

「……………」

本来秀吉より先に指揮を執る筈の瑞希が、一向に何かしようとしな
い。それが大きく響き、戦線は危うかった。

「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！ 援軍を頼む！」

Bクラスには文系が多いので、古典だと誰かが押し戻さないとまず
いな。

「姫路さん、左側に援護を！」

「あ、そ、そのっ……………」

ちっやはり姫路の様子がおかしい。一体何があった。

「それなら……………笹倉さん！」

「ごめんよお、敵が多すぎ行けないよお」

「いつまでラップやってんだ！」

「美沙ラップだよー！」

「どおでもいいわー！」

くそっ！美沙がいけない事実は変わりないか……

「だあぁっ！」

すると明久が左出入り口にダッシュして古典の立会人、竹中先生になにかを囁いた。すると突然竹中先生が頭を押さえて

「少々席を外します！」

と行ってどこかに行ってしまいました。

「ナイスだ明久」

「これくらい！」

いざという時の教師脅迫、古典教師編だ。

文系相手では直人も分が悪く、指揮する側に回るしかない。その上、主力である姫路の行動がおかしければ、戦況的にも危うい。

「古典の点数が残っている人は左側の出入り口へ！ 消耗した人は補給に回れ！」

一応の応急処置だが、少しは持ち直すだろう。

「姫路さん、一体どうしたの！？」

「そ、その、何でもないです」

何でもないわけないだろう。

「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」

「数学教師はどうした！」

「Bクラス内に拉致された模様！」

Bクラスには文系が多い為、状況的にも不利となった。

「姫路！行けるか？」

「はっはいっ！」

姫路がようやく動き、一步前に……

「あっ………！」

動こうとしたが、急に動きを止めて俯く。

そこで明久はふと、瑞希の視線を追っていき……根本の手にある封筒に目を付けた。

「あれは………！」

「どうした、明久？」

直人もその視線を追い、根元の手に握られている封筒に気がついた。それを見て様子がおかしくなった事と、怯えたまま明久を見つめる瑞希の姿を見て、ある程度の予測がついた。

おそらく、明久宛のラブレターと言った処だろうが一体どうやって手に入れたんだ……まさかCクラスが壊した卓袱台が姫路のだったのか！

あのクソ野郎が……

協定の内容自体は、瑞希が居るからこそFクラスにとって有利に働く。だが動けなければ、Bクラスにとって圧倒的に有利に働く条件。

「姫路さん」

「は、はい……？」

「具合が悪そうだからあまり戦線には加わらないように。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気をつけてもらわないと」

「……はい」

「じゃ、僕は用があるから行くね」

「あ……！」

久しぶりに本気で怒っている明久を見たな。ここは明久に任せるか。

「明久！」

「な、なに直人」

「任せたぞ！」

「え！？……そうか…任せとけ！」

明久は直人に背を向けて、教室へと駆けだす。

「面白いことしてくれるじゃないか、根元君」

自分で言うのもなんだけど僕が皮肉を言うとはね…直人にも任せられたことだし。

「あの野郎、ぶち殺す！」

「雄二！」

「うん？ 明久か。脱走か？それならチヨキでしばくぞ」

「話がある」

「……とりあえず聞こうか」

真剣な明久に雄二も真面目に聞く体制をとる。

「根本君の着ている制服が欲しいんだ」

「……お前に何があったんだ？」

しまった！これじゃただの変態だ！

「いや、あの、そうじゃなくて」

「まあ、勝利の際にはくれてやってもいいだろう」

流された！それはそれで困るけど……そんな事言ってる場合じゃないか。

「で、それだけか？」

「それと、姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい」

「理由は？」

「理由は言えない」

「どうしても外さないとダメなのか？」

「うん。どうしても」

明久も無茶を行っている事は理解していた。瑞希はFクラスの最重要戦力であり、彼女が居るからこそその作戦でここまで来た。だからこそ、それが原因で負ける事も十分あり得る話で、その責任を問われるのは代表である雄二。

それでも……

「お願いだ雄二！」

「……条件がある」

「何に？」

「明久、お前が姫路の担う予定だった役割を果たせ。どうやっても良いから、必ず成功させろ」

「もちろんやってみせる！絶対に成功させるさー！」

「良い返事だ」

「それで、僕は何をしたらいい？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃をしかける。科目は何でもいい」

「皆のフォローは？」

「ない。しかも、Bクラス教室の出入り口は今の状態のままだ」

「……難しいことを言ってくれねえ」

「もし、失敗したら？」

「失敗するな。必ず成功させろ」

この言い方だと、失敗したら負けは確定だろう。

「それじゃ、うまくやれよ」

「え？どこか行くの？」

「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな」

例の件ってことは室外機かな？

「明久、お前は確かに点数は低いが、俺はお前だけにあるムツツリ
―二や秀吉、直人の様な秀でている部分を信じている」

「僕にしか、出来ない……あつ！」

明久が、ふと或る事を思い出した。観察処分者である事の利点と、
ある配置について。

「……怒られるだけですむかな」

こうして明久の根本襲撃計画KKB作戦が開始された。

作戦開始3分前

「点数が危なくなったら下がれ！」

秀吉から指揮権を受け取り雄二が場を指揮っていた。

「ひ、怯むな！意地でもあの悪魔を倒すんだ！！」

根本の指示がBクラスに飛ぶ。根本がこういうのも無理ないだろう。

「十人目だ！」

「ぎゃあああ……！」

Bクラス前では直人が鬼神のごとく暴れていた。

「直人くん凄いね」

「ほんとだね 凄いね、一人で十人も倒すなんてね」

「…？なんでラップ調なの」

「美沙ラップだよ」

「意味がわからないよ美沙ちゃん」

「明久にあんなこと言ったが必要なかったかもな」

直人は明久のために少しでもBクラスの戦力を削ろうとしていたが、頑張りすぎたみたいだ。

「いまだ！一気にBクラスに攻め込め！」

「……おおーっ！！」「……」

今が動くときと雄二が一斉攻撃をしかけた。

「……！？さがれお前ら！！」

「……へ？…ぎゃあああ！！」「……」

飛び出したFクラスの召喚獣に無数のクナイが突き刺さり消滅した。

「くそ！遅かったか！」

「この攻撃をかわすとは……さすが」

すると一体の召喚獣を引き連れて一人の女子が現れた。

「えっと……だれ？」

「直人さんの知り合いじゃないの？」

「まさかワツチを忘れたと？」

「ふ、ふははは！よくやった影野！そのままその悪魔をやっちならな
い！」

「影野……ああ！影野か影野湊か！久しぶり」

「直人の知り合いなのか？」

「昔ちよつとな」

「おい何してる！とつとつとその悪魔を倒せ！」

「そんな奴が代表で可愛そうだな」

「しかたないでありんす、こんな屑でも代表。守らなければならな
い」

「なっ！」

驚いてるが根本、今の湊の発言にBクラスの全員がうなずいてたぞ。

「まあいいか、久々の手合せだが頑張ってみよう。雄二、湊は俺が抑える、その隙に突破しろ！」

「わかった、行くぞお前ら！！」

「「「「「おおーっ！！」「」「」」」」

「させん！」

「おっと、俺を無視できるとでも？」

湊の召喚獣が投げたクナイを直人の召喚獣が撃ち落とす。

「やはり無理ですか。肉弾戦では勝てませんでしたが、召喚獣でのバトルは勝たせてもらう」

「勝つ……ね」

「無理とでも」

「そういう訳では」

「「勝負！！」「」」

こうして直人と湊の戦いは幕を開けた。

明久作戦開始 完了まであと一分

「「「うおおおお！！！」」」

「はああああ！！！」

小太刀と剣の鏝迫り合いが続く中、Bクラスとの戦いは激しさを増す。

ドン！ドン！

「お前らいい加減諦めるよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって、暑苦しいことこの上ないっての」

直人を足止めできたからといって調子に乗るとは、そこがしれるな。

「どうした？ 軟弱なBクラス代表サマは、そろそろギブアップか？」

「はア？ ギブアップするのはそっちだろ？あの悪魔も影野の奴に抑えられている。頼みの姫路さんも調子が悪そうだぜ？」

ドン！ドン！ 完了まで30秒

「お前ら相手に姫路を頼る必要なんてないさ。それに笹倉のことを忘れてないか？」

「はっ！いくら笹倉でも困んじまえば封じられる！その間にお前の首をとって終いだ！」

ドオンッ！ドオンッ！ 20秒

「お前は俺たちの事を見くびりすぎてるな」

「けっ！ 口だけは達者だな。負け組代表さんよお……さっきからドンドンと、壁がうるせえな」

「人望ないな。余所のクラスから嫌がらせなんて」

ドゴオンッ！ドゴオンッ！ 10秒

「この程度なのですか？腕が落ちましたね」

「……………」

「……………体勢を立て直す！ いったん下がるぞ！」

「どうした、散々フカしておきながら逃げるのか！」

「逃がさない！」

「逃げる？違うな。勝利への活路を開けただけさ」

「何を言ってる？」

「だあああつつしやあああああああ……！」

ドゴオンッ！……！！

「ンなっ！」

明久が壁をぶち破り美波たちを連れて現れた。

これぞ明久の作戦K<壁を>K<壊して>B<ぶっ飛ばす>だ！

「くっ！行かせない！」

「おっと、行かせないぜ」

「なっ！」

直人の召喚獣が湊の召喚獣を羽交い絞めにする。

「くっ、今までは手を抜いて…」

「わるいな、真向勝負じゃなくて」

「くたばれ根本恭二イイ！！」

そして明久たちが根本に迫る。

「させるか！」

そこに近衛隊が立ちふさがる。

「は、ははっ！驚かせやがって！残念だったな！お前らの奇襲は失敗だ！」

かかった！

ダン！ダン！

そんな音と同時に涼しさを求め、開けられた窓から二人の人物が入

り込む。そして根本の前へと立ちはだかる。

「え？」

「Fクラス、土屋康太」

音に振り向いた根本の視界に飛び込んできた二つの人影は。

「Bクラス代表、根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

ロープを使って屋上から突入してきた、大島教諭とムツツリーニだった。

「き、きさま、ムツツリーニ！」

「サモン！」

ムツツリーニと根本の召喚獣が姿を現す。刹那、忍び装束のムツツリーニの召喚獣の姿が掻き消えた。小太刀を振り切ったムツツリーニの召喚獣の姿が見えたときには、根本の召喚獣の首がはね飛んでいた。

土屋康太 保険446点 根本恭二201点

点数が表示されるまえに決着がつきFクラス対Bクラスの戦争はFクラスの勝利で幕を閉じた。

戦後処理2（前書き）

人物紹介

影野湊

イメージは銀魂の月詠の顔に傷がない感じ。

昔、数日だけ直人とともに修行した。模擬戦では肉弾戦、召喚獣とも直人に勝てないのが悩み。

武器は日頃から常備くクナイとうゝ

召喚獣

武器は小太刀にクナイ、腕輪はムッツリーニと同じ加速

戦後処理 2

終戦後のBクラスにて。

「明久よ、随分と思い切った行動に出たのう」

「うう……痛いよう、痛いよう……」

「じつとしてアキ君、上手く包帯巻けないよ」

今はアキ君の手に包帯を巻いている所。いくらダメージが全部返るわけじゃないとしても、素手で鉄筋コンクリートを壊したんだから相当痛いよね。

「頑張ったな明久」

「で、でしょ？ もっと褒めても良いと思っよ？」

「後の事を考えず自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」

「……遠まわしにバカって言ってない？」

「ここは褒めといてやれって秀吉」

「後で謝りに行かないとね」

「うう……なんて言われるのやら」

明久の作戦は当然問題にならない訳もなく、放課後は職員室で過ごす事が決定。初犯でなければ、留年や退学も大いにありうる事である。

「ま、それが明久の強みだからな」

そこへ雄二が歩み寄って、明久の肩をバンバンと叩く。明久はバカが強みと言われてへこんでいるが…

「一緒に謝りに行って挙げるから元気出してアキ君」

「そつだぞ明久。明久の作戦が勝利の決めてだったことには変わらないんだからな」

「ありがとう二人とも」

みらいと直人に励まされ少し元気を取り戻した明久であった。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「ああ、不貞腐れたクソヤロー君、人をさんざん悪魔と言ってくれたんだ覚悟はできてるかな？」

雄二と直人の視線の先には、先ほどまでの強気がウソの様に大人しくなった根元が床に座り込んでいる。

「本来なら設備を明け渡して貰い、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントする所だが、特別に免除してやらんでもない」

そんな雄二の発言に、ざわざわと周囲の皆が騒ぎ始める。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ、ここがゴールじゃない」

「うむ。確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラス代表が条件を呑めば解放してやろうかと思う」

Fクラスの皆は納得したみたい。

Bクラスも3ヶ月間ボロボロの教室に縛られる可能性からの脱却ともあり、雄二に視線が集まる。

「……条件はなんだ」

力なく根本が問いかける。

「俺…だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やって貰ったし、正直去年から目ざわりだったんだよな」

普通に聞けば雄二の言葉は酷い言い様だが、先ほどのように彼はそれだけの事をやってきた。その証拠にFクラスどころか、Bクラスの面々も誰1人としてフォローしようとしなない。

「そこで、取引だ。Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来ると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやって

も良い。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争が避けられないから、あくまで戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

疑うような根本くんの視線。確かにクラス交換をなしにするとだと、割が合わないよね。

「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

そう言つて坂本くんが取り出したのは、木下くんの変装の為に用意しておいた女子制服。

「ば、馬鹿なことを言つな！俺がそんなふざけたことを…！」

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！』

Bクラスの皆はやらせる気満々だね。根本くんはやっぱり嫌われるね。

「卑怯者の哀れな末路だな」

「彼のしてきた事はそれだけの事なんですよ。Bクラスの誰も庇う人はいないでありんす」

「んじゃ、決定だな」

「くっ！ よ、よるな変態ぐふうっ！！」

逃げようとした根本だが、Bクラスの面々が取り押さえ腹部に一撃。

「お、おう。ありがとう」

自分たちの代表な対して、何の躊躇もない一撃に、さすがの雄二も引き気味に答える。

「ま、手間が省けたな。さっそく着つけにはいるか」

「あ、僕も手伝うよ」

「……男の服を脱がすのは、思った以上に苦痛だな」

「うん……けど、これも目的のため」

「う、うう……」

根本くんがうめき声をあげる。

「ん？チヨイ待て明久。やっぱり素人じゃ効き目が薄いか……よつと
！」

「げふうっ！！」

直人くんが鳩尾に一撃。今度はピクリともしなくなった。

さすがに周りの人たちが、恐ろしいものを見るような目でこちらを見ていいるよ直人くん。

「えっと……あ、あつた！」

「よかつたな明久」

「うん、それじゃとっとすましちゃお」

アキ君が根本くんの制服から一枚の手紙を取り出す。もしかして、それが瑞希ちゃんがおかしかつた原因なのかな？

「うーん……よく考えたらこれどうやって着せるんだろ？」

「さあ？よくわからん」

確かに女子の制服って男子には着方わかりにくいよね。……あれ？
じゃあなんで木下くんはすぐ着れたんだろ？

「私がやってあげるよ」

すると見かねたBクラスの女子が名乗りを挙げた。

「そう？ じゃあ折角だし、可愛くしてあげて」

アキ君はそう言うけど……

「それは無理。土台が腐ってるから」

酷い言い様だね……

「酷い言い様だな……それじゃ明久、さっさと根本の制服を焼却炉に詰めて殺菌消毒しに行くぞ」

「直人も案外鬼畜だね」

「他人の気持ちを利用する奴には容赦はしない」

そう言うと、二人は本当に焼却炉がある方へ向かって行った。彼は家まで女子制服の着心地を楽しむ事になるだろう。

「それじゃ俺は戻るけど、明久はとっととそれ渡して来いよ」

「うん、わかったよ」

直人がBクラスに戻るとメイクアップを終えた根本がいた。

「こっ、この服、やけにスカートが短いぞ!？」

「……おえ……戻ってこなきゃよかった」

「そんな……気持ちは解るけど言い過ぎだよ直人くん」

「みらい……よくあれを見て平気だな」

「……あれ?ところでアキ君は?」

「役割をはたしにいったさ、たぶん今頃教室にいるんじゃないか?」

「そうなの?瑞希ちゃんもさっき教室に向かったんだけど」

「まじか…教室で面白そうな事が起こってそうだな」

「面白い事！何だいそれは！」

すると面白い事に反応して美沙ちゃんが出てきた。

「行くなよ、人の恋路だ。邪魔するのは野暮だ」

「ん〜アッキーとミッキーだね！みらリン大ピンチだね！」

「そんな…私なんてアキ君にふさわしくないよ」

「そんな事ないと思うがな。素直になった方が得だと思っぞ」

「……………」

「戻ったよみんな」

「あ、お帰りアキ君。瑞希ちゃんと教室であつた？」

「え、う、うん」

顔を赤くするアキ君。やっぱり何か合つたんだね。

「不憫なみらリン……可哀そうだよ」

「まったくだ」

「ところで……なにあの不気味な生物は」

「見るな明久、目が腐るぞ」

「ちくしょう！なんで俺がこんな目に！」

「ほら、いいからキビキビ歩きなさい！」

「この後は写真撮影があるんだからな」

「なっ！聞いてないぞ!？」

「じゃあ雄二、あとは任せるぞ」

「ああ任せとけ、お前は明久にでも勉強でも教えてやれ」

「この恨みは必ず返してやる！」

「無駄口をたたくな！！ ほら、キリキリ歩け！」

根本はそんなことを言いながら去って行った。

「さて、帰るか」

「「そうだね」」

帰路にて……

「で、どうするよ明久？」

「どっつするってなにが？」

「勉強だよ勉強、雄二が行ってただろ」

「次はAクラス戦だもんね」

「勉強かゝさすがにしつかりやらないといけないよね」

「昔みたいに直人くんに教えてもらったら？」

「直人にね」

「そういえば気になってたんだけど、直人くんて頭良くなかったけ」

「昔の話さ、ちょっと気を抜いたらこのありさまだ」

「でも今は勉強してるんでしょ」

「まあな、でも昔に比べるとだいぶ低いぞ」

「で、どうする？勉強会するか？」

「……そうだね、Aクラスに勝つためだ！」

「それじゃ家でやるか？Aクラス戦まで泊まり込みで」

「え！？いいの直人くん」

「別にいいさ、誰もいないし、毎日李紗が来るだけだ」

「それじゃおじやまさせてもらおうね」

「じゃあ、一度家に戻ってからでいいな」

「うん」

こうして直人の家でのプチ合宿の幕が開けた。

プチ合宿前編(前書き)

バカテスト

問 次の() に正しい年号を記入しなさい。

「 () 年キリスト教伝来」

霧島翔子の答え

「 1549年」

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

「雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993」

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

霧沢明人の答え

「 1549年」

教師のコメント

おや？またですか。正解ですが一体だれですかね。

プチ合宿前編

一度僕とみらいは家に戻り、今は直人の家に向かっている最中だ。

「えっと…こちつちかな？」

「もう、すっかりしてよアキ君。なんのために地図貰ったの」

「だって初めてだから」

「以外だよ、アキ君が直人くんの家行ったことなかったなんて」

「それは僕もだよ、みらいって料理教えてもらってるんだからてっきり知ってるものかと」

案外知ってるようで知らないな直人のこと。

「ここだね」

「少し遅れちゃったよ」

やっと直人の家に到着した。家は案外普通だね。

「隣って遠野さんの家だよね」

「うんその筈だよ。でも何で塀がないんだろ？」

これじゃ直人の家が遠野さんの敷地内にあるみたいだ。

「とにかく入ろうか」

「そうだね。ここに立っててもしょうがないし」

「おじやましまゝす」

「いらつしやゝい」

直人の家に入ったとき、出迎えてくれたのは意外な人物であった。

「えっと…いろいろ言いたいことはあるけど、何でいるの美沙ちゃん？」

出迎えてくれたのは笹倉美沙だった。

「面白そうなところに私あり その事を覚えてもらおう！みらリンにアッキー！」

「何言ってるんだお前！」

「あうち！後ろをとるとは…さすがナオッチ」

「…いいかげん人の名前を統一したらどうだ？」

確かに…直人や姫路さんとか雄二とか結構パターンがあるよね。雄二は基本ゴリラもじっただけだけど。

「それが私のアイデンティティー」

「もういい、拳がってくれ二人とも。今夕飯作ってるから食ったら」

勉強な」

「あ、私も手伝うよ直人くん。久しぶりに料理教えてもらいたいし」

「そうか、じゃあ頼む。美沙は明久を居間に案内しいといてくれ」

「はいさ アッキーこっちおいで」

「あ、うん」

美沙はまるで自分の家のように闊歩していった。

居間につくとそこには一人の少女がお茶をすすっていた。

「おや、吉井さんいらしたんですか。直人から話は聞いていますよ」

「こんにちわ遠野さん、その…Cクラスには迷惑かけてごめん」

「いいえ気にしないでください。そちらの策にはまった代表が悪いのですから」

「そう言ってもらえると助かるよ。ところで美沙はなんで直人の家知ってたの？」

「ふふふ、教えてほしいかいこの秘密」

「いや別に」

「あれれ！？アッキーそこは聞くとこるだよ！」

「いや、別に直人に後で聞けばいいだけだし」

「そんな消極的な事でどうする！もしかしたらこの後隕石が降ってくるかもしれない。そうしたら一生謎のままだよ。それでアッキーは耐え消えるの！」

「一体なにを言ってるんだ……」

「はー、吉井、その人はただ直人をつけてきただけですよ」

「おやや！？いつちゃだめだよリサポン。ミステリアスな感じが大事なんだよ」

「何を言ってるんですかあなたは……だいたい誰ですかリサポンとは」

「リサポンいやだった？じゃあ、リーちゃん、それとも、リサちゃんどれがいい？」

「普通に李紗か遠野で」

「オツケーリッちゃん」

「結局どれとも違うじゃないですか！」

「まったく…それと吉井さん、私のことも李紗と呼び捨てで構いませんよ」

「そう？それじゃあそうするよ、僕の事も明久でいいよ」

「それではそうさせてもらいます明久」

それから少しすると直人とみらいが夕食を運んできた。

「またせたな」

「まったよー、早くご飯ご飯」

「どれだけですっずっしいんだお前は」

「それにしても多いね、食べきれるの？」

「大丈夫だ、李紗ならこれくらいいたいらげる」

「人を大食みたいに言わないでください」

自覚ないんだ……

「早く食べよ！直くんフルコース」

「お前ほんと自由だな……」

『ニャーーーーー』

するとどこからともかくネコの声が聞こえてきた。

「お！何かこのネコちゃん　もしかして今日のメインディッシュ
？」

「んなわけあるか！なんでネコ食う奴がいるんだ！！」

「まったく、ほらレンこっちおいで」

「そのネ」李紗ちゃんのペットなの？」

「いいえ、直人のペットなのですかね？」

「疑問形ってことはやっぱり食ぞ……」

「違つといつてるだろ！昔拾つたんだよ。たまに出かけて戻ってくるの繰り返しだからペットと言えるかは疑問だけどな」

「はは、それより早くご飯食べよ、冷めちゃうよ」

「それもそうだな、勉強の時間もおいしい」

勉強しに集まつたんだもんね。

それから五人と一匹は手早く食事をすませた。

「ふー食べた食べた」

「おいしかったよ」

「今日もいい味でした」

「じゃあデザートにそのネ」……」

「何時まで言つてんだ！それにデザートはない。今日は勉強のため集まつたんだぞ」

「ちえっ、じゃあこれで我慢するよ」

そう言うと美沙はどこからかアイスをだした。

「お前それ家のだろ！どっから持ち出した！」

「当然冷蔵庫からだよ。うんおいしい」

そう言いながらアイスを頬張っていく美沙。

「人んちの冷蔵庫あさつといて何言ってるんだ」

「やはり叩きだしますか直人？」

「おや、やる気かい？いいぜかかってこいや」

「家を壊す気が…別に追い出さなくていいよ李紗。明久に勉強教えるなら美沙は役に立つ」

「おうよ 手取り足取りアキツチの面倒見てやるぜ」

「まあ頼む…それじゃ勉強始めるぞ」

勉強か…やっぱりやらなきゃだめだよな。やだな

「よしアッキーまずは保険体育の実習だよ」

「ふっ、臨むところや」

いや、勉強は楽しいな」

「アキ君…勉強だからね」

「は、はい。分かっているであります」

みらいは怒るとめっちゃ怖い……

「やはり追い出したほうが……」

「……様子を見よう」

そして騒がしさを増しながらも勉強会は始まった。

「さあアッキー！次間違えたらハリセンチョップだよ！」

「こ、こいや！」

「問題！大化の改新は何時起きたでしょう！」

「貰ったー！答えは泣くよウグイス大化の改新で794年だ！」

「アウトー！！」

「あべしっ！！」

ぐぐぐ…もう三十発は叩かれている。

「明久…小学生の問題を間違えるな」

「アキ君、大化の改新は無事故の改新、645年で覚えるんだよ」

「さあ次です、司法、立法、あと一つはなんでしょう」

「それは……憲法だ！」

「……違います」

「え！？じゃ、じゃあ漢方だ！」

「はいアウトー」

「ぐはっあー！」

さ、三十一発目……

「アキ君……行政だよ」

「明久……もう少し頑張れ」

「そんな事言われても……」

「まあいい次だ、楽市楽座をおこなった人物はだれだ？」

「えっと……の、ノブ！」

「……まあ、頑張ったなほうだな」

「織田信長だよアキ君」

「じゃあ惜しかったご褒美 レンちゃんをだっこさせたげよう」

『……にゃあーにゃ……』

なにこれ！ネコにため息されたみたい。全然ご褒美じゃないよ！むしろ泣けてくるよ。

「アキ君、気を取り直して次の教科いこう」

「それじゃ世界史にするか」

「気になったんだけどさ直人…さっきからなんで暗記物ばかりやるの？」

「時間がないからな、数学や英語はもう一度覚えなおさないとけない。それなら暗記物にしぼった方が点数になる」

「なるほど……」

「納得したところで始めるぞ。アメリカ大陸を発見した人物を答えろ」

「えっと……コロンブスだっけ？」

「正解だよアキ君」

よっし！これで十問めの正解だ！

「ですが コロンブスのフルネームは？」

「え!?!?.....わからないや」

「私も、なんなの美沙ちゃん?」

「アンサーはクリストファー・コロンブスだぜ 覚えとくといいよ」

「初めて彼女がやくにたちましたね」

「そう言っつてやるな。勉強にはなってるだろ」

普段ほんとにAクラス並の成績なのか疑わしいのにな。

「アツキー失礼な事考えてないかえ?」

「え!まさか!」

なんでみんな分かるんだろ?

「じゃあ次の問題正解できたら見逃してあげる」

こ、これは間違えられない。

「問題!大陸封鎖令を発した人物は誰でしょう」

「う.....な、な.....」

「.....な?」 「.....」 『なあー』

「な、ナポリタン!」

「「「」……………」

「それは……スパゲティーだぜ」

「へぶしっ!!」

ああ、目の前が真っ白に。

どきっ!

「きゃあ!アキ君!!」

「おいしそうな偉人でしたね。そうだ、明日はパスタにしてください
い」

「言ってる場合か…おい明久、大丈夫か?…完全に気絶してるよ。
ノックアウトしてどうすんだ美沙」

「やりすぎちゃったぜ」

「やりすぎちゃったぜ じゃないよ美沙ちゃん!アキ君がこれ以上
バカになったらどうするの!」

「みらい、テンツパテ凄い事言ってるぞ」

「どうします?明久がのびてしまったことに変わりないですよ」

「じゃあ明久が起きるまで休憩でいいだろ。女子は風呂にでも行っ
て来たらどうだ?」

「そうですね、そうしますか皆さん」

「いいね みらリンとお風呂」

「なんか怖いんだけど美沙ちゃん」

「それでは私の家の方に行きましょう。直人の家のお風呂では狭すぎる」

「おつきなお風呂楽しみだね 直くん覗かないでよ」

「誰が覗くか！」

「きゃー直くんに襲われるー」

「さっさと李紗達についてけー！」

「おおよ、何時の間に！待ってよ！みらリンにりさリン！」

「まったくあいつは……」

みらい達が風呂に行ってから暫くして明久が目覚めた。

「う、こじは……」

「やっと起きたか明久」

「あれ直人…そっか確か美沙に…そういえば皆は？」

「ああ、李紗の家の風呂に行った」

「風呂！」

今三人が風呂場で戯れている…男として…行かなくては！！

「先に言つとくが明久、覗きに行こうと考えるなよ」

「まさかあ、僕のような紳士がそんなことを」

何故僕の考えは先読みされるのだろ。

「ま、行ったところで見つかって殺されるのがせきのやまだろうがな」

殺される！？そこはせめてしばかれるじゃないの！？

「あまいな明久、李紗の入っている風呂を覗きに行くなんで、自分からマグマの風呂に入るようなもんだぞ」

「そうなんだ…てゆうか僕まだ何も言っていないよね！？」

「明久は考えてることを顔に出してるんだ」

そうなのか、気をつけよ。

その頃風呂場では……

「くしゅっ！」

「どつしたの李紗ちゃん？風邪？」

「いえ、誰か噂でもしているのでしょう」

「もしかしてあっちで、覗きの話し合いでもしてるんじゃないかい」

「まさか」

「そうだよ、いくらアキ君でも覗きなんて…」

「直人だってこんなことで命を失いたくないでしょうし」

「そっち!」

いくら覗かれたからってそれは……

「またまた〜りさチン。ホントは期待してるくせに〜」

「そ、そんなわけありません!」

「おやおや〜言いよどむところを見ると実はもう……」

「そんなわけありますか!」

助けて直人くん。私だけじゃツッコミきれないよ。

「みらリンもアッキーにきてほしいよね〜」

「な、何言ってるの!そんなわけ……」

「またまた〜期待してるくせに」

「いや…その…少しだけ…」

「みらいさん！惑わされてますよ！毒電波にあてられていますよ！」

「……っは、ごめん、私なんか変なこといった？」

「いいえ、何も言っていないですよ」

「二人とも罪な男だね〜」

「「へつくしゅっ！！」」

「直人かぜ？」

「まさか、明久こそ」

「僕がかぜを引くわけじゃないじゃないか」

その後また勉強をして今日は就寝することになった。

プチ合宿後編(前書き)

バカテスト

問、以下の問いに答えなさい。

「ベンゼンの化学式を書きなさい」

姫路瑞希の答え

「C6H6」

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

「ベン+ゼン=ベンゼン」

教師のコメント

君は化学をなめていませんか？

吉井明久の答え

「B-E-N-Z-E-N」

教師のコメント

あとで土屋君と一緒に職員室に来るように。

霧乃直人の答え

「C6H6」

教師のコメント

正解です。理化系は君の得意分野でしたね。

プチ合宿後編

昨日の勉強会から一夜あけた。

俺と明久はいま……

『諸君、我等の使命は何だ!?!』

「「「「学園の平和の維持だ!」「」」」

『異端者には!?!』

「「「「死の鉄槌を!」「」」」

『男とは!?!』

「「「「愛を捨て、哀に生きる者!」「」」」

『宜しい……では2-F、FFF団が異端審問会を始める!?!』

「「「「異議なし!」「」」」

覆面を着けたFFF団を名乗る集団に囲まれていた。

『罪状を読み上げたまえ、横田二級審問官!』

『はっ!吉井明久、並びに霧乃直人は、昨日星野未来、笹倉美沙、遠野李紗を家に招き入れたと報告がありました!』

『ええいつまどろっこしい！完結に述べよ！』

『三人とお泊りができて羨ましいであります！』

『うむ！わかりやすい返答だ！』

「どうしよう直人、このままじゃ……」

「は、朝からバカの相手は疲れる……」

『被告人、言い残すことはあるか？』

「なんで弁護の前に遺言なの！」

「お前ら……かかってくるなら覚悟しろ」

直人から凄まじい殺気が飛ぶ。

『くっ……怯むな！悪魔とてこの人数なら勝てるはずだ！かかれーっ！……』

「……うおおおーっ！……」

「せっかくチャンスをやったのに……安心しろ、テストを受ける力は残しといてやる」

そして直人とFFF団の死闘が始まった。

そして五分後……

「「「「」、この悪魔め……」「」「」

積み上げられたFFF団の山ができていた。

「朝から疲れた」

「さすが直人だね」

「ちょっとやりすぎじゃない直人くん？」

「このくらいやらないとこいつら懲りないからな。で、康太も来るか？」

「ツツ！……（フルフル！）」

ムツツリーニは無事だったみたいだね。

「朝から騒がしいのうお主等は」

「秀吉か、何でこいつらが昨日の勉強会の事知ってたんだ？」

「美沙が今朝からクラス内で言っておったぞ」

「あいつか…朝いないと思ったら面倒増やしやがって」

「やっぱ追い出せばよかったか……」

「ヤッホー 昨夜ぶりだねナオツチ」

「なにが昨夜ぶりだ…余計な面倒おこして」

「あつちも凄いことになってるけど？」

「吉井くん！みらいちゃんとお泊りしたって本当なんですか！」

「正直に言いなさいアキ！」

「ま、まって島田さん、まずはそのコブシを収めて！」

「お、落ち着いてよ二人とも」

今度はこっちか…

「何を言ってるんだお前たち。勉強会って言ってるだろ。何で泊まりってとこだけ聞き取ってたんだ」

「で、でも……」

「一体何がでもなんだ」

「アキの事だから、みらいに変なことするかもしれないじゃない！」

「あのな…明久はみらいとお隣さんなんだぞ。今更変なことなんて起きるわけないだろが」

「そうだぜ二人とも」

「美沙くちゃん>>」

「アッキーは昨日保健体育の実習を勉強しただけだぜイ」

「「なんですって!!」」

「何を言ってるんだ!場を混乱させるな!」

「あたっ!くゝまたやられちまったぜ」

「アキ、祈りなさい」

「美波!落ち着くんだ。まずその卓袱台を置いて冷静に話し合おう」
またか……どうしてこのクラスは…

「落ち着けバカ!」

「いたっ!女の子に何すんのよ!」

「今の自分の姿を見る。百人が百人、殺人鬼って答えるから」
確かに。と起きていたFクラスメンバーが全員思った。

「な、失礼ね!」

「明久に対しての行動と発言の方が失礼だと思っぞ」

「そんなに明久と泊まりたいならお前も勉強会来るか?」

「え!?!……その、アキがどうしても言うのなら」

「いや、別にいいけど」

「ア・キ・が・ど・う・し・て・も・っ・て・言・う・の・な・ら

「は、はい是非いらしてください」

今の殺気は直人以上だ。

「あの、私もいいですか？」

「別にいいけど」

「それならワシもいいかの？」

「俺も行くかな」

「……俺も」

結局全員か……

「いいけど男は何か食材もってこい」

「は？なんで食材なんざ持ってかないといけねえんだ」

「別にいいけど、お前の夕食は雑草になるぞ」

「何を持ってきたらいい？」

ねがえるの早！

「何でもいいよ、食べたい物の食材持ってくれば作るから」

「雄くんバナナはだめだよ」

「誰がバナナなんか持ってきたか！」

こうして騒がしさを増しながら一日が過ぎていった。

「それで、秀吉はなに持ってきたんだ？」

「ワシは丁度家にもらい物の魚介類があったのでそれを持ってきたぞい。雄二のそれはなんじゃ？」

「俺はいい肉が有ったんでそれを持ってきた。ムツツリー二はなに持ってきた？」

「鉄分になるもの……」

「……勉強しに行くんだぞ」

先が思いやられるな。

「ところで直人の家まだかの？」

「そろそろのはず何だが」

「……見えた」

「ここか、塀がない以外は案外普通だな」

「家なんじゃから普通に当然じゃろ」

「……入る」

「「「おじゃましまーす」「」」

「来たね、秀くん、雄くん、むーくん。いらっしやい。ここが天下の直人家だよ」

出迎えてくれたのは何時もどつり、騒ぎを巻き起こす人、笹倉美沙だった。

「何しておるのじゃ美沙？」

「ん〜ま、案内人的な。それより男子の諸君、食材を渡したまえ。今なお君とみらリンが料理してるから私が持っていくよん」

「そうか、ほら、これ俺のだ」

「ワシはこれじゃ」

「……これ」

「確かに受け取ったよん。それじゃあアッキー達が勉強してる居間へご案内」

そして俺たちは美沙につられて明久達のもとに案内された。

「……何があつた島田？」

「うづう……いいのよ、所詮私はバカなのよ」

「ミナミンはね、さっきアッキーと日本史のテストをして負けちゃったんだよ」

「なんと！明久が島田に勝ったのか！」

「吉井くんも成長してたんですね」

「泣けてくるんだけど……」

みんな僕をなんだと思ってるんだろ。

「これも昨日体に叩き込んだからだね」

「いいかげん、誤解を招く言い方は止めたらどうです」

「体に叩き込んだってどういうことだ？」

「雄くんにもやっただげる 問題！キリスト教は何時日本に伝わったでしょう？」

さっきのテストにあったね。

「ふつ簡単だな、答えは…雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993年だ」

どんな答えだよ……

「そんなわけ……無いだろがー！ー！」

「じはあぁっー!!」

雄二に向かって振り切られるハリセン。スパーンという音が部屋に響く。

「どう雄二、体に叩き込むの意味わかった？」

「あ、ああ、み、身を持ってな」

結構効いたみたいだね。姫路さんの料理を食べたムッツリーニみたいになってるよ。

「その二人もやる？」

「全力で遠慮する!!」

「じゃあアッキー答えをどうぞ」

「以後よく広まるキリスト教で1549年だね」

「正解!ご褒美にレンちゃんだっこさせたげる」

「いや、またため息のような鳴き声出されてもあれだし」

『にゃっ』

そお言うとレンは美沙の腕から雄二の頭の上に移った。

「なんだこいつ」

「あ！ネコは自分より格下の人を決めるって言うじゃない 雄くんは格下選ばれたんだよ」

「それは犬だ！！」

「えゝそつだよねレン」

『にゃあー』

なんか同調してるみたい。

「くそ！下りやがれ！」

『ふしやーっ！！』

「いてーっ！！！！」

爪でひっかかれる雄二。そんな乱暴に扱っから。

「さつきから何騒いでんだ。夕食できたぞ」

「腕によりをかけたよ」

「ナオミラ料理やつときた さ、さ、食べよ食べよ」

「なんじゃナオミラ料理とは…しかし美味しそうじゃの。これはフシの持ってきた魚介類かの？」

「ああ、取りあえず座ってくれ、料理並べるから」

直人とみらいが作った料理が並べられていく。そして雄二の前には

……

「ほら雄二の分だ」

バナナのフルコースが並べられる。

雄二が直人の頭をわしずかみにして、机に叩きつけた。

「なんでだ！！、おま、これ、バナナじゃねえか！なんで俺のだけバナナなんだよ！俺が持ってきた肉はどうした！」

雄二に頭を叩きつけられた直人がのそりと起き上った。

「いてえな、だって美沙から雄二の分てバナナ渡されたぞ。美沙が『俺の料理はバナナだけでいいから、肉は全部美沙にやってくれっ』て』と喋ってたぞ」

名前を挙げられた美沙はもくもくと料理を食べていた。直人は言葉のわりにはあまり効いていないようだった。だから李紗さんも何も言わないんだね。

「お前か原因は！なにもくもくと肉食ってたんだ！今すぐ返せ！」

「まったく食事くらいで騒がしい、いらならそのバナナ料理貰いますよ」

「勝手にしろ、それより早く俺の肉を返せ！」

騒がしさを増しながら食事は進んでいった。

「それじゃ食事も済んだし勉強はじめるぞ」

「それじゃ班を分けるか、姫路と美沙が基本教えるとしてどっちに着く？」

「……断固姫路で！！！！」

「ちよつと、それはどういう意味かね？」

片寄ったな…ま、しかたないか。

「じゃあ男子はグツパで決めな、俺は少なかったほうでいいよ」

「……グツパーじゃす！！！！」

結果 姫路組 明久、秀吉、未来、美波

美沙組 雄二、康太、直人、李紗

「よし、始めるぞ。雄二も康太落ち込んでないでこつち来い」

「ふふふ、可愛がつてあげるよ」

「全力で遠慮する！！！！」

暫くして……

「さあ、むーくん。次は君だぜ 問題、1600年に何の戦いがあったでしょうか？」

「……………」

「カウント入ります 15、14、13、12、11」

「……………（ワタワタ！！）」

「10、9、8、略、1」

「！！それはひきよ……………」

「0、はい タイムアウト」

また部屋にスパーンと言う音が響いた。

「答えは関ヶ原の戦いでした。さあ、次どんどん試してみよう」

「向こうは静かなのになんでこっちはこんな騒がしいんだ」

「しらん、それよりせつかく李紗がいるんだ。聞くことがあるだろ」

「そうだな。遠野、Aクラスとやりあったんだろ何か情報を貰いた
いんだが」

「情報を流すのは私の騎士道反すので言いたくないです」

まあそうだろうな。

「そこを頼む李紗、Aクラスに勝つにはその情報が必要かもしれな
いんだ」

「……ふむ、直人がそこまで言うのなら」

なんでこいつは直人の言う事しか聞かないんだ……

「それは仕方ない事なんだよ雄くん」

「おわ！心を読むな美沙！ムツツリーニはどうした」

「そこで寝てるけど」

寝かされたの間違いだろ。

「おい雄二、教えてくれるってよ。お前が聞かなくてどうする」

「すまんすまん、で、何か有力な情報はあるか？」

「はい、Aクラスで最も危険な人物は貴方は誰と考えていますか？」

「そりゃあ…翔子だな、あとは木下か久保とかだな」

「確かに点数だけならそうですね。しかしそれは間違いです」

「それはどういうことだ？」

他にAクラスで危険視する人物がいるのか？

「私の見たところ、Aクラスで最も危険なのは、坂田銀二さかたぎんじですね」

「坂田銀二？」

聞かない名だな。

「はい、点数だけならAクラスで最も下でしょう。しかし操作技術が違う。彼は私や直人と同じように武術をやっていると思います。召喚獣の操作に武術の動きが見えました。おそらく一騎打ちなら霧島代表にも勝てるでしょう」

「そこまでなのか！」

「彼に確実に勝てるとしたら、直人が本気を出せる教科で挑むか、明久の点数をその時だけでもAクラス並にするかしくはなくて」

「明久でもかてるのか？」

「明久の操作技術はおそらく学年一でしょう。いくら操作が上手といっても一般人よりも高い。それに武術の技術が重なって強さを増している。今なら明久でも点を上げれば勝てる可能性があります」

「わかった、そいつには気を付けることにしよう。他にはあるか？」

「あと危険と言ったら…響ひびき聖花せいですかね」

「そいつは俺のデータにもあるな。木下姉同様文武両道、才色兼備で男子生徒のあこがれの的だそうだ」

「そんな人がいたのか。」

「ちなみに彼女にしたいランキングに毎回五位以内に入っている」

「ムツツリー二起きたのか」

「ついさっき……」

「確かに厄介そうではあるがそこまで危険なのか？」

「はい、彼女は召喚獣の装備が厄介でしたね。銀の大きな楯はどんな攻撃も弾かれてしまいます。私の召喚獣も、弾かれた瞬間に坂田さんにやられてしまいました」

「何か突破口は見つけられなかったか？」

「突破口はよくわかりませんが、楯はそのまま武器になります。そのことを頭に入れてほしいですね」

「わかった、ほかにはないか？」

「他はとくにはないかな…あ、言い忘れた、響さんも多少武術をやっていると思います」

「つうかこの学園武術やってるやつ多いな。」

「そうか、ありがとな」

「貴方のお礼はいいです。それより直人、約束忘れないでくださいね」

「わかってるよ」

「礼くらい素直に受け取ったらどうだ？」

「まあまあ雄くん。恋する乙女は前しか見えないんだよ」

「そういうものかね」

「それより雄くん、勉強の続きだぞ アッキーでもわかる問題わからなかったんだもん。ミツチリ体に叩き込んであげるよ」

「遠慮する…と言いたいがさすがにやらないとな」

「お、やる気だね雄くん」

「これでも代表だ、足を引っ張るわけにはいかねえ」

「ビシバシいくぜ」

「かかってこいや!」

雄二もやる気になったようだ。さてさて、Aクラスに勝てるのかね？

「あ、むーくんも起きたならやらないとね」

「っ!?!遠慮する」

「まあまあ遠慮するなや そうだ 十問以上正解できたら水着で写真とらしてあげる」

「…ツツ!!ブシヤアア!?!」

家を血で汚すなよムツツリー…

「どっする？やるかい むーくん」

「…男には…譲れないものがある」

「やる気になったね それじゃいくつよ」

「『コイヤー!!』」

何時の間に明久まじった？三人の女子が後ろで般若顔になってるぞ。

「騒がしいクラスですね」

「確かにな。でもいいクラスには違いないさ」

「直人が言うならそうなのでしょうね」

三人の女子に叱られる明久と、バトルのように勉強をしている三人と、それを眺める三人をかわきに、直人家合宿の夜は更けていった。

Aクラスへ宣戦布告（前書き）

未「まずはレフェルさん、感想ありがとうございます。とてもうれしかったよ つぐみちゃんにもありがとっつて伝えてください」

明「いよいよAクラスに宣戦布告だね」

直「上手く交渉いくといいな」

笹「そうだね うまくいくといいね」

明「美沙、なんかいつもと違うくない？」

笹「お礼に行ってるみらリンの代わりに、みらリン風にふるまってみました」

直「あんま似てなかったけどな」

笹「そんな、酷いよ直人くん」

直「……やめてくれ、なんか寒気がする」

笹「あっはは それではどうぞ」

Aクラスへ宣戦布告

直人家の合宿も終えて点数補給テストも終わった次の日の朝。いよいよAクラスに試験召喚戦争を挑む時がやってきた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったことだ。感謝している」

坂本くんがクラスの皆にお礼を言う。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ、自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

確かにFクラスがここまで来たというのは凄いことだと思うよ。

「だがまだ最大の壁が残ってる。言うのは早いと思うぞ」

「ああ。ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突き付けるんだ!!」

坂本くんがそう言うときクラスから歓喜の声があがる。

『そっだぜーっ!』

『勉強だけじゃねーっ!』

『うおーっ!』

Dクラス、Bクラス相手に勝利した自信が、みんなを奮起させていた。全ては坂本くんのシナリオ通りに事が進んでいる事も、それを大いに助長させている。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

私たち合宿に参加したメンバーは驚かなかったけど、クラスのみんなからは驚きの声があがった。

『どういう事だ?』

『誰と誰が一騎打ちするんだ?』

『それで本当に勝てるのか?』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二の声に、皆が静まる。クラスを勝利に導いたことにより、発言力と立場を強化してきた雄二は、代表として、確かに信頼されていた。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

「バカの雄二が勝てる訳ない……」

ヒュッ！（カッターが明久に向けて投げられた音）

ガッ！（投げられたカッターを直人がつかむ音）

「直人、邪魔をするな」

「危ないだろが、こんなことしてないでさっさと説明にうつれ」

アキ君も言い過ぎただけだね。

「……まあ、その通りだな。まともにやり合えば勝ち目はないかもしれないが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？ まともにやり合えば俺たちに勝ち目はなかった。今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ちは揺るがない……俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる！」

「……おおーっ！！」「」「」

信頼の証として、全員が雄たけびを上げた。

「でも、どうやって勝つのさ。霧島さんは強いんでしょ？」

「まあ、明久の言う通り確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない」

それに皆には言っていないけど、一騎打ちにならなっかたらもっと厄介な人もいるしね。

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちは、フィールドを限定するつもりだ」

「……フィールド？何の教科でやるつもりだ？」「……」

「日本史だ。ただし、内容は小学生程度、方式は100点満点の上限あり。召喚獣勝負ではなく、純粋な点数勝負とする」

試験召喚戦争は、テストの点で勝敗を決する物である。だからこそ、テストの点を用いた勝負であれば、方法次第では採用される。

「小学生程度のレベルで満点ありですか」

「それだと満点が前提となつて、ミスした方が負ける注意力勝負になるねん」

「けど雄二、合宿であれだけ酷い解答出しといて大丈夫なの」

確かにね、アキ君がわかつた問題ができなかつたんだから心配にもなるよね。

「心配するな、確かにあの時のままでは不味かつた。しかし俺は勝つ！この傷にかけて！！」

そして美沙ちゃんに引つ叩かれて膨れた顔をさした。

「まったく説得力がないぞ雄二」

「でも同点だつたら、きつと延長戦だよ？そうなつたら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かにアキ君の言うとおりだね」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？ 幾らなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などというものか」

何か弱点でも知ってるのかな？ 合宿のときは詳しい事は教えてくれなかったし。

「？ それなら、霧島さんの注意力を乱す方法を知っているとか？」

「いいや。アイツなら集中なんてしていなくとも、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」

そうなんだ。さすが学年主席は伊達じゃないね。

「雄二。あまりもったいぶるでない。そろそろタネを明かしても良いじゃろう？」

私もクラスの皆も木下くんの言葉にうなずきます。

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

ついに坂本くんの策が明らかになるんだね。

「俺がこのやり方を選んだ理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

ある問題ってなんだろう？

「その問題は……… <大化の改新>」

「大化の改新で小学生レベルと言ったら……年号を答えるとかか」

答えは645年だね。でもこんな簡単な問題間違えるのかな？

「直人の言うとおりだ、その問題を翔子が間違えるのは確実だ。だからその問題が出たら俺達の勝ちだ！はれてこの教室とはおさらばだつて寸法だ！」

そこまで断言するあたり、みんなが信用するには十分である。そう結論付けるには、十分な自信を持つ坂本くんの姿だった。

「あの、坂本君」

「ん？ なんだ姫路」

すると瑞希ちゃんがおそろおそろ手を挙げ質問した。

「合宿の時から気になってたんですが、霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」

ここでおさらいしておこう。FFF団は自称、学園の平和の維持を目的とした組織である。そんな彼らがもし女子と親しい人物を見つけたとする。その男子を見逃すという……

「ああ。俺と翔子は幼馴染だ」

答えはNOである。

「総員、狙ええええ！！」

須川会長の命により坂本くんに一斉に上履きが構えられる。

「なっ！？何故須川の号令で急に構える！？」

「黙れ男の敵！Aクラスの前に貴様を殺す！！」

「俺が何をしたと！？」

坂本くんの幼馴染という言葉だけで、クラスの絆が一気にくずれた。

「待て！新太四級監視委員、靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

「了解です会長！」

なんて無駄な団結力なの……

「みんな止めてよ！今はクラス内で争ってる場合じゃないでしょ！」

「……すんませんした姫！！」「……」

みらいの一言でクラスが一瞬で元の状態を取り戻した。

「ふう…助かったぞ星野」

「いいよ、坂本くんに倒れられたら困るもん」

「あ、ああ、すまねえ」

みらいの癒しスマイル、これは効くぜ

「……総員、狙えええ!!」「」「」

「何故だ!!」

「ちよつと皆!」

『すみません姫、こればかりは姫の頼みでも聞けません!』

『安心してください!一瞬で抹殺しますから!』

『姫の名にかけて必ず打ち取ります』

「何言ってるの皆!?!」

どこの家臣と姫君だよ……

「おまえ等!幼馴染がどうか言うなら、明久なんて星野に毎日起こしにきて貰ってるんだぞ!」

「」「」「なにいいーっ!」「」「」

標的にアキ君まで加わっちゃった!!

「み、みんな冷静に……って、なんで姫路さんがぼくに攻撃態勢をつ?！そして美波は、なんで掃除用具いれをかついで、ぼくに近づいてくるの?!」

『たまれ裏切り者!』

『俺だって、俺だってなあ！！かわいい女の子の幼馴染が欲しかったんだぞ！』

『全男子の夢、幼馴染に起こしてもらおうを味わうなんて、許せん！』

『姫路さん結婚して！』

「……「みらいちゃん、吉井なんかじゃなくて俺を……ハアハアハア」」

「ひえ〜、た、助けてみらい！さっきの笑顔をもう一度見せて」

「助けてほしいのはこっちだよ！！ち、近づかないで！！」

「あんたら……みらリンを怖がらせるなら容赦しないぜ！！」

「……直人よ、これはどうしたらいいのじゃ」

こいつらは……バカと変態と殺人鬼しかいないのか……

ドゴオオン！！

直人が畳を殴りつけるとクラス全体が振動した。

「お前ら、これ以上騒いだら……わかるな？」

「……い、イエス……魔王様」」

「今のうちにさっさと進める雄二」

「あ、ああ」

クラスは落ち着き？を取り戻したけど、直人くんまた誤解されちゃったんじゃない。

「ごめんね直人くん、私のせいで」

「？何の事だ？」

「だって…また悪評が広まっちゃたら…」

「気にすんな、今更関係ねえよ」

そう言ってくれると助かるけど……

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さい頃間違えてウソを教えたんだ」

「それが、大化の改新かの？」

「そうだ。アイツは1度覚えた事は、決して忘れない。だから今、学年トップの座にいる。だが俺はそれを利用し、アイツに勝つ！そうしたら俺達の机は……」

「……システムデスクだ！」「」「」

そして再び士気が最高潮に高まる。

「一騎討ち？」

「そのとおりだ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

所変わってAクラス。雄二、俺、明久、秀吉、康太、みらい、島田、姫路、美沙で宣戦布告に来ていた。

「うーん、何が狙いなの？」

雄二と交渉しているのは霧島ではなく、秀吉の姉、木下優子だ。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを冒す必要も無いかな」

「賢明だな。ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったよ？ 何の問題もなし」

はったりだな。李紗は十人はAクラスを補習室送りにしたはずだ。少なからず被害も出たはずだ。

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……、昨日来ていたあの……」

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだされてないようだが、さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよな？」

ここでまた確認だな。

試召戦争の決まりの一つである、準備期間。試召戦争に負けると、三ヶ月の準備期間を待たない限り、戦争を申し込むことができなくなる。この決まりは負けたクラスがすぐに再戦を申し込んで、戦争が泥沼化しないように作られた決まりだ。

「知っているだろ？ 実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は<和平交渉にて終結>つてなっていることを。規約にはなんの問題もない。…… Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

設備を入れ替えなかった理由の一つだな。

「……それって脅迫かな？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

どう見ても脅迫だな。

「ちょっと待てよ木下！」

すると横からちゃちゃが入った。ちゃちゃを入れた人物は李紗が最も警戒しろと言った人物、坂田銀二だった。

「何よ、あなたはAクラスの品位を下げるんだから出てこないでくれる？」

酷えいい様だな。

「おいそりやどお言う意味だ！」

「Aクラスなのに授業を真面目に聞かない、身だしなみも整えない。Aクラスの品位を下げてるとしかおもえないわ」

「そこまで言わなくてもいいんじゃないの！俺はな、Aクラスに比べ、有意義に過ごせると思って頑張つて勉強したんだぞ！そのゆうゆうじてきな生活を崩されるのは納得いかねえ！そんな要求却下だ却下！おめーらなんか俺一人で十分なんだよ！！」

不味いな、言ってることはめちゃくちゃだが、このままだと一騎打ちに持ち込めない可能性がある。

(どうするの雄二、なんか形勢ふりじゃない？)

(まずいな、こいつ話よりも数倍やっかいだ)

(よし、ここは任せとけ雄二)

(なんだ？秘策があるのか直人)

(ああ、一応だがやってみる)

(よし、任せたぞ)

いくか……

「おい、その銀髪！」

「ああ、なんだこら！ふざけた目しやがって。なんだお前は！悪魔か！それとも魔王なのか！」

あの人李紗さんがいたらどうなってたんだろ。

「なんだ、おれが悪魔なら、おまえは焼け野原のようじゃねえか」

「おい！そりゃどお言う意味だ！頭か、俺の頭の事か！、これはな、天然パーマなんだよ。直したくても直せねえんだよ！」

「そうかよ、俺の目も直せねえんだよ！お互い様だろ。突っかかるなよ」

「先に話してきたのはおめえじゃねえかよ、なんだよお前イラつくな」

「俺はお前のテンパを見てるとイラつくよ」

「なんだよお前！いきなり出てきてどんだけ俺をイラつかせんだよ！、イライラにメーターがあつたらもー振り切ってるよ、三周くらい振り切ってるよ！」

「しらねえよ、そんなに俺を黙らしたいなら俺と一騎打ちで勝負しろよ。俺が負けたら土下座でもなんでもしてやるよ！」

「言ったなお前！見てろよ！ぜってー土下座さしてやる！いまにみ

てるよ！木下、その挑戦受けてやれ！ぜってーそいつぶつたおす」

そお言うと坂田はAクラスの奥へと消えていった。

（こんなんでどうだ）

（上出来だ、これならいけそうだ）

「で、奴もああ言ってるがどうする？」

「……わかったよ。あれのことはおいておくとして……何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎討ちじゃなくてそうだね、お互い七人ずつ選んで、一騎討ち七回で四回勝った方の勝ち、っていうなら受けてもいいよ」

さすがに素直には受けないか……

「なるほど。こっちから姫路か笹倉が出てくる可能性を警戒しているんだな？」

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんや笹倉さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし」

他の奴らは眼中にないってか。ずいぶんと余裕な発言だな。

「安心してくれ。うちからは俺が出る」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みにはできないよ。これは競争じゃなくて戦争だからね」

「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い」

「ホント？ 嬉しいな」

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。その位のハンデはあってもいいはずだ」

そこが一番の問題だな。できたら全部もらいたいところなんだが。

「え？ うーん……」

さすがに悩むか……

「……受けてもいい」

「うわっ！」

「……雄二の提案を受けてもいい」

すると霧島がでてきた。物静かだからなのか、普通の奴は気配を感じ辛いみたいでいきなり現れたように見えるらしい。

「あれ？ 代表。いいの？」

「……その代わり、条件がある」

「条件？」

「……うん」

うなずくと、霧島は姫路と笹倉を見つめてから、

「……負けたほうは何でも一つ言うことを聞く」

と言い放った。

「……………（カチャカチャ）」

「ムツツリーニ、まだ撮影の準備は早いよ！　というか、負ける気満々じゃないか！」

何をしてるんだあいつは……

「じゃ、ごうしよう？　勝負内容は七つの内四つそっちに決めさせてあげる。三つはうちで決めさせて？」

さすがに全部こっちが決めるのは譲れないか。

（姫路さん、美沙、どうする？）

（はい？　何がですか？）

（何が、って。もし僕らが負けちゃったら姫路さんか美沙は……）

（何のことだかわからないですけど、きっと大丈夫です）

(大丈夫さ。もしやられちゃったら、アッキーが慰めてくれるよね)

(え！？それは、その……)

「交渉成立だな」

「ゆ、雄二！ 何を勝手に！ まだ姫路さんとが了承してないじゃないか！」

「おやや！？私は了承した扱い！！」

お前さっきの発言忘れたのか……

「心配すんな。絶対に迷惑はかけない」

「……勝負はいつ？」

「そうだな。十時くらいでいいか？」

「……わかった」

「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」

「そうだね。皆にも報告しなくちゃいけないからね」

そして俺たちはFクラスに戻った。

もうすぐ最後の決戦か……どうなることやら。……そういや坂田の奴と勝負の約束したっけか。ま、どうでもいいか。

Aクラスへ宣戦布告（後書き）

人物紹介

坂田銀二

イメージは銀魂の坂田銀時。ただ銀さんが縮んだだけ。トレードマークはテンパ。銀さんにツッコめる人がAクラスでほとんどいないので実は寂しくてしょうがない。

召喚獣データ

白夜叉の時と同じ装備で刀に鎧。腕輪使用で斬撃を飛ばす。

FクラスVSAクラス 1 (前書き)

「レフェル様感想ありがとうございます。とても励みになります」

明「Aクラス戦開始だね」

直「とうとうここまで来たって感じだな」

未「長かったね」

雄「ぜってー勝ってみせる！」

笹「それじゃあ、始めるぜ」

五人「「「「試験召喚獣召喚！サモン！！」「」「」」」

FクラスVS Aクラス 1

午前10時、Aクラス教室にて。

「改めて見渡してみると、すごいな」

「だね」

巨大サイズのプラズマディスプレイ、人数分用意されたシステムデスクにリクライニングシート。パソコンや個人用エアコンや冷蔵庫まであり、その中身も学園側で管理。まるで高級ホテルのようである。

「では、両名とも準備は良いですか？」

Aクラスの担任であり、学年主任でもある高橋教諭が立会人となり、ここAクラス教室内で、Aクラス対Fクラスの試召戦争は幕を上げた。

「問題ない」

「……大丈夫」

声をかけられた両クラスの代表は、ふたりとも肯定の意志を高橋教諭に告げる。

「それでは一人目の方、前へどうぞ」

高橋教諭につながされ、Aクラスから一人歩みでる。

「アタシから行くわ」

出てきたのは気の強そうな美少女、木下優子。Fクラスを威圧するかのように仁王立ちになっている。

「ならばワシが出よう」

対するFクラスからは、演劇部のホープ木下秀吉がでた。

二人が対峙する中、木下優子が口を開けた。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「……あ。す、すまぬ姉上。あれは正直やりすぎたと思ったのじゃ。反省してある、どうか許してほしいのじゃ」

問いただされ素直に謝る秀吉。

「ふーん。悪いとは思ってるんだ。じゃーいいや。その代わりに、ちよつとこっち来てくれる？」

そう言われると、秀吉の顔が一気に青ざめた。

「ま、待ってほしいのじゃ姉上！せめてこの試合が終わってからにしてくれんか」

「あんなんかが私に勝てるわけないでしょ。まったく、Fクラスなだけでも恥ずかしいのに」

それは俺たちFクラス全員に対する挑戦と受け取っていいのか？

「演劇なんかにつつつを抜かしてないで、真面目に勉強したらどうなの」

自分のことならまだしも、演劇の事までバカにされて秀吉の表情がムツとなる。

「姉上、Cクラスの事は確かにワシがわるかった。その事は謝る。しかし演劇の事までバカにするのは許せん！演劇で舞台に立つのはワシの夢なんじゃ！」

秀吉の夢か…立派な夢だな。

「笑わせないでよ。そんな叶いもしない夢なんか見てないで、もっと周りを見なさい」

なんだこいつ、人の夢までバカにするきか。

「秀吉、俺とかわれ」

「直人！？しかし……」

「なに、ちょっとムカついただけだ。あいつにさっきの言葉訂正させてやる」

「……すまぬ」

「というわけだ、弟にかわってお相手させていただきます」

「別にいいわ、誰が出ようが関係ないもの」

自信満々だな。

「チヨイまでよ！お前俺とやるんだろっが！」

すると坂田が文句を言ってきた。

「ちょっと！あなたは出てこないで、誰かどっかにやっといて」

「あ、こら！離せてめえら！」

そのまま連れ去られていく坂田。

「さて、邪魔者も居なくなっただしやりましょう」

「そうだな、あんたのメツキをはぎ取ってやる！」

「勝手に言ってなさい。確かあなた物理が得意なんですよ。それで相手してあげるわ」

「は？何言っただあんだ。俺が最も得意なのは違っぞ」

「高橋教諭、俺は家庭科を選択する」

家庭科はテストはあるものの、総合には考慮されないので戦争に使

われない科目の一つなのだ。

「家庭科ですか、木下さんよろしいですか？」

「大丈夫です」

普段はこのような総合に関係のない科目は使うことができないのだが、高橋教諭が許可することで使用することができるのだ。

「直人の奴は大丈夫なのかのう？」

「わからん、直人は坂田の奴に当てる予定だったからな。どれくらいの点なのかわからん」

「心配ないよ雄二、直人が家庭科を使うんなら」

「ほう、そうなのか」

「うん、直人くんの家庭科は、土屋君の保健体育みたいなものだから」

「それなら、なおさら坂田の奴にぶつけたかったぜ」

「しょうがないよ。直人は他人の夢をバカにする人は許さないから」

「うん、正直私だって怒りたかったもん！木下くんの夢をバカにするなんて許せないよ！！」

「みんな、すまぬ……」

「それでは第一回戦開始です！」

高橋教諭の言葉と同時に家庭科の召喚フィールドが張られた。

「戦争に関係ないからといって私がその科目を真面目にやっつてない
とでも思ったの？それだったらあてが外れたわね、サモン！」

Aクラス木下優子 家庭科379点

『な、なんだあの点数は』

『受験にもまつたく関係ない科目なのにあそこまで高いのか』

『本当に勝てるのか……』

クラスの皆から弱音が聞こえてくる。

「あてが外れたみたいね。あなたのせいでクラスの士気まで下げる
結果になったわね」

「いやいや、うちのクラスはこれくらいで弱音を吐く奴らなんてい
ませんよ。それより、あんたが負けたときはきっちり秀吉に謝って
貰うからな」

「いいわよ、いくらでも謝ってやるわよ」

『霧乃くん、早く召喚してください』

しゃべっていたため高橋教諭から注意が入った。

「その言葉、聞いたからな。サモン！」

その言葉とともに、直人の召喚獣がいつものベルトつけ召喚される。

「噂には聞いてたけど、なんて恥ずかしい召喚獣なのかしらね。あなた自身がFクラスの汚点なんじゃない」

酷い言われようだ。他のAクラスの人も笑ってるよ。

「全員同じことを言うな。笑いたきゃ勝手に笑えばいいさ。」

そう言った後、直人の点数が表示される。

Fクラス霧乃直人 家庭科663点

「……なんだと……!……!」

「……ヒヤッハー……!見たかAクラスども!これが蒼赤の悪魔の力だ……!」

表示された直人の点数にAクラスからは驚きの声が、Fクラスからは歓喜の叫びが発せられた。

「あ、あんなんなのよその点数は!さてはカンニングしたのね!」

木下さんからカンニングしたというイチャモンがつけられる。確かにこの点数だと言いたくもなるよね。

「んなことする分けねえだろ。確かにテストでとったのは563点

だが、家庭科には実習点があるだろ」

直人の言うとおり、家庭科はテストのほかに実習点が最高で100点プラスされるのだ。ちなみに最後の実習は調理。

「確かにあるけど……最後の実習は調理のはずよ。あんたが満点とれるはずないじゃない!」

この学園の実習点のつけ方は非常に厳しい。普通に料理ができる人で40〜50点。みらいでも70点がやっとだった。しかしそこは家事スキルEXの直人

「残念ながら満点なんだな。この点が結果だろ」

「納得いかないわ!私だって30点しか取れなかったのに」

さり気に自分の点数を暴露してるよ。さっそくメッキが剥がれ始めたね。

「そんなに納得いかないのならこれを食べてみなさい!」

そんな言葉とともに、李紗さんがAクラスに入ってきた。つうか今授業中じゃないの?

『遠野さん!あなたは今授業中のはずでしょう!何故ここにいるのですか!』

高橋教諭から注意が飛ぶ。

「先生いいからこれを食べてみてください!」

『し、しかし』

「食べてください!!」

『は、はい』

凄まじい剣幕の李紗さんに高橋教諭が、敬語になってしまふ。そして李紗さんが持ってきた直人の弁当を食べる。

『……お、おいしい!』

高橋教諭が珍しく高い声をあげる。まあ、直人の料理を初めて食べた人は大抵そうなるね。

「……何故きた李紗、場がすさまじいことになってるだろ」

「直人の料理を侮辱されて黙っているわけにはいきません」

「まあいいか、それより早く始めようぜ木下優子。インチキでないことは分かっただろ」

「くっ、負けるわけにはいかないわ!!」

「さしずめライダーVSメッキ女だな!」

「誰がメッキ女よ!!」

激情に任せ木下さんがランスを構えて直人の召喚獣に突っ込む。

「まずは風で吹き飛ばしてみようか」

「ライダーカードダブルS・J」

その音声とともに直人の召喚獣が右側が緑、左側が黒のスーツに包まれる。その時巻き起こった風により、木下さんの召喚獣が後ろに吹き飛んだ。

「くっ、やああああ!!」

再び木下さんが突っ込む。

「同じ攻撃を仕掛けてくるとは単純だな」

放たれるランスを蹴りで弾きそのまま回し蹴りを召喚獣に当て吹き飛ばす。

木下優子 家庭科344点

「あれ？点が余り減ってない？」

直人がした攻撃により点が大幅に減ったと思われた木下さんだったが、予想に反して減っていないので驚いているようだ。

「言ったろ、メッキをはがすって。まあもうメッキは剥がれてるよ
うなもんだから、メッキの代わりに召喚獣の鎧を壊すことにした」

木下さんの召喚獣を見ると、蹴られた所の鎧にヒビが入っていた。

「なめてくれるわね！その油断が命取りになるわよ」

今度は突っ込まず、蹴りの届かない位置から攻撃していた。

「このっ！このっ！なんであたらないのよ！！」

その攻撃をかわしていく直人、攻撃が当たらない木下さんはイラついていた。

「勘違いしてるな、別に油断してるわけじゃない」

そう言うと直人は新たにカードを入れた。

「ダブルS・M」

直人の召喚獣の左側が銀色になり長い鉄の棒が装備された。

「勝利を確信しているだけだ」

そう言うと、ランスを棒で弾きそのまま鎧に攻撃を叩き込んだ。

木下優子 家庭科321点

点は余り減らない代わりに、鎧の右肩部分が完全に破壊されランスも弾かれた所が少しへこんだ。

「人をおちよくって楽しむなんて最低ね！」

「勝負に勝てないからって口で勝負か？」

「ツツ！！そんなわけないでしょ！！」

弾かれたランスを拾い再び直人に向かって行く。

「そう来なくちゃな」

「ダブルS・T」

今度は左側が水色に変わり銃を装備した。

木下さんの召喚獣に向かって風の弾丸が放たれる。

「くっ…でもこのくらいの威力なら！」

数は多いが威力は少ないと判断した木下さんは、ランスを楯にしなから直人の召喚獣に向かっていく。

「風じゃ力不足か…なら燃やすか！」

「ダブルH・T」

今度は右側が赤に変わる。

「何だかわからないけど、隙ありよ！」

攻撃が一時的に止まったのを見て、一気に距離を詰める木下さん。

「……………くられえ！」

「なっ、きゃあああ！…！」

ランスの攻撃が届く寸前に、銃から風の弾でなく炎の弾が発射され木下さんの召喚獣を後方に吹き飛ばす。予想外の威力にガードができなかったようで、鎧がところどころ壊れた。

木下優子 家庭科223点

風の弾をくらって減っていたこともあり、木下さんの召喚獣の点が250点を切った。

「さて、そろそろランスを破壊するか」

「ダブルH・M」

再び左側が銀色になり銀の棒が装備される。さっきと違うのは棒の先端が、風でなく火をまとって威力が上がっているようだった。

「いくぞ！」

「ツツ！！」

初めて直人から攻撃を仕掛けた。振り下ろされる棒を、とっさにランスで受け止める。しかしランスは“ミシツ”と嫌な音を上げた。

「どんどんいくぞ！」

「負けるもんですか！！」

直人の猛攻を必死にランスで受け止める木下さんの召喚獣。ランスは攻撃を受け止めるたびに、さっきの嫌な音が響く。そしてとうとう……

「おりやあああっ!!」

「きゃあああーっ!」

ふり払われた直人の棒によってランスが砕け散り、召喚獣が後ろに飛ばされた。木下さんに残されたのはボロボロの鎧だけになった。

「さて、残りはその鎧だな」

「まだやるの!!もう倒してよ!」

「嫌だね」

「ダブルL・T」

今度は、右側が黄色、左側が水色になった。それにしても…直人、もう許してあげたら?木下さん涙目だよ。

「そら!」

「へ?どこ撃ってるの?」

召喚獣があらぬ方向に黄色い弾丸を打つたことに、木下さんがわけがわからないという表情をする。

「そんなに甘くないぞ、この攻撃は」

するとあらぬ方向に撃たれた弾丸が一齐に木下さんの召喚獣を襲った。どうやら追尾弾だったようだ。

「なんですって!!」

全ての弾丸が命中し、鎧がすべて破壊される。

木下優子 家庭科122点

「最後は派手に決めるか」

すると直人の召喚獣が一旦もとに戻り腕輪が軌道された。召喚獣の周りにカードが装着された。ホントに派手だよ。

「だいたいあんたは秀吉の夢をを笑ったが、あんたは秀吉の夢のよ
うな立派な夢を持つてるのか!」

「わ、私は」

「ファイナルアタック」

直人がカードを通すと、一枚のカードが木下さんの召喚獣を拘束した。そして空中にカードが展開され、直人の召喚獣がそのカードをくぐりながら、蹴りを放つ。

「夢も持っていない奴が、他人の夢をバカにすんじゃねええ!!」

木下優子 家庭科0点

蹴りが命中すると同時に、木下さんの召喚獣が消し飛んだ。

「周りばかり気にしてないで、もっと幅広く世界を見るこつたな。」

勉強だけが人生じゃねえんだよ」

直人がそう言うと、Fクラスから歓声が沸き起こり第一回戦は終了した。

FクラスVSAクラス 2（前書き）

未「レフェルさん、いつも感想ありがとうございます」

明「一回は直人の勝ちで終わったね」

直「疲れた」

雄「あれだけ圧倒しておいて疲れたのか？」

直「鎧があるところを狙うのは意外と神経使ったぞ」

笹「それより、今日は私の出番だぜ」

李「油断しないことですね」

笹「もちろんさ それでは始まり」

FクラスVSAクラス 2

木下さんとの勝負を終えて、直人がFクラス陣に戻ってきた。

「やったね直人」

「ああ、よくやった。まさかあそこまで点が取れてると思わなかったぞ」

「まあなんだ…賛美ありがとう」

少し照れくさそうに直人が答える。

「直人よ…その、なんじゃ、ありがとうなのじゃ。おぬしがワシのために怒ってくれたときとても嬉しかったのじゃ」

「何言ってるんだ。友達の夢を笑われたんだ怒らない奴がどこにいるさらつと直人が言う。素でそういう事が言える直人ってやっぱり凄いよね。」

「それよりほら、秀吉に言う事がある人が来てるぞ」

そう言うと、直人と入れ替わりで木下さんが秀吉の前に立った。

「秀吉…ごめんなさい。あなたを、あなたの夢を笑ってしまった。深々と頭を下げる木下さん。その目には若干涙が溜まっているように見えた。」

「姉上、ワシも悪かったのじゃ。次があれば気をつけるのじゃ。今回のことは、お互い様と言うことでな、お相子にしようぞ?」

秀吉が笑顔で木下さんに言う。

「ううん、霧乃くんに言われたとおりよ。貴方の夢は立派だわ。何の夢も持っていない私なんかとやかく言う方が間違ってたわ」

「ホントにもういいのじゃ姉上。さっきも言ったとおりワシも悪かったのじゃ。それ以上頭を下げんでくれ」

秀吉がそう言うと、木下さんが下げていた頭を上げた。

「そう言ってくれると助かるわ。ありがとう秀吉」

「うむ、これで一件落着じゃな」

姉妹二人が仲直り。やっぱりこうでなくちゃね。

ちょっとしたアクシデントもあったが、つづけて二回目の勝負が始まる。

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます」

Aクラスからは、銀髪で髪を首筋のあたりでポニーテールにしたきりっとした顔立ちの女子、響聖花さんが出てきた。

「私が行くぜ みんな、おうえんよろしく」

「……オスっ！！姉さん！！応援させていただきやす！！」

「頑張っつてね美沙ちゃん」

「もちろんさ みらリンの応援で勇気百倍だぜ」

我等Fクラスからは、笑顔が眩しいお姉さま、笹倉美沙が出陣した。

「美沙、響は遠野が言っていた奴だ気を抜くなよ」

「わかってるぜ」

「……ホントにわかってるのか」

不安を残しながらも美沙は戦陣に立った。

「笹倉美沙よだ よっろしくー」

美沙が元気よく相手に挨拶する。

「はは、元気がいいねあなたは。私は響聖花、よろしく」

相手の響さんは礼儀正しく挨拶した。美沙とは正反対だね。

「セッチーだね お手柔らかに」

セッチーって、そんなの気に入るわけが……

「セツチー…うん、面白いね。気にいったよ」

うそ！気にいたっの！？

『そろそろ始めたいのですが』

高橋教諭から試合を始めるように言われる。

「おっと失敬タカッチ さっそく始めようぜ」

教師をあだ名で平然と呼べるのは美沙くらいだろうね。

『…貴女には何を言っても無駄のようですね』

「面白いですね貴女は。科目選択権はこちらが使っていていいんですか？」

「オツケー 何でもこいや！」

「それじゃあ高橋先生、英語をお願いします」

「わかりました、承認します！」

高橋教諭により英語のフィールドが張られる。美沙は英語得意なのだろうか？

「イングリッシュ いいね 燃えるね 最高だね」

どうやら得意みたいだね。

「貴女も英語得意なんだ、失敗しちゃったかな？」

「そんな事ないさ めげるな しよげるな カットビングだぜ
意味がわからないよ美沙。」

「そうですね、チャレンジしてみよう」

今の意味がわかったの！

「お、ノリいいね それじゃいくぜ！みんな、応援よろしく」

『おい、準備はいいか！我等FFF団全力で姉さんを応援する』

『はい！会長！』

『急げ！早く並ぶんだ！』

『ムツツリスパイ委員、旗はできたか？』

『……あと三十秒くれ』

『よし！全員、抜かるなよ！』

「」「」「了解！」「」「」

何という団結力！？団結力だけだったら僕らのクラスが一番だね。

「それじゃあ始めようか、サモン！」

「サモンだぜ」

おなじみの魔法陣から召喚獣が現れる。

美沙の召喚獣は、おなじみの双剣と鎧をまとって登場した。

響さんの召喚獣は、情報どうりに召喚獣全体を覆うような巨大な盾を装備している。盾の先端がとがってるけどあれで攻撃するのかな？

そして二人の点数が表示される。

Fクラス笹倉美沙 英語444点

Aクラス響聖花 英語453点

「……………美沙、すさまじく不安なんだが」

444点！凄いんだけど凄くない！点数負けてるし、凄くないだし……

「あらナオツチ、これくらい問題ないぜ！不吉なんてきにしない！私は常に全力全開！最初から最後までクライマックスだぜ」

ポウライダーのような事を言う美沙。……………心配だ。

「よしいくぜ」

美沙が双剣を構えて突撃する。

「『ゴゴゴゴ、ミィーサ！ゴゴゴゴ、ミィーサ！』」

Fクラスの応援が始まる。

「うりゃああ!!」

渾身の力で双剣を振り下ろす美沙。それを盾を前に持ってきて防ごうとする響さん。これなら少しはダメージいくかな？

ガキンツ!!

あ、いやな音……

「あらら……まさかまさかのポツキリだ」

完全に予想外。盾に向かって放たれた双剣は、響さんの召喚獣にダメージを与えるどころか、折れてしまった。

「残念だったね、それ！」

盾を持っていない方の手で、美沙の召喚獣にパンチを入れようとする響さんの召喚獣。

「あぶな!!」

その攻撃を間一髪でかわし距離をとる美沙の召喚獣。

「かわされちゃったか」

「危ない危ない……さすがにその鉄拳は貰えないぜ」

響さんの召喚獣の拳を見ると、鉄製のアームがつけられていた。あれは当てられるときついね。

「でも剣は折れたよ。どうする？」

「まだまださ 奥の手、孫の手まだまだあるぜ」

孫の手はないでしょ。

「それは楽しみだ それじゃ見せてもらおうかな」

響さんの召喚獣が盾を構えて迫る。剣を折られた美沙はどうするのだろ？

「一先ずよけないとね」

迫る攻撃を避けていく美沙。攻撃の仕方が盾での突進と、先についている槍での攻撃、あとはさっきの鉄拳、と攻撃のパターンは少ないみたい。

「よけてるだけじゃ勝てないよ」

確かに避けてるだけじゃいつかやられてしまう。

「ちゅちゅち、甘いよ甘い甘すぎる！コーヒーに砂糖を百個入れるくらい甘いぜ いくぜ勝利のゴットハンド！」

そう言うと美沙は、響さんの鉄拳を掴み召喚獣を背負い投げした。

「うわっ！？」

「どうだ！それだけおっきな盾じゃ着地できないだろ！」

そうか！あの盾じゃ上手く着地なんてできるわけない！

「そうでもないよ」

……できたみたい。空中で一回転して上手く着地された。

「あっちゃー」

「」「」「ドンマイ姉さん！」「」「」

「美沙！出し惜しみすんな。早く腕輪使え腕輪」

直人から指示が飛ぶ。さすがにもうそれしか手段ないね。

「まったく。あの人は何をしているのでしょう」

「いや、李紗はいつまでここにいるんだ？授業中のはずだろ」

そういえばいたね。静かだから気が付かなかったよ。

「気にしないでください」

「いや、気にするだろ」

気を取り直して戦況をしてみる。やはりなんと投げても上手く着地されてしまう。下に叩きつけられればいいんだけど、そこまでの精密操作は無理みたい。

「やっぱ投げだけじゃ無理か」

「そろそろ本気出したら？さっきの人が言ってたみたいに」

「ん〜なんか盛り上がりにかけるんだよね」

「使わないなら使わないで、負けても知らないよっと！」

「うわ!？」

鉄拳をかわしたところに盾で体当たりされダメージを受けてしまった。

笹倉美沙 英語402点

「上手くそらしたね」

「なんのこと」

『みんな、姉さんがピンチだ！もっと盛り上げるぞ!!!』

「「「「おおーっ!!!」」」」

『ファイト!ファイト!姉さん!』

「「「「ファイト!ファイト!姉さん!」」」」

『F・I・G・H・T、ファイト姉さん!!!』

「「「F・I・G・H・T、ファイト姉さん!」「」」

うるさ!というより気持ち悪いよ。

「なんだこの合掌は、吐き気がするぞ」

「初めてゴリラに同意しますね」

「まあ確かに盛り上がってはいるな」

「きたきたきたよ この盛り上がり さあ本気でいくぜ!」

「きなよ、全力で迎え撃つ!」

「皆の声援が力になるぜ!今こそ纏え、フルアーマー!」

腕輪が輝き美沙の召喚獣を包む。そして出てきたときには装備が変化していた。両足と両腕にアーマーが追加され、右手にはランス左手には剣が握られていた。一番の特徴は、左右一体の状態で浮いているクリスタルのようなパーツ。そこから水のヴェールが展開されマントのように召喚獣を包み込んでいる。

「あたし、参上!」

「はは、豪勢な装備になったね」

「うーん、装備が追加されたのはいいけど…使い方がいまいちわからなかったりして……」

それダメじゃない!?

「あいつ何言ってるんだ」

「さあ、理解しかねますね」

「宝の持ち腐れにならないといいが」

「ま、戦いながらつかめばいいよね」

そう言いながらランスを構え相手に突撃する美沙。

ガインツ！

「ととっ！」

盾で防いだ響さんだったが、衝撃が強すぎて後ろに後退した。

響聖花 英語439点

若干点数に補正が生じた。これならいけるかも。

「おお、なかなかの威力だねい」

「確かにね、長引くと厄介そうだし一気にいくよー！」

一気に距離を詰めて、鉄拳を叩きこもつとする響さんの召喚獣。これはかわせるか？

「……………まいったね」

「ははっ、なかなか便利だねい そりゃ!!」

「うわっ!!」

鉄拳を防いだのはさっきの水のヴェールだった。攻撃をそのまま包み込んだって感じだね。

攻撃を止めた隙に美沙の召喚獣がランスで響さんの召喚獣を薙ぎ払う。

響聖花 英語394点

「なかなか分かってきたよ 今度はその盾貫くよ!!」

そう言うとランスの表面に水の螺旋がまかれドリルのようになる。

「いつけーっ!!」

響さんの召喚獣に向かって放たれるランス。

「ぐうっ!!」

盾で受け止めるのではなく、弾くように防いだ召喚獣。しかしあまりの威力に盾のはしが少し砕け、跳ね飛ばされた。

響聖花 英語302点

「おしい、あと少して貫通だったのに」

「危なかった、まともに受けてたら負けてたよ」

あまりの威力にAクラス内から動揺の声が聞こえる。そりゃAクラスが二連敗しそうだもんね。

「次で決めるよ」

「こつちもこれで決める！」

二人の間に緊張の糸が走る。おそらく次で決着がつくだろう。

「まずいな」

「ええ、確かに」

「何が不味いの直人くん？」

「美沙の手が明らかに becoming しているのに対して、響の方は何をしてくるかわからん。点数的には勝ってるが、状況は不利だ」

「油断してなければいいんですが」

確かに何をしてくるかわからないのは不味いね。大丈夫かな美沙。

ダッ！！

二人の召喚獣が一齐に駆け出す。

「うりゃーっ！！」

美沙のランスが放たれる。

「……くらえ!!」

それを間一髪でさけ、盾についている槍で貫こうとする。

「…残念」

その攻撃を水のヴェールが受け止める。

「これで終わりだね」

美沙が勝利を確信する。

「油断すんな美沙!」

「え!?!」

「もう遅いです!!」

すると腕輪が輝き槍の部分が光輝く。

「カルヴァリア、デイスロアー!!」

その言葉とともに槍が弾丸のように放たれ、ヴェールを貫通し美沙の召喚獣を貫いた。やられた!あの盾ただの盾じゃなくて、銃盾にして槍鍵のピルバンカーだったのか。

笹倉美沙 英語0点

『そこまで!勝者Aクラス響聖花』

二回戦はAクラスの勝利に終わった。まだまだこれからさ、僕らは絶対Aクラスに勝つ！！

FクラスVSAクラス 2 (後書き)

響聖花

イメージキャラはメルティブラットのリースバイフェ・ストリンド
ヴァリ。

召喚獣の装備は本文中で説明したとおり。

腕輪使用で当たれば相手を一撃で粉碎するカルヴァリア、ディスロ
アー。使うと200点消費する。

FクラスVSAクラス 3

試合が終わり美沙がFクラス陣に戻ってきた。

「ごめんよみんな、せっかく応援してもらったのに負けちゃったよ」

『大丈夫っす姉さん、いい試合でした』

『応援し応えがある試合でした』

『勝ち負けなんて関係ないすっよ』

「ありがとう、みんな」

満面の笑みで答える美沙。

「……マーベラス……」

Aクラスで海が見られるなんて思ってなかったよ。

「ドンマイ美沙ちゃん、いい試合だったよ」

「ありがとう〜みらリン」

「ちょ、ちょっとなにをするの!?!」

「は〜落ち着くわ〜」

みらいを抱きしめながら、椅子に座る美沙。

「まったくあなたは、油断して」

「たはは、リサちゃんは手厳しいね」

「でも惜しかったわよ、あと一歩だったじゃない」

「はい、すごかったです」

「そう言ってくれるとたすかるよ二人とも」

椅子の周りが花畑になってるね。ムッツリーニが凄い勢いでシャッター切ってるよ。

『それでは三回戦を始めます、両者前に出てきてください』

高橋教諭から三回戦開始の合図がでた。

「ムッツリーニ、お前の出番だ」

雄二がムッツリーニを指名する。

「……………わかった」

「頑張つてこい康太、油断すんなよ」

「……………了解」

直人の忠告を素直に受け取るムッツリーニ。そしてゆっくりと前にでる。相手はもう来ているようだった。

「一年の終わりに転校してきた工藤愛子です。よろしくね」

『教科は何にしますか?』

「……………保健体育」

「土屋君だっけ? 随分と保健体育が得意みたいだね?」

工藤さんはムツツリーニの実力知らないのかな?

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ? ……キミとは違って、実技で、ね」

「……………!(ブシャアアア!!)」

「ムツツリーニイ!!!」

明久がムツツリーニを助けに行く……………一体何をしているんだあいつは、今の言葉のどこに興奮するんだ。

「そのキミ、吉井君だっけ? 勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか? って…キミの場合はそのちっこい子の方が嬉しいのかな?」

Aクラスにも美沙みたいな奴いたんだな。

「何言ってるの? 私運動苦手だよ。アキ君の方がずっと上手だよ」

「あ、そ、そうなんだ」

さすがみらいだな。明久はなんだかがっかりしてるが。

「……………！（ブシャアアアー！！）」

「……………吉井を殺せえーっ！！……………」

なんでそうなるんだよ……………つかムツツリーニ出血大丈夫か？

『姫を汚すなんて万死にあたいする！！』

『会長！ここは紐無しバンジーの刑がいいと思われます！！』

『よし！今すぐ準備にかかれ！』

「……………ラジャーッ！！……………」

オメー等は耳に呪われたイヤホンでもつけてんのか！？どこをどう聞いたら、汚したという結論にたっするんだ？

「アキ！覚悟はできてるんでしょうね！！」

「み、美波！？それはAクラスの備品だよ！今すぐおろすんだ！」

「吉井くん…私は悲しいです」

「姫路さん！？姫路さんは僕に暴力なんか振るわないよね！？」

お前たちは本当に明久が好きなのか？

『会長！用意ができました！』

『よし！ただちに処刑に取り掛かる！！』

「止めるバカども！！」

ピタツツ！！

直人の一括でクラス内が一瞬で静まり返った。

「よし！これからは余計な事喋るなよ！勝負のじやまになる」

さすが直人だ。これなら僕助かるよね？

「それから高橋教諭、この試合こっちの負けでいいです」

「……はあ！！？」

『あ、そうですね。わかりました』

「てめなに勝手なことしてんだ！」

雄二が直人に文句を言う。

「……あれを見る」

直人がさす方向には倒れているムッツリーニがいる。……ピクリと
もしないで。

「ムッツリーニ！大丈夫！」

「わかったか？」

「ああ、明久ムツツリー二回収してこい、それと輸血の準備だ」

雄二の指示がFクラスに飛ぶ。

「それでどうするよ雄二？このままいけば姫路出す前に負けるぞ」

「わかってる、もうこれしか手段はない！明久出る！」

「え！？僕が行くの？」

こんな大事な時に僕がでていいのだろうか？

「もちろんお前だけじゃない、星野お前もだ」

「え…ええーっ！！わ、私も出るの！？」

「そつだ、もうお前らのタッグに賭けるしかない」

「タッグはいいとしてなんで今なの？僕らが出るより姫路さんが出たほうがいいんじゃない？」

確かに、でも雄二の事だ何か考えがあるんだろう。

「確かに姫路を出す事も出来る。だがそれじゃダメなんだ」

「なにがダメなのさ？」

「このまま姫路を出して勝ったとする、それで成績は2対2だ。」

「いいじゃないそれで」

「ダメだ。それだとその後の戦いで、お前らがタッグで出せる確率が減る。お前らがタッグで出ないと勝ち目ゼロだ」

「た、確かにそうだけど。それって僕らが負けたらそこで終わりなんじゃ」

「大丈夫だ。俺はお前たちの事を信じている。必ず勝てるとな」

「雄二、そこまで僕らのことを」

「坂本くん…頑張るから」

「そうか、それじゃ俺はAクラスに交渉しに行ってくる」

そう言うと雄二はAクラス側に向かった。

「アッキーにみらリンさあ、何かおかしいと思わないかい」

「おかしいって何が？」

「明久、多分雄二は、ムッツリーニが勝っていたら二人とも捨て駒にしたと思うぞ」

「え！？」

「さっきの言葉を思い出してみる。雄二の奴は勝ち目がないと言っ

ていた。ムツツリー二が勝てば姫路を入れて3対1、何もしなくても自分まで回るとは確定している。その状況であいつが二人をタッグで出すなんて無駄な労力な事をするはずがない」

「戻ったぞ、タッグで良いそうだし…ってどうした二人とも？なんでそんな目で俺を見る」

「さっきの感動を返せバカ雄二！！」

「見損なつたよ坂本くん！！」

「なんだなんだ！？なぜ二人の俺への評価がダダ下がりなんだ！？」

自分の胸に聞いてみるよゴリラ。

「お前の地位はどうでもいいが、向こうからは一体誰が出てくるんだ？」

「ぐっ、まあいい。一人は佐藤美穂という奴、もう一人は……」

「もう一人は誰さ雄二？」

何をもったいぶってんだこいつは。

「もう一人は坂田銀二だ」

あいつか、予想していたとはいえ厄介だな。

「そしてあいつからの伝言だ。『霧乃、お前と勝負ができなかったんだ、だからこの勝負で勝ったら土下座してもらっからな』だそう

だ

「そうか、明久、みらい頑張ってくれ」

「なんだ、勝手に了承したのに怒らんのか？」

「別に勝てば問題ないんだろ。怒るまでの事じゃない」

「見た雄二！これが信頼つてものだよ！！」

「坂本くんも少しは見習つてよね！」

「一体なんなんだ？それじゃあ行つて来い。負けは許されんぞ」

「わかつてるよ、直人のためにも勝つよ！」

「うん、直人くんのためにも頑張るよ！」

二人がなんか張り切ってるが、別に俺のためじゃなくてもいいぞ。

「それじゃ明久、行く前に一つだけ作戦を教える耳かせ」

「なにになに？」

「……ええ！？そんな事を！？みらいには荷が重くない？」

「仕方ない、みらいに頑張ってもらうしかないんだ、それに明久も削られないようにするんだぞ」

「わかつたよ、みらいにも言つとくよ」

「よし、行っていい」

「おう！」

明久がみらいとともに前に向かって行く。はたしてうまくいくか。

『それでは第四・五回戦開始します。科目を指定してください』

「科目はこっちが選んでもいい？」

「ええ、さっきのお詫びもかねて譲ります」

「それじゃあ高橋先生、日本史をお願いします」

『わかりました。承認します』

日本史のフィールドが展開される。

「」

Fクラス吉井明久&星野未来 日本史168点&201点

Aクラス佐藤美穂&坂田銀二 日本史321点&276点

李紗の情報どうり点数はAクラスの中では低いほうらしいな。

「驚きました、Fクラスの点ではありませんね」

「そうでもないさ、合宿の成果だよ」

「どうでもいい、とっととぶったおして土下座だ」

「貴方の相手は私だよ」

「女か、いいぜかかってきな」

「私は貴方の相手ですね」

「負けないぞ!!」

どうやら明久対佐藤、みらい対坂田になったようだな。

「いくぞ!」

明久が木刀を構えて突っ込む。

「受けて立ちます!」

対する鎖鎌が武器の佐藤の召喚獣は、明久の召喚獣を真向から受け止めるようだ。

「くらえ!!」

明久が木刀を縦に振り下ろす。

「やあ!!」

その攻撃を受ける覚悟で攻撃を仕掛ける佐藤。

「……なんちゃって」

「なっ!?!」

振り下ろしそうとしていた木刀を止め、鎌の攻撃を避け相手を薙ぎ払う明久の召喚獣。観察処分者の操作性のたまものだな。

佐藤美穂 日本史279点

今ので四十点ほど削ったな。このままいけば明久は大丈夫そうだ。みらいの方はどうだ？

「ほら！早くかかってこい！」

「嫌だよ、そっちから来ればいいじゃない」

「…なんか子供を虐めているようでやなんだよ」

「確かに背が低いのは認めるけど子供じゃないからね！」

背が低いのは認めただな。まあそれはそれとして、作戦は上手くいってるな。

「ダッシャーッ!！」

「キャアーッ!！」

佐藤美穂 日本史0点

吉井明久 日本史89点

よし、だいぶ削られたが許容範囲内だ。

「みらいお待たせ」

「アキ君勝ったんだね」

「うん。みらいの方は……って全然減ってないね」

「むこうが何もしてこなかったの」

「それはよかった。これで作戦に支障はないね」

「作戦？何だか知らねえけどそんなの関係ねえ。二人まとめてブツ
タオスだけだ」

「ああ、安心していいよ。二人係じゃないから」

「は？どういうことだ」

「こういうことだよ、頑張ってたねアキ君」

みらいの召喚獣が明久の召喚獣に注射器をさし点数を分け与える。

星野未来 日本史0点

吉井明久 日本史290点

みらいの召喚獣が消滅する。その代りに明久の点数が大幅にアップした。

「ちょ、ええーっ!!それは無しだろ」

「アリだ!いくぞ!!」

「チッ!」

木刀と真剣がぶつかり合う。強化された明久の点数により互角に打ち合う事が出来ているようだ。

「タアーンツ!!」

「オリヤーンツ!!」

明久と坂田のやり取りに全員息をのむ。一進一退の攻防が続く。

吉井明久 日本史165点

坂田銀二 日本史176点

「やあ!!」

「ググツ!?!」

明久の木刀が坂田の左腕を切り落とした。

坂田銀二 日本史101点

「なめんじゃ、ねえー!!」

「うわ!？」

負けじと坂田が明久の木刀を持っていた右腕を切り落として弾き飛ばした。

吉井明久 日本史78点

「これで決まりだな。利き腕をなくしてはさっきまでの攻撃はできないだろ」

利き腕を切り落としたと思いきや勝ちを確信する坂田。

「これで終いだ!」

明久の召喚獣に向かって一気に距離を詰める。

「やられるかああ!!」

「なに!？」

明久が左手で木刀を取り、逆に坂田を弾き飛ばす。残念だったな坂田、明久は……

「実は僕…左利きなんだ」

そう、明久は左利きだ。

坂田銀二 日本史63点

「畜生!騙したな!」

「いや、別にだます気はなかったんだけど」

「うるせーっ!!」

「なんで逆切れ!？」

再び打ち合いが開始される。両方腕が一本になっているので実力は拮抗していた。

吉井明久 日本史13点

坂田銀二 日本史14点

おそらく次で決着が着くだろう。

「イケーッ!!」

「終わりだーっ!!」

坂田の召喚獣が明久の召喚獣を切り裂き、明久の召喚獣が木刀で坂田の首を貫いていた。

吉井明久 日本史0点

坂田銀二 日本史0点

こうして第四・五回戦は引き分けで幕をおろした。これで一様次につながったな。後は姫路と雄二しだいかな。

FクラスVSAクラス 4 (前書き)

霧「とうとう決着みたいだね」

「ここまで長かった」

霧「結果はどうなるんだろ？」

「それはこの先に書いてあるさ」

霧「それもそうだね」

霧&作「VSAクラス戦最終章、どうぞ!」「」

FクラスVS Aクラス 4

「くそ…あと一歩だったのに」

「それはこっちの台詞だっつーの」

試合が終わると同時にその場にへたり込む二人。どうやら気力、体力ともに使い切ったようだ。

「アキ君大丈夫？」

明久にはフィードバックがあるからな、最後の一撃はかなり痛かったはずだ。

「大丈夫、それより坂田君、引き分けだから直人の件は無しで……」

「ああ、なしでいいよ。結果的には負けたようなもんだし」

「ありがとう」

「別にいいさ、もし次やる時があつたら負けねえからな」

「こっちこそ」

何やら話していた二人が戻ってきた。

「アキ！大丈夫なの？」

「大丈夫なんですか吉井くん？」

戻ってくるなり明久に詰め寄る姫路と島田。

「大丈夫だよこれくらい」

「そつだぞ二人とも。こいつはこれくらいでくたばるような奴じゃない」

「お前は少しくらい心配したらどうだ？」

「なに、心配はしないが賛美ならしてやる。よくやったな二人とも、これで勝利に一步近づいた」

素直に褒めればいいのに。

「うっん、私はなんにも。全部アキ君のおかげだよ」

「そつ謙遜するなみらい。お前の能力あつての勝利なんだ」

「そつだぞ。明久なんて星野のサポートがなかったら、ゴミのように一瞬でやられてたんだ」

「ちよつと！功労者にそれはないんじゃないの！？」

まっただな。

「ま、言い方は悪いがそついうことだ。胸を張れみらい」

「う、うん」

『第六回戦を始めます。選手の方は前に出てきてください』

高橋教諭から第六回戦の開始の合図があった。

「さて、この後は任せる。姫路、行ってきてくれ」

「はい！必ず勝って坂本くんにつないで見せます！」

力いっぱい返事をして姫路は前に向かって行った。

「大丈夫かな姫路さん？」

「大丈夫よ、瑞希は強いもの。そう簡単に負けはしないわ」

「おお！ミナミーなんて男らしい台詞」

それ全然褒めてないだろ。

「頑張つて瑞希ちゃん」

「」「」「頑張つてー姫路さん！！」「」「」

みらいの応援に続きクラス内から応援が聞こえる。

「で、雄二正直なところどうなんだ？」

「おそらく相手は学年次席の久保利光だろう。姫路との成績は五分五分だ。正直不得意科目でもつかないと厳しい」

「そうか、まあ大丈夫だろうな」

「根拠はあるのか？」

「ないが、あの自信に満ちた表情を見ればそう思うだろう」

「……そうだな」

珍しく素直だな。…なんか気持ちわる。

「お前今悪口考えなかつたか」

鋭い奴だ。

「…ゴリラが素直なんて気持ち悪いですね」

言っちゃたよ李紗の奴…

その後雄二の怒りの声が聞こえたのは言うまでもなかった。

「Aクラス久保利光だよろしく」

「Fクラス姫路瑞希です。よろしくお願いします」

雄二の予想どおり久保が出てきたか。

『それではフィールドの指定をしてください』

両者が挨拶をしたことにより高橋教諭が教科の指定を求めてきた。

「総合科目でお願いします」

久保が総合科目を指定した。総合科目は順位がそのまま強さになる。

「ちょっと待った！ それは……」

明久から待ったの宣告がでた。心配になるのは解るけどな……

「構いません！」

「姫路さん……」

「信じてやれよ明久、Fクラスの姫路瑞希をよ」

『それではAクラス久保利光VS Fクラス姫路瑞希の試合を開始します！』

その言葉とともに総合科目のフィールドが張られる。

「「サモン！！」」

召喚される二人の召喚獣。そして遅れて点数が表示される。

Fクラス姫路瑞希 総合科目4409点

Aクラス久保利光 総合科目3997点

『ま、マジか！？』

『いつの間にこんな実力を！？』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!』

F・A至る所から驚きの声が上がった。点数差400点オーバーなのだから、無理もないか。

「ぐっ……! 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ?」

「……私、このクラスのみんなが好きなんです。人の為に一生懸命な皆の居る、Fクラスが」

「Fクラスが好き?」

「はい。だから、頑張れるんです」

そして姫路の召喚獣が久保の召喚獣を真っ二つに切り裂く。

『勝者、Fクラス姫路瑞希!』

高橋教諭からFクラスの勝利宣言が発せられる。これで二対二、二引き分け。雄二の勝負までもつれ込んだ。高橋教諭からも若干焦りの感じが見えてきた。Fクラスがここまでやるとは思っていなかったのだろう。

「ありがとうございました」

姫路が礼をした後に、Fクラス陣に戻ってくる。

「御苦労さま、姫路さん」

明久が戻ってきた姫路に賛美の言葉を贈る。

「ありがとうございます吉井くん」

雄二の心配も杞憂だったようだな。

『それでは最後の人、出てきてください』

高橋教諭から最終戦開始の合図が出た。

「……はい」

「俺の出番だな」

最後は当然、互いのクラスの代表同士の戦いになった。

「……雄二、聞きたいことがある」

「何だ？」

「…その顔、大丈夫？」

「は？こんな平気だが…何でお前がそんなこと気にするんだ？」

「夫の体を心配するのは妻の務め」

ん？いまサラット凄い事言わなかったか？

「な、何言っただお前！何時俺がつき合った!？」

「この勝負の後に夫になってもらうつから関係ない」

「一体何段飛び越してるんだお前は！」

なるほど。霧島の噂は、告白を断っていたのは雄二の事を思い続けていたからで、姫路や美沙を見てたのは雄二の周りにいた女子が気になっただけというわけか。

「直人、これはどういう事かな？僕は夢を見ているの？そうだと僕のこと殴り飛ばして」

「落ち着け明久、これは現実だ」

「……霧乃！俺たちを殴れ！！これは夢だ！夢なんだ！！」「……」

……こいつらは

「落ち着きなさいな皆の衆、起こしてほしいならこっちおいで」
「ナミィが激しく起こしてあげるよん」

「ちょ、ちよつと美沙！？何言ってるのよ！」

「……」「お願いしやす！！」「……」

……もつほつと」

「……アキ君は霧島さんが好みなの？」

「え？…別に好みってわけじゃないけど、それがどうかした？」

「ううん、何でもないよ」

こっちは中睦ましいな。

「明久の奴は相変わらず鈍いな」

「あなたも自分の事になると明久のことを言えませんよ」

「なんか言っただか李紗？」

「何でもないですよ」

なんだ？なんで少し不機嫌になってるんだ？

『Fクラス、静かにしてください』

高橋教諭から注意が飛ぶと、Fクラス内が静かになる。

「やれやれ、それより翔子、さっきの言葉は訂正させてもらっただ。俺はお前の夫にはなれない。俺はこの勝負勝つからな」

「……負けない、絶対勝つ」

「言ってる、正々堂々叩き潰してやる」

雄二のモチベーションは高いようだな。

『それでは科目を指定してください』

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は100点満点の上限ありだ！」

雄二の条件にAクラス内がざわめく。まあ、内容が内容だからわからないこともないがな。

『上限ありだつて?』

『しかも小学生レベル。満点確實じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください」

高橋教諭が教室を出て行く。すると、Fクラスの正気を保っている皆が雄二に近づいていく。

「雄二、あとは任せたよ」

「ああ。任された」

「うっかりでミスするなよ」

「言われるまでもねえよ。お前の力には随分助けられた。感謝している」

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございました」

「ああ、明久のことか。気にするな。あとは頑張れよ」

「はいっ!」

「坂本くんは霧島さんの告白断っちゃったの?」

「ぐっ…それを今聞くか」

「あ、ゴメン、気に障ったのなら謝るよ」

「まあ、いいさ。星野の質問に答えるなら断るな」

「なんじゃ、やはり断るのかの」

「ああ、俺にあいつとつき合う資格なんてないからな」

この言い方だと、ほんとに霧島の事好きみたいだな。一体過去に何があつたんだ?

取りあえず雄二に何かしら言った後で高橋教諭が戻ってきた。

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください」

「……はい」

「じゃ、行ってくるか」

「頑張つてね、坂本くん」

「ああ」

雄二を送り出す。これでようやく決着だ。泣いても笑ってもこれで

最後だ。

『皆さんはここでモニターを見ていて下さい』

高橋教諭が機械を操作し、壁のディスプレイに視聴覚室の様子が映し出される。

『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です』

画面の向こうでは、日本史担当の先生が二人の机に問題用紙を裏返しで置いていく。

『不正行為等は即失格になります。いいですね？』

『……はい』

『わかっているぞ』

『では、始めてください』

二人が問題用紙を表にする。とうとう試験開始だ。

「吉井君、いよいよですね……！」

「そっだね。いよいよだね」

「これで、あの問題がなかったら坂本は……」

「集中力や注意力に劣る以上、合宿で強化したとはいえ延長戦で負けるだろうな。でも」

「うん。もし出ていたら」

「システムデスクだゼイ」

Fクラスの面々は、ディスプレイに映し出される問題を凝視し始める。

<次の（ ）に正しい年号を記入しなさい>

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

（ ）年 鎌倉幕府設立

（ ）年 大化の改新

「あ……！」

出てたな。

「あつた……あつたぞ！」

「じゃあ、ウチ等の卓袱台が……」

「落ち着け、最後の最後まで気を緩めるな」

「そうだね、うっかりで負けちゃったから」

「後は雄二しだいじゃの」

「絶対に勝てよ雄二」

「」「」「勝てよ坂本！」「」「」

Fクラスのメンバーから最後の声援が飛ぶ。

そして時間が立ちテストが終了して採点が始まる。

<日本史勝負 限定テスト 100点満点>

『Aクラス 霧島翔子 97点』

VS

『Fクラス 坂本雄二 ……』

霧島は雄二のいつていたとつり間違えたようだ。そして雄二の点数は……

『坂本雄二 100点』

雄二の三桁の点数がディスプレイに表示される。

ディスプレイの奥ではガッツポーズをしている雄二。そしてAクラス内からはクラスメイトの歓喜の声が響いていた。

FクラスVS Aクラス、この勝負…俺たちの勝ちだ！！

こうしてFクラス対Aクラスの戦争は、Fクラスの勝利により決着が着いた。

FクラスVS Aクラス 4 (後書き)

やっちゃたなー、Aクラスに勝っちゃたよ。

これからどうしようか？原作と違う展開になるのか、それとも原作どおりになるのか、神のみぞ知るですかね(笑)？

これからも頑張っていくのでどうかよろしくお願いします。

戦争の置き土産（前書き）

明「勝ったー！やったよ僕たち」

未「そうだねアキ君」

直「まだやり残したこともあるがな」

明「え？それって一体」

笹「それは内緒だぜ」

直「美沙の行動に雄二は要注意だな」

皆「それではどうぞ」

戦争の置き土産

『この戦争、三対二対二引き分けてFクラスの勝利です』

「」「」「うおおおーっ！」「」「」

高橋教諭の勝利宣言とほぼ同時にFクラスの歓喜の声に教室は包まれた。

「勝った！僕ら勝ったよ！」

「はい！勝ちましたよ！吉井くん」

「やったわ！」

「これでFクラスの教室ともおさらばじゃの」

「……………（コクコク！）」

クラスの至るところから歓喜の声が聞こえる中……………

「……………」

「どうしたみらい？向こうにまざらなくていいのか？」

みらいは何故かみんなの中にまじれないでいた。

「なんだか入っていけなくて……………」

「姫路のように明久に抱き着いてみたらどうなんだ？」

「む、無理だよ…私なんて……」

「ならせめてまざって来いって、美沙、みらいのことよろしく」

「はいさ イックゼーみらリン」

「わわ／＼／ちょ、美沙ちゃん引っ張らないで!？」

美沙がみらいの腕をとって、明久達の中に突撃していった。まあ、みらいはこれでいいだろう。

「直人はまざらないのですか？」

「ああ、俺はやることがあるしな。李紗は今のうちに教室戻っとけ」

「そうですね。そうさせてもらいます。今日は祝勝会ですね、期待してますよ」

「なんで李紗が期待すんだよ…まあ、楽しみにはしといていいか」

「それではまた」

「ああ」

李紗と別れると直人は沈んでいるAクラスサイドに向かった。Fクラスに負けてしまったのだから、しょうがないと言えばしょうがないだろう。

『まさか代表が負けるなんて』

『これからあの最低クラスで過ごさないとイケないの』

『何でこんなことに……』

かなり沈んでいるな。ま、無理もないか。

「やあやあAクラスの皆さん、沈んでるところ悪いですね」

「何だい君は、僕らを笑いにきたのかい？」

久保がぶつきらぼうに言葉を返してくる。

「まさかとんでもない。健闘したAクラスの皆さんを笑うなんてとんでもない」

「では何のようなんだ？」

久保の表情が少しだけ緩む。

「なに、これから大変な日々が待っているAクラスの皆様に慰めの言葉でもと」

「大変な日々とはどういうことだい？確かに設備は落ちるがそれだけの事だろう」

「そうですね、それじゃここで少したとえ話をしよう」

『あるところに町で一番強い喧嘩屋がいた。そしてある日その喧嘩』

屋が喧嘩で負けてしまった』

「これからその喧嘩屋がどうなると思うっ？」

「……さあね、どうなるんだい？」

「簡単だ、今までさんざん調子にのってたんだ。他の奴らから当然弱ってる今がチャンスだと、袋叩きにあう。これが今のAクラスの状態だ」

「それはあなたの例えの話だろ。僕らとは何の関係もない」

久保が何をバカなと反論する。

「確かに久保はそうかもしれない。だが他の奴らはどうだ？成績がいいからと、下位クラスをバカにした事はないか？あんたらは学年の底辺に“負けたんだ”気の荒い奴はきつと抱腹に来るぞ」

直人が負けたという部分を強調して言う。直人の言葉を聞いてAクラスの何名かの顔が青ざめる。

「さらに言うとな、Aクラスの設備が羨ましくて逆恨みしてる奴もいるかもしれん。そいつらに常識は通用しない。本能に任せてクラスの設備を破壊してくるかもしれん」

「そんな事したら停学は免れないよ」

「甘いな、これからFクラスの設備に落ちるんだぞ。Fの設備なら自然に壊れたといわれても仕方ない」

とうとう久保も押し黙る。

「……それを僕らに言っただろうつもりなんだい？」

やっとの思いで久保が口を開ける。

「別にどうするつもりもないさ。言っただろ、哀れなAクラスを慰めに来たって」

Aクラス内のほとんどが直人を、どこが慰めだという表情で睨みつけてくる。

「まあこちらが勝てたのも、こっちがそちらの代表の弱点を知っていたから勝てたようなもんだしな」

Aクラスのほとんどが以外な反応をした。霧島にだって万能じゃないんだぞ。

「これもいい経験になっただろ。人生なんて所詮挫折の繰り返しだ、なら今のうちに挫折しといたほうがいいだろ」

そう言い放つと直人はAクラス陣から離れてFクラスの陣地に戻った。Aクラスの敵意は完全に直人に向いていた。

「あ、直人。Aクラスの所で何やってたの？なんかAクラスの人めっちゃこっち見てるんだけど……」

「何でもないさ、気にすんな」

「そう？」

ガラッ

明久が話しかけてきてすぐ雄二と霧島さんが戻ってきた。

「お疲れ雄二」

「はっ、これくらいなんでもねえよ」

「賛美くらい素直に受け取れって」

「俺にはまだやることが……って以外だな」

「何が以外なの坂本くん？」

「翔子の事だ。戦争に負けたんだから少なからず、なんか言われるかと思っただが、何も言われてないみたいだな」

「いいんじゃないか、言われてないなら、言われてないで」

「まあそうなんだが……直人なんかしたか？」

「別に、これといったことはしてないぞ」

雄二と話していると美沙がにやつきながら寄ってきた。

「何々雄くん　なんだかんだ言っつてやつぱり翔ちゃんの事が気になるだない」

「ば、そ、そんなんじゃねえよ」

そんな同様ながら言っても説得力ないぞ。

ガラッ

Aクラスのメンバーが、教室を出ていってしばらくすると教室の扉がいきなり開いて、筋骨隆々の肉体を持った男が入ってきた。

「何の用だ鉄人？」

「鉄人じゃない、西村先生と呼べ。なに、我がクラスに挨拶しようと思っただけだ」

「は？今なんて、我がクラス？」

「どういう事ですか西村先生？」

「なんであんたがうちのクラスの担任になるんだ？俺達は戦争に勝ったんだぞ」

「そうだ、そうだとクラスメイトの皆も言う。」

「確かにお前たちは勝った。これは文月学園創立以来初めての出来事だ。そこは誉めよう」

「それなら……」

「しかしだ、いくら世の中勉強だけではないと言っても、多少は勉強も必要だ。そこで補習担当のこの俺が担当になったというわけだ」

なんてこった…これじゃ毎日が鬼の補習になるようなものじゃないか。

「手始めにこのクラスを維持するためにも、これから毎日通常授業の他に毎日2時間の補習をしてやる」

「……なに?!?!?」「……」

みんなが驚きの声をあげる。せつかく勝ったのにこの仕打ち、なんでこつなるんだろっ?

「特に吉井と坂本と霧乃は念入りに監視してやる。何せ開校以来初の“観察処分者”と“A級戦犯”ならびにSSS級戦犯だからな」

「そうはいきませんよ! 何としても監視の目を掻い潜って、今まで通り楽しい学園生活を過ごして見せます!」

「へっ、当然だ」

「そのとおりだ。少なくとも俺はSSS級じゃない、せめてS級のはずだ!」

「俺の聞いている噂からは、SSS級でも低いくらいだと思っがな」

「噂に流されるところくなことになりませんよ鉄じ……鉄村先生」

「ともかく僕らは快適な生活を送ってやる!!」

「……お前らには、悔い改めるといふ発想はないのか?それと霧乃は名前とあわせて斬新なあだ名を作るんじゃない!」

彼らにはまったく反省した様子が見えなかった。

「とにかくだ、今日はサービスとして明日から授業とは別に補習の時間を2時間設ける。反論は認めん」

「は、まあ明日からなだけましなのか」

「うう…これから憂鬱だ」

「お前たち少しはやる気を出したらどうだ？」

「」「無理だ！」「」

「自信を持っていうんじゃない！」

その後鉄人は教室から出て行き、クラスメイトたちも帰宅し、教室内はいつものメンバーだけになっていた。

「何でこうなるんだろ？」

「知らねえよ、せつかく勝ったてのに」

「……あれはホントに勝ったと言えるのかな？」

「どついう事ですか？」

「考えても見ろよ。いくら雄二が昔間違った事をしえたからって、普通はテストの時とかいくらなんでも見直しくらいするだろ」

「言われてみるとそうね」

「まあいんじゃない勝ったんなら」

まあそうなんだが……

ガラッ

すると教室の扉が開いて一人の女子生徒が入ってきた。

「……雄二……」

「翔子か…なんのようだ？夫とかの話ならなしだぞ」

「…私は雄二の事が好き。いつか絶対振り向いてもらう」

なんて一途な子なんだろう。何で雄二は断るのかね、神経が理解できないよ。

「いいねい翔子リン その一途な思い気に入ったぜ　そこでユーに
チャンスタイム」

「……チャンス？」

「これからプチ戦争、雄くと翔子リン、愛のテストバトルを始めるぜイ」

「なんだと!？」

雄二がとても驚いている。僕もそうだ、美沙は何を考えているんだ

ろっ。

「これから雄くと翔子リンにはさっきのテストの延長戦をしてもらうぜい」

「……それで？」

「もし翔子リンが勝ったら、晴れて雄くとお付き合い 雄くんが勝ったらお付き合いを少しの間延長だぜ いい提案でしょ」

「なんでだ！俺のどこにメリットがあるというんだ！！」

凄まじい剣幕で美沙に突っかかる雄二。

「いいじゃねえか雄二」

「人ごとだと思って適当なこと言ってんじゃね！」

「別に雄二だって霧島の事が好きなんだろ。つき合っ口実ができてよかったじゃねえか」

「…雄二……それ本当？」

霧島さんが目を星のようにキラメカシテ雄二に迫る。……なんて羨ましいんだ。

「しるかよ！いいぜやってやる！俺が勝てばすべて終わりだ！！ホントの最終決戦の始まりだ！」

二十分後……

「……雄二…これから映画に行く」

「嫌だ！俺は負けてねえ！」

「おつじょうぎわの悪い奴だなお前。圧倒的に負けてるだろうが」

美沙が短時間で作った問題の結果は、雄二が53点霧島さんが10点、言い訳のしようもない。

「雄二…早く行く」

「いでででで！！腕の関節をきめるな！」

「霧島、ちよつといいか」

「……なに？」

「おお直人、助けてくれるのか！」

「この間当たった映画の券があつたんだ、明日までだから使うとい
い」

わざわざいいムードを作ってあげるなんて直人は優しいね。

「……ありがとう。霧乃はいい人…」

「てめえ！いつか絶対復讐してやるうううーっ！！」

そんな事を言いながら雄二は霧島さんに連行されていった。

「さて、映画のチケットはあと四枚、欲しい奴いるか？」

「「くださいくちようだい>!!」「」

姫路さんと、美波が貰いにいく。よっぽど見たかったんだね。

「あと二枚だな、それじゃあみらいと明久にやるよ」

「え、いいの直人くん」

「ああ、俺は別にみる気なかったからな、四人で行って来い」

「でも僕が貰っちゃっていいの？女の子たちで行った方が……」

「アッキー、自分の幸せを理解できないのは不幸になるぜい」

「え、何のこと……」

「ほらアキ早く帰るわよ！」

「いたた！美波、関節決まってるって！」

「美波ちゃん！アキ君痛がってるよ！」

「まっってください皆さん」

「俺たちも行くか」

「そっじゃの」

「あたしとムーくんはまだ残るぜい」

「……………（コクリ）」

珍しいな、この二人に接点があつたか？

その後秀吉と別れ直人は一人校舎の屋上に立っていた。下からは下校中の生徒の騒がしい声が聞こえてくる。

するとふいに屋上の扉が開く。

「おや、先客がいたんだ」

「あんたは… Aクラスの響だったか」

「そうだよ、霧乃くん」

「なんだ？」

Aクラスにあれだけ言ったんだ、文句でもいわれるのかな。

「霧乃くんはさ、よくここに来てるの？」

「ん？まあ来てるかな。どうしてだ？」

「放課後ここって人あまり来ないからさ」

「……………そんな事聞きたかったのか？」

「そうだけど？他に聞くことなんてある？」

「俺としてはAクラスにあれだけ言ったんだから、文句でも言われるのかと思っただよ」

「はは、そんな事言わないよ。だってあれって代表を気遣ってくれたんでしょ。わざわざ自分が嫌われてまで。」

「そんなんじゃないよ、俺は俺が思った事を言ったただけだよ」

「大変そうな性格だね」

「俺から見たらあんたの方がよっぽど大変そうだよ」

響何の事と首をかしげる。

「あんたは、木下と別のタイプだな。他の奴らがあんたに理想を押し付けられてるって感じか？」

「あ、わかる？なんでか皆私の性格誤解しちゃうんだよね」

「俺の見た感じ美沙と同じタイプで、その日が面白ければいいってゆう性格とみた」

「はは、当たってるよそれ。私は普通にしてるんだけど何でか皆勘違いするんだよね」

響が言うに、自分は何も考えてなく自堕落でずぼらな性格をしているそう。それが周りから達観しているように見えているんだろう。

「私は騙す気はないんだけどね」

「人を見極めるのは難しいからな。いずれ分かるんじゃないか？」

「それもそうだね。久しぶりに素で話せて楽しかったよ。お礼にバイオリン聞かせようか？」

そう言うと響は持っていたバイオリンを構えてみせた。

「今日は遠慮しとくよ。予定もあるし、またこんど聞かせてくれよ」

「残念、それじゃまたね直人くん」

「……ああ、またな聖花」

そして直人は屋上から離れた。ここに奇妙な友情が生まれたのだ。た。

こうしてFクラスの試験召喚戦争は、色々な物を、失ったり、得たりして一時幕をおろした。

明久と直人の女の子達とのデート＋ 雄二（前書き）

笹「GAU様感想ありがとう 嬉しい 楽しい 励みになるぜ」

直「小説の恥をさらすなバカ！」

笹「リクエストには、答えるぜ 恥を、かくのは、作者だけ」

「どおいういみ!?!」

笹「それじゃあ始まり レッツゴー」

直「今回お前は出ないがな」

笹「何だとう!?!それは、悲しい、情報さ」

直「最後まで意味がわからん」

笹「美沙ラップは永遠だよ 絶対 止めない これだけは」

直「しるか!」

「今度こそ始まりです」

明久と直人の女の子達とのデート + で雄二

映画館。そこは数々のドラマが存在する場所。

「なあ李紗、なんで俺はこんな所に来てるんだ？」

「愚問ですよ、私が誘ったからに決まってるじゃないですか」

「李紗はチケット友達と行くって言うてたたる」

相変わらず自分の事には鈍い人ですね。まあ、直人らしいと言えば直人らしいですか。

「いいから入りますよ」

「引っ張るなって」

少しは進展したいものですね。

映画館内

「チケット代はともかく、コーラルサイズ300円、ポップコーンMサイズ400円……映画館、何と恐ろしい場所!？」

明久がみらいと姫路と島田とで映画館に来ていた。まあ、俺がチケットやったんだから当然か。

「あれ、直人くん李紗ちゃんも来てたんだ」

みらいがこちらに気付いたらしく「つちに寄ってきた。」

「おはようみらい」

「おっす」

「直人も来るなんてね」

「李紗に連れてこられてな」

「おはようございます」

「おっはー」

なんか外にいるって気がしないな。

「それで明久、さっきはなんで騒いでいたんだ？」

「聞いてよ直人、ここの映画館ボツタくりだよ。ポップコーンとコーラがあんな値段なんだよ！」

「明久…ここは世間一般的な値段だと思うぞ。それにこれくらいで嘆くな、あつちを見てみる」

直人が指す方を見ると、一組のカップル？らしき人達がいた。

「……雄二…何が見たい？」

「……早く自由になりたい」

そこには私服姿でいつにもまして綺麗な霧島さんと、私服姿に首輪をつけていつにもましてゴリラっぽい雄二がいた。さっきのカップル訂正。ペットと飼い主だね。

「明久、今とてつもなく殴りたくなっただが、殴っていいか？」

「ダメにきまつてるじゃないか」

なんて鋭いやつなんだ。

「霧島さんたちも来てたんですね」

「…うん……霧乃昨日の映画面白かった、ありがとう」

あのとやっぱり行ったんだ霧島さんたち。

「そうなのか、俺たちもこれから見るんだ」

「期待が膨らみますね」

「てめえこのクソ悪魔！昨日はよくもやってくれたな！」

あゝあ李紗さんがいるのにそんな事言ったら……

「ふふ、だめじゃないですか霧島さん、ちゃんと仕付けしないと」

その笑顔がすさまじく怖いです。

「……ごめん……ちゃんと仕付けする、雄二ちゃんと謝って」

「なんで俺が……すみません」

「いいいいいい」

スタンガンをちらつかせる霧島さん、はたして雄二を謝らせたのはそれだけなのだろうか？とところで霧島さんはどこでスタンガンを購入したんだろ？

「……それで雄二、今日は何の映画見たい？」

「俺の願いは……叶えられるのか？」

「じゃあこれ」

雄二の言葉を聞いているのかいないのか、映画の紹介表示を指差した。

「おい待て！ それ3時間24分もあるぞ！？」

「2回見る」

「1日の授業より長いじゃねえか！！」

「授業の間、雄二に会えない分の、う・め・あ・わ・せ」

「昨日つき合ってやっただろ！」

「昨日は昨日、今日は今日」

「やっぱ帰る！！」

雄二は翔子の手に持たれた鎖をひったくった後、そそくさと出口へと向かうが、先ほどちらつかせた危険物を取り出す。

「…今日は、返さない……」

「おい！ま、今日ものまちが……グガギベガアア！！」

映画館に悲鳴が響き渡った。

「……ある意味すごいな？」

「自業自得のような気もするけどね」

「……学生二枚、二回分」

「学生一枚とまた気絶した学生一枚無駄に二回分ですね」

この状況を見て平然と笑顔を浮かべてられるなんて、さすがはプロ。

「はっきり気持ちを伝えられる人ってうらやましいです……」

「あこがれるよねえ……」

「二人とも本気！？」

「明久も大変だな」

「そう思うのなら、二人を踏みとどまらせて」

「いざとなつたらな」

雄二達を見送つた後に、6人で映画を見る事に。明久が用意したポップコーンとコーラを手に、姫路と島田は今か今かと楽しみにしていた。

ちなみに席は、明久を挟んで左に瑞希が、右に美波、その脇にみらい、直人、李紗という陣形だ。

「どんなのが楽しみだね、姫路さん、美波」

「そうですね……霧乃くんに感謝しないと」

「そうよね……折角のチャンスだもん」

「みらいはこの席順でいいのか？」

「うん、大丈夫だよ」

無理してる感バリバリだな。

「無理はよくありませんよみらい」

「……大丈夫だよ」

「たまにはだいたんになつた方がいいぞみらい」

そこで映画始まってしまいみらいとの話は終わってしまった。

映画終了

「霧島さんの言ってたとおり面白かったね」

「うん、面白かったよ」

「感動しました」

「デートにはもってこいの映画だったわね」

四人とも満足したようだ。

「どうだった李紗？」

「たまに見る映画もいいものですね」

李紗も満足してくれたようで何よりだ。

その後六人は二グループに分かれて映画館を後にした。映画館を出る途中聞こえてきた悲鳴は聞きなれた声みただったけど、気のせいだよ。

Side 直人 & 李紗

「で、これからどうするよ李紗？久々に一緒に外に出たことだしどこか回るか？」

「そうですね、そうしましょうか」

「じゃあ行くか……っとその前に腹しらえしとくか」

腹が減っては戦はできぬっていうしな。

「そついえばもうお昼でしたね。どこの店にしますか？」

「そついや最近できた喫茶店があったはずだ。そこに行ってみようぜ」

「そうですね、ではそこにしましょうか」

二人は腹ごしらえのため喫茶店に向かう事にした。

喫茶店シャドウ

「ここですか？」

「ああ、入ろうぜ」

「そうですね」

二人はシャドウに入った。できたばかりなので人は余りいないようだった。

「い、いらしゃいませ〜」

まだ接客になれていないような声が、店の奥の方から聞こえてきた。

「お客の前に顔も見せないとは……」

「まだ従業員も少ないんだろう、適当に座ろうぜ」

「はい」

暫くして

「……………注文取りに来ませんね？」

「おかしいな、ちょっと見てくるわ」

「すみませ〜ん、注文したいんですけど」

すると店の奥から一人の少女が現れた。

「お、お待たせいたしましたお客さ…ま」

出てきたのは見たことのある少女だった。

「……………湊か？何してるんだこんなところで？そんな格好で？」

Bクラス戦振りに会った昔馴染みは、メイド服姿という、ムツツリ
「二がいたら泣いて喜びそうな服を着ていた。

いや、泣く前に鼻血出して倒れるか。

「……………み」

「み？」

何だか嫌な予感がするんだが？

「……わつちを見るなああ！！！」

「あぶねえ！！！」

ちよ、止める！クナイを投げるな！

「お、落ち着け！冷静になれ！」

「どうしました直人！」

「見たらわかるだろ！とりあえず取り押さえるぞ」

「よくわかりませんが、了解です」

それから五分後……

「いや、湊が粗相を起こしてしまい申し訳ない」

「もういいですよ墮地^{おち}さん」

「ところでどうしたんですか？山に小屋を作って過ごしていたはずでは？」

「いや、実は山が二年ほど前に買い取られてしまっただよ。開発されてしまって家が壊されてしまったんだよ」

なるほど、だから湊が文月学園に来ていたのか。

「災難でしたね」

「まったくだよ。まあ、家を壊した連中と山を買い取った奴には抱腹として同じ思いを与えてやったがな、はっはっは」

訂正だ、災難はこの人が住んでいた山を買い取った業者のほうだ。

「ところで直人、この方達は誰なんですか？」

「ん〜ま、現代に生き残った忍者ってところかな」

「よろしく、その子は霧乃くんの彼女かい？」

「なっ!?!」

「違いますよ、幼馴染ですって」

「そうなのか? てっきり付き合っているものかと」

そんなに付き合ってるように見えるのかな?

「ところで何で喫茶店なんてやってるんですか？」

「ここでは何かと金がかかるからね。今は喫茶店が人気だと聞いたんでね。今までは抱腹の時せしめた金が合ったんだが、それも底を付きそうなので始めることにしたんだ」

今じゃっかん危険な表現があったような。

「せっかくなけなしの金で服も用意したのに、湊は気にいってくれなかったようだ」

いろいろと選択を間違えてますよ。

「ともかくその服は封印するとして、他の従業員はいないんですか？」

「今は湊しかいないな。今日開店だし」

「よくそれで開店できましたね」

「わっちもまだ早いと言ったんじゃない」

二人は何時の間に仲良くなったんだ？

「ところで一番の問題が」

「何かね？」

「誰か料理できるんですか？」

「……………何この間は

「一様わっちは少しは練習した」

「よく開けたな、最初の客が俺たちなのが不幸中の幸いか」

「いや〜面目ない」

カラッ

『ここかな新しくできた喫茶店て？』

『たぶんそうじゃない？』

すると二人の若い女性が店に入ってきた。

「どうするんです？お客さん来ちゃいましたよ」

「取りあえず湊は注文とってこい」

「わ、わかった」

ぎこちない動きで湊が注文を取りにいった。

「ところでこのメニューはどうなっているんです？」

「一様は他の喫茶店のメニューを真似てみたが」

なら何で服が真似なかったんだ……

「とってきたぞ、片方はアイスコーヒーとタマゴサンドで、もう片方はミルクティーにホットケーキだそうだ」

「それなら何とか作れそうだな、材料はあるんですよね墮地さん」

「ここにあるぞ」

よかった…さすがに材料は合ったんだ。

「取りあえず二人は他の客が来たら接客してくれ、墮地さんはレジでも」

「わかりました」

「すまんの」

「じゃあボチボチ始めるか」

「」「貴方のためにやってるんですくじゃ>!!」「」

こうして何故かデートから三百六十度反転して喫茶店のバイトが始まってしまった。

「すまんの、デート中であつたのだろ」

「しかたありません。そこが直人のいいところですから」

「そこは昔あつた時と変わっておらんの」

「ところで、直人と会つた時の話をこんどぜひ」

「う、うむ」

暫く時間が立つとシャドウには客が詰め寄せているのであつた。

明久と直人の女の子達とのデート＋ 雄二 2 (前書き)

笹「ふふふ、今度こそ私の出番だぜ」

霧「楽しそうですね」

笹「おや、次元を飛び越えこんにちは」

霧「こんにちは」

笹「ノリが悪いぜ もっと テンション 上げていこう」

霧「それでは開始です」

笹「またも無視！？本編では活躍してみせるぜい」

明久と直人の女の子達とのデート＋ で雄二 2

直人たちが昼食に向かおうとしている頃、明久たちはショッピングに行こうとしていた。

「やっと着いた」

「少し時間掛かっちゃたね」

「早く入りましょ」

「そうですね」

四人は店の中に入っていった。

「これなんか可愛いですね」

「こっちもなかなかよ」

「これもいいよ」

四人は女物の洋服売り場に来ていた。

「……………」

まいったなあ、目のやり場に困るよ。下着とかがないのが幸いだけ
ど。

「吉井くん、この洋服ピンクか青か選んでくれませんか？」

「え、僕？でもあまりセンスないよ」

「大丈夫です……吉井くんが気に入ったのなら何でも……」

「え？何か言った？」

「何でもないですよ、それでどっちがいいですか？」

そこまで言われたら選ばないとね。

「ん〜…ピンクの方かな、そっちの方が姫路さんらしいかな」

「そうですね、それじゃこれにしますね」

そんなに即決しちゃっていいのかな？

「アキ君、これはどうかな？」

「アキ、私のも見てよ」

なんでそんなに僕に聞きたがるんだろう？

その後明久は、暫く女子の服選びをさせられた。

「ふー疲れた」

女子達が会計に行っているため現在明久は一人でした。

「……なんか肩が軽くなったような」

女子達がいなくなったため、周りからの視線がなくなったためである。

「お、明久ではないか。こんな所で何しとるんじゃない？」

「秀吉！？どうしてここに？」

すると一見女の子と見間違えてしまいそんな男の娘、木下秀吉が立っていた。

「ワシは姉上の買い物を手伝わされての」

「そうなんだ、姉妹仲良く買い物なんて仲睦まじいね」

「明久、決して姉妹ではないからの！」

「そうだよ、秀吉は秀吉だもんね」

「なにやら納得いかんが……明久は何故いるんじゃない？」

「僕も似たようなもんだよ。みらい達と買い物に来てるんだ」

「そうなのかの。それでは邪魔しては悪いのでワシは行くぞい」

？別にいても邪魔になんてならないけど。そう言つと秀吉はどこかに行ってしまった。

「どうかしたのアキ君？」

秀吉が見えなくなると同時に、みらい達が戻ってきた。

「何でもないよ」

別に秀吉に会ったことは言わなくてもいいだろう。

「時間も時間ですしそろそろお昼にしませんか？」

姫路さんがそんなことを言う。そういえばお腹すいたね。

「それじゃあ、ラ・ペデイスってどこいかない？あそこの店美味しいって噂よ」

島田さんが店を勧めてくる。

「それじゃあそこに行こうか。みらいと姫路さんもいいよね？」

「うん（はい）」

僕らは島田さんが勧めたラ・ペデイスで昼食をとることにした。

ラ・ペデイスにて

店の中では女子たちがさっきの映画の話に花を咲かせていた。

「あそこのキスのシーンは反則でした」

「ちょっとウルってきちゃった」

「私は抱き合ってたところにドキドキしちゃったよ」

みんな思い思いの感想を言い合っていていく。

「あれ？アキ君もう食べ終わっちゃたの？」

「美味しかったからね」

実際は話に余り入っていけなかったからなんだけどね。

「もしかして足りなかったんじゃないの？私のスパゲティ少し食べるっ？」

そう言うと美波がフォークにスパゲティを巻いて差し出してくる。

「ず、ずるいです美波ちゃん！吉井くん、私のも食べてください！」

姫路さんまで差し出してくる。なんか怖いんだけど！

「…………アキ君」

みらい！助けてくれるんだね。

「…………私のもよかったら……」

みらいまで！？なにこの修羅場！？

「」「」「はい、あーん！」「」「」

「あ、アーン」「」

三人の剣幕に押されて口を開く、そして三つの物がいっぺん入ってこようとしている。

「いけません！お姉さま！！」

鋭い金属音が響いたかと思うと、三人の手からフォークがなくなっていた。

さらに飛来する銀色の物体。それが机に着き刺さる。これは……フォーク！？

「ちよ、危ないでしょ！一体誰なの！！」

フォークが飛来してきた方を見るみらい。

そこには、ドリルロールツインテの狂戦士がいた。

「お姉さまから離れなさいっ！この豚野郎っ！！」

そう叫んで、両手の五指の間に挟んだフォークを構える清水さん。

「美春！あんた何でここにっ？！」

清水さんがいた事に驚愕する美波。

「お姉さま！早くその豚野郎から離れてください！！」

清水さんは必死に美波に訴える。

「イヤよ！美春、もうウチに付きまとわないで！」

美波は清水あんを拒絶するが、清水さんには届かない。

「嘘です！お姉さまは美春を愛しているはずですよ！それをその豚が誑かしているに決まっています！」

「いい加減にして！ウチは普通に男の子が好きなの！」

美波は強く言い放つが、清水さんには効果がない。

「お姉さま、ご安心を。すぐにその豚を始末して差し上げます。そうすればお姉さまも目を覚ますはずですよ！」

まったく耳に入っていない清水さん、それどころかまたフォークを投擲しようとする。

「止めてよ清水さん！」

そこに小さな人影が邪魔をする。

「どきなさい！私はその豚を処刑するんですよ！」

「いい加減にして！貴女のやってる事は一方的な気持ちの押し付けじゃない！少しは他人の気持ちを考えてよ！」

「なっ！！？」

みらいの大声にたじろぐ清水さん。

「……………します」

「え？」

なんか不味くないこの雰囲気？」

「美春の邪魔をする者は誰であろうと殺します!!」

逆上して投擲をし始める清水さん。

「不味い！逃げるよみらい!!」

「あ、アキ君!？」

このままでは殺られるとみて、明久はみらいを背負って店から逃げ出す。

「まってよ吉井！」

「まってください皆さん！」

それにつられて二人も店を出る。

「逃がしません！」

そして狂戦士も出てくる。

「アキ君おろしてよ！恥ずかしいよ!!」

みらいを背負いながら街中を駆け抜けていくグループ、一人はフォ

「クを投げつけながら走っているため、自然と視線が集まっていく。

「ダメだよ、みらいはただでさえ体力がないんだから」

「でも……」

「いいから！」

明久の大きな声に押し黙るみらい。

「これからどうするのよアキ！」

「どうするって言われても……」

隣を走っている美波から言葉をかけられる。確かにこのままじゃいづれ殺られてしまう。

「ひい、ふう、も、もうだめです……」

すると姫路さんが公園の中で力尽きてしまった。しまった、姫路さんも運動が苦手だったんだ。

「追いつめました！」

すると清水さんが追い付いてきてしまった。

「くっ……」

どうしよう……

「殺します…コロス…コロ…スコロ…コロコロコロ！」

呪詛を呟きながらユラユラ寄ってくる清水さん。万事休すか……

「くっそおー！誰か救いの手をー！」

『その言葉を待っていたぜ』

「「「え！？」「」「」

すると木の上から人が飛び出し、一回転しながら地面に着地する。

「愛と正義の使者、ラブリー美沙ちゃん登場だぜ」

「……なにやってるの美沙？」

「美沙じゃない！私はラブリー美沙だよ 事情は理解しているよ
ん さあ早く逃げるんだ」

なんで事情を知ってるの！？もしかしてずっとつけてたの！

「アキ行くわよ」

「え、でも」

「いたらきつと邪魔になるわ」

「それもそうだね、それじゃ姫路さん立てる？」

「はい、大丈夫です」

「ニガ……サナイ」

「いかさないぜ」

清水さんが投げたフォークを美沙が撃ち落とす。

「ここを通りたくば私を倒してから行くことだよん」

「ジャマ…する……モノハコ…ロス」

「ようやくの出番…派手に決めるぜ」

まあ出番はここで終了ですけどね。

「なんだとう！」

そして逃げた明久たちは商店街のはずれまで逃げて来ていた。

「はあ、はあ、ここまでくれば大丈夫だよね」

「ええ、さすがに美春もここまでは来ないでしょう」

「……疲れました」

「大丈夫姫路さん？」

「はい、なんとか」

そうは言ってもやっぱり辛そうだ。

「それじゃあ僕が飲み物でも買ってくるよ」

「そう、悪いわねアキ」

「すみません」

「ううん、それじゃ言ってくるね」

さてと……自販機はどこかに……あった。

「……アキ君、いつまで背負ってるの？」

「あ、そういえばそうだった！軽いから忘れてたよ」

「それは私がちっちゃいって言ってるの？」

「め、めっそうもごぞいません」

不味い不味い、みらいに背の事を思わせる事を言うのは禁句だった。

「まったく」

怒りながらすると僕の背中から降りていく。

「さあ、早くみんなの飲み物買っていこう」

「うん」

その後ベンチで少し休憩をした。

「さて、これからどうする？」

「昼食も中途半端に済ませちゃったしね」

「もう今日は解散にする？」

「そうですね…やることも特にありませんし」

何もすることが見つからず解散しようとしていたところに、朝会った人に出会った。

「何してるんだこんな所で？」

「雄二！それに霧島さんも！」

「お二人ともこんな所でどうしたんですか？」

「……遅めの昼食」

「さっき今日開店した喫茶店のシャドウってところが、かなり上手い料理を出すって評判を聞いてな。そこに向かっているところだ」

シャドウねえ、名前だけで判断するとなんか暗そうな店だね。

「ねえ、それじゃ私たちもそこに行かない？丁度お昼も中途半端だったし」

「いいわね、そうしましょう」

「……一緒にいいですか霧島さん？」

「……構わない」

「それじゃ行くか。今のうちなら空いてるだろうしな」

「そうだね」

僕らはシャドウに皆で行くことにした。

場所が変わりシャドウ店内

「ふう、一先ず休憩できるな」

「こんなに客が来るとは驚きでした」

「まったくじゃ、接客もこんなに大変だとは思わなかった」

「でも、だいぶ儲かった。感謝してるぞ直人くん。いつそ湊と結婚してもらった方が、私としても店としても助かるんだがね」

「ぶっ！ー！」

うおー！李紗が吹き出した！

「な、なにをいっとるんじゃ！なぜわっちが直人と……」

「そんな同様するなよ。どうせ墮地さんの冗談だよ」

こんな冗談で動揺してどうすんだ。だいたい湊は俺のこと好きでも

なんでもないだろ。

「またまた〜昔一緒に風呂に入った中じゃないか」

「何ですと!!」

「お、落ち着け李紗!木刀をしまえ!入ったと言っても昔の事だ、5歳のころだ。湊も何か言ってくれ!」

「……………」

「何顔赤らめてるんだ!さらに誤解を招くだろ!」

「直人……久々に試合をしよう」

「おい!若干黒化しかかっているぞ!頼むから落ち着いてくれ!」

カランツ

直人が修羅場を迎えている時、店に客が入ってきた。

「あ、ほら客だぞ。早く出迎えないと」

「……………仕方ありません、この話は家でじっくりと」

「はは…震えが止まらねえ」

「……………何でわっちが…………でも直人がしたいというな…………」

何言っただ湊は。頭から湯気が出そうなほど真っ赤だぞ。

「やっと着いた」

「早く入ろうよ」

「そうだね」

雄二が店の扉を開ける。

「いらっしやませ」

出迎えてくれたのは、霧島さんと似たように凜とした顔立ちが魅力の遠野李紗さんであった。

「ってなにしてんの李紗さん!？」

「おや、お客は明久たちでしたか。直人、ちょっときてください」

「な、なんだ？客の前で一体なにわ……って明久たちか」

店の奥から何故か少しビクつきながらでてきた。

「なにしてるのこんな所で」

「ああ、それはな……」

その後長々と直人の話が始まった。

「なるほどね、大変だね直人も」

「まったくだ、休みの日だったのに全然休めてねえよ」

「李紗さんも災難でしたね」

「まったくですよ、それにさっき聞きづてならない言葉も……」

「何をですか？」

「……浮気防止なら手を貸す」

そう言つてスタンガンを取り出す霧島さん。雄二の不幸を物語つて
いるようだよ。

「大丈夫です。それに直人にはそんなもの効きませんから」

断るのそんな理由なんだ…

バタッ

すると店の扉が荒々しく開けられ一人の少女が飛び込んできた。

「私参上！私の出番は終わらない！やっと見つけたぜ皆の衆」

「直人、バカが入ってきましたよ」

「とつとと追い出せ」

「わかりました」

「まあまあ落ち着こう。あわてず騒がず話し合おう」

「叩き出しますか」

「落ち着こう、恋に悩みし乙女たち　これからは私達女の時間　出ていくのは男たち　外で　待ってる　愚民ども」

「誰が愚民だ！」

「……そうですね、少し話したいこともありますし、男連中には出てもらいましょうか」

「本気か李紗！？なんでそうな……でるぞお前ら」

切り替え早！？

「どうして外になんて出なけりやならねえんだ！」

外に出るなり雄二が愚痴をこぼす。

「なにしてるお前ら、早く逃げるんだ。一分一秒でも生き残るためにも」

「なに言ってるの直人！？」

「いいか、今あの中で行われている会合はな……」

直人が二人に耳打ちすると二人の顔がみるみる青ざめていく。

「逃げよう直人！地の果てまでも」

「ああ、美沙という暴走装置をつけられた奴らから！」

「いくぞお前ら！」

「「おっ！！」」

そして三人はすさまじい勢いで店の前から消えていった。

「頑張っ*て*いきろよ」

その後、その三人を見た者はいたとかいなかったとか。

「私を無下に扱うものには容赦しないぜ」

「もう、介抱する私の身にもなつてよ」

オリエンテーリング大会（前書き）

GAU様感想ありがとうございます。

オリエンターリング大会

あの涙あり、笑いあり、狂気ありのデートから数日。文月学園で突然一つの出来事がおこった。

「文月学園主催お宝争奪オリエンターリング大会？」

ディスプレイに表示された情報にみらいが首をかしげる。

「なんか豪華な賞品が出るらしいぞ」

雄二が賞品が書いてある紙をプリントアウトして持ってきた。

「結構豪華だね、学食の食券一年分とか、新作ゲームの引換券なんてのもあるね」

明久が賞品の一部を読み上げていく。

「このシークレットアイテムってなんでしょう？」

姫路さんがシークレットアイテムの所を指さす。

「さあ？取ってからの楽しみってことじゃない」

「おはようっす」

すると扉が開き直人が教室に入ってきた。何故かあちこちに黒い物体を刺しながら。

「直人！？ちよつとどうしたの！あちこちにクナイ刺さってるけど！」

直人の異様な状態にクラス全体が引いていた。

「ちよつと朝からゴタゴタしててな」

そう言いながら刺さっていたクナイを抜いていく。どうやら刺さっていたというよりは服にひっかかってただけのようだ。どういふゴタゴタが合ったら朝からクナイまみれになるのだろう。

「ところで何の話をしてたんだ？」

「それはね……」

直人にオリエンテーリング大会の事を話した。

「オリエンテーリングね、何か裏がありそうだな」

「裏って？」

「予感がするだけだ。気にすることもないだろ」

直人の予感がよく当たるから怖いんだよね。

その後鉄人が教室内に入ってきてHRが始まった。

「え、お前たちもすでに知ってるだろうが、今日はこれからオリエンテーリングがある」

「念のためルールを復唱しておくぞ。ルールは、三人ひと組でチームとなり、なぞをといて座標をわりだすと、引換券入りのカプセルがみつかる」

三人チームか、だれと組もうかな？

「それとオリエンテーリング中は携帯電話は使用禁止なので覚えておくように」

カンニング防止のためだね。

「それではグループを発表する」

グループはもう決めてあったのか。鉄人にしては気が利いてるね。

「神よ、どうか姫路さんとペアに」

「姉さん愛してる！」

「星野抱かせてくれ！」

「姫路さん結婚して！」

クラス内から祈りが聞こえる。そろそろ皆に熱烈アツタクをしている奴を付きとめたほうがよさそうだ。

そしてディスプレイにグループが表示される。

えーと僕は…直人とみらいとか。他には雄二、秀吉、美沙チームと美波、姫路さん、ムッツリーニチームか。

「……畜生オオ!!」「」「」

クラスメイトの絶叫が響わたる。

「問題児は一ヶ所に集めておいた。何をするかわからんからな」

そんな理由で決めたの!? なんて失礼な! 僕らが一体何をしたって
いうんだ。

「それではこれが問題用紙だ」

「……なにーっ!!?」「」「」

まさかの問題用紙にクラスメイトが驚く。これじゃ問題が解けなき
や景品が手に入れられないじゃないか。

「これも授業の一環だ! 真面目に取り組むように」

強制的にHRを終わらせられ、オリエンテーリングが開始された。

「直人の嫌な予感当たったね」

「迷ってこういう事だったんだね」

今僕らは教室内で机を囲んで問題を解こうとしている最中だ。

「問題のX座標が横でY座標が縦、Z座標が高さを表しているって
ことか」

「一樣、全部選択問題みたいだけど難しそうだね」

「なんだ、選択問題なのか。それなら簡単だね」

「なんだ明久、お前選択問題得意だったのか？」

明久が選択問題を得意としてるとは知らなかったな。

「まかせてよ。自称、選択問題の魔術師と言われている僕に」

自称なら言われてるんじゃないだろ。不安が残るな。

「いくぞ！ストライカーシグマV！」

明久が鉛筆を構え転がす。

「…わかった！X座標652、Y座標237、Z座標は5！発見、ターゲットはあそこだ！！」

そう言っつて明久は窓の外を指さす。

「おもいつきり空中だぞ」

「あれ？」

「アキ君…その鉛筆は使っちゃダメって言ったでしょ！」

ボキッ！！

「ああ！ストライカーシグマVウー！！」

なるほど、これがみらいの折った五本目ってことか。

「先が思いやられるな」

それから一時間たつがいまだに当たりは見つからない。

「なかなか当たりは出ないね」

「そうだな、今度はこれでどうだ？」

直人が物理の問題を囲み場所を導き出す。

「ここは……体育倉庫だね」

「それじゃあ行ってみようよ」

僕は体育倉庫に向かった。

「えっと、座標だところだけど……あった！」

「やったね直人くん」

「中身見てもようぜ」

「そうだね、えっと……如月グラウンドパークプレイオープンチケットだって」

今度オープンするっていうテーマパークのチケットか。

「ちょうどペアようだし二人で行って来たらどうだ？」

「えー!? 私がアキ君と…」

「でも直人はいいの? 李紗さんと行かないの?」

「李紗はこういうところ好きじゃないと思う。だから二人で行って来いよ」

「……みらい一緒に行く?」

「う、うん。アキ君がいいなら」

中睦ましいことで。

すると一つのグループが体育倉庫に入ってきた。

「おお、みらリン ここで会うとはなんという運命」

「雄二たちもここに取りにきたの?」

「まあな…これで二つ目だ」

「一つ目はなんだったの?」

「学食の食券一年分だったぜ」

「とくろでこの景品はなんなんだ? ものによっては見逃してやる」

「随分なものだな。俺たちに召喚獣バトルで勝てるっても？」

いくら美沙がいるからって、秀吉はともかく、経験の浅い雄二に負けるとは思わない。

「試してみるか？やるならやる前に景品を教える」

「如月グラウンドパークプレイオープンチケットだよ」

みらいがそう言つと若干雄二の顔が青ざめた。

「……お前らそれどうするつもりだ？」

「みらいと行くつもりだけど」

「そうか…それなら見逃してやる。絶対そのチケット取られるなよ」
「！」

凄い剣幕で雄二が言ってくる。

「わかったけど何で？」

「おおかた霧島に見つかるとそこに連れて行かされかねないからだ」
「ろ」

「さすがに鋭いの直人」

「いらんこと言っていないで行くぞ」

雄二が秀吉たちを引き連れて出ていこうとする。

「シーユーみらリン アッキーとお幸せに」

「美沙ちゃん！」

美沙が最後にみらいをからかいながら出ていく。

「気を取り直して次行くか」

「うん」

あれから三問ほど解いたがすでに景品は取られた後だった。今は理科準備室に向かっている。

「今度こそ二つ目の景品を手に入れるよ！」

「気合い入ってるねアキ君」

「自分で解いた問題だからじゃないか？」

「そうかもね」

「……あつた！合つたよ！」

明久が手を振ってアピールしてくる。

「なにがでたんだ？」

「えっとね…商店街の商品券二万円分だつて。直人いる？」

「いいのか？せっかく明久が自分で解いたのに」

「うん、僕たちはチケット貰ったしね。みらいもいいよね」

「うん、大丈夫だよ。いつも直人くんにはお世話になってるもん」

「それなら貰うぞ」

少しは食事代の足しになるかな。

「真由美・葉菜、早く早く、準備室ここだよ」

「待ってよ葛葉ちゃん」

「…あ、貴方達Fクラスの」

ちっ、鉢合わせしちまったかめんどうくさい。

「お宝を持ってるわね。出入口はここだけだし渡してもらおうよ」

「そう簡単にはやれないな」

「言ってなさい、田向井先生丁度良いところに。召喚許可を願います」

『わかりました、承認します』

物理のフィールドが張られる。

「「「サモン！！！」「」」

かけ声に答えて、三体の試験召喚獣が姿を現した。

「フィールドが物理だったのを呪うんだな、いくぞ明久、みらい！」

「了解！」

「うん！」

「「「サモン！！！！」「」」

直人たちの召喚獣も召喚される。

Cクラス×3 105&132&122点

Fクラス霧乃直人&吉井明久&星野未来 243&66&155点

遅れて全員の点が表示される。

「なっ！？なんなのあの点数！」

「ホントにFクラスなの！」

「さっさとおわらせるか」

「そっだね」

「甘く見てくれるじゃない！いくらなんでもあんたなんかには負けないわよ！」

自分よりも圧倒的に点が低い明久になめられ、怒る相手チーム。

「やあ！」

明久に向かって剣が振り下ろされる。

「ほっと」

それをかわして、逆にその突進力を利用して相手の召喚獣の首に木刀を突き立てた。

「なんですって!？」

明久のやつさらに召喚獣の使い方が上手くなってるな。坂田との戦いで経験値たくさんもらったか？

他の二人も直人とみらいに一撃でやられて景品を守ることに成功した。

その後はとくに景品を得ることができず終了の時間になってしまった。

現在明久たちは景品を引きかえて教室内にいた。

「はー、結局手に入ったのは二つだけか」

「まだいいじゃない、ウチらなんて一つよ」

「私たちも二つだったゼイ」

姫路さんたちは一つ、雄二たちは終了直前に屋上で見つけて二つ手に入れたようだ。

「ところであなたたちのそれ、券とストラップ割にはおつきくない？」

美波が箱を指さす。確かにさっきから気になってたんだよね。

「取りあえず開けてみるか」

「そうだな」

直人と雄二が箱を開けて景品を取り出す。残った箱の中には両方も三つの腕わが入っていた。

「何でしょうこれ？」

「もしかしてこれがシークレットアイテムって奴かな？」

みらいが腕輪をとり眺めてみる。

「ん？そこに説明書らしきものがあるぞい」

秀吉が両方の箱の中から紙を取り出した。

「何々…こっちは虚勢の腕輪って言うみたいだな」

「こっちは黒金の腕輪だ」

僕たちの腕輪が虚勢の腕輪で雄二たちの方が黒金の腕輪というらしい。

「何々…この腕輪を使用すると召喚獣が、個人の模擬戦なら一度、試験召喚戦争中なら一度だけ、自身の召喚獣の腕輪の力を使う事ができます。起動ワードは、フェイクリング。……だそうだ」

つまりこの腕輪を使えば点が400点いってなくても腕輪の力を一度だけ使う事が出来るってことか。

「ほーそりゃあ便利な腕輪だな。設備を守るのに一役かいそうだな」

「雄二たちのはどういう力があるの？」

「今読む…この腕輪を使用すると召喚フィールドを教師の承認なしに生成することができます。（科目指定不可）起動ワードはアウエイクン…だそうだ」

雄二たちのは召喚フィールドの作成か。結構便利そうだね。

「それならさっそく起動してみようぜい」

美沙が腕輪をはめながらそう言ってくる。

「それもそうだな」

雄二も腕輪をはめていく。それにつられるように僕らも腕輪をはめていく。

「それじゃ始めるか」

「そっじゃの」

「OKさ」

干渉しないように三人が一定の間隔をあける。

「アウエイクン！！」

三人からフィールドが形成される。

「サモン！！！！」

それぞれのフィールドに召喚獣が召喚される。フィールドは右から数学、英語、日本史のようだ。

「どうやら成功のようだな、それじゃ今度はこっちの番か」

「フェイクリン……」

三人が言い終わろうとした瞬間に、雄二たちの腕輪から煙が出た。

「な、なんだ！？……おわ！？」

「のわ！？」

「うひゃ！？」

突然三人の腕輪が爆発してフィールドが消滅してしまった。

「…………… ツッ！ー！ブシャアアア！ー！！」

「ムツツリーニイイ！！」

「…………… いやん みんなのエッチ」

煙の中からは、服がずたぼろの三人が出てきた。

「アキ君は見ちゃダメ！！」

みらいが必死に僕の目を抑える。… ちょ、胸が当たってるんだけど！

「…………… 雄二は見ちゃダメ！！」

「グオオオオ！！目が！目が！ どっから湧いて出た翔子」

「直人……………」

「見てない！俺は何も見てないぞ！だからどこから現れたか知らないが李紗！落ち着いてくれ！」

「美沙、木下！！早く服を着て！」

「早く着てください二人とも」

「ワシは何故男のなのに何も言われんのじゃ……………」

秀吉が何か言ってるけど皆それどころじゃない。

「落ち込むなヒデッチ 私が慰めてやるさ」

「み、美沙！？は、早く服を着てほしいのじゃ。目のやり場に困るのじゃ」

その光景を一室で眺めている人物がいた。

「ふむ…点数が高すぎて暴走したってところかね。このデータは白銀の腕輪に生かすことにするさね」

ちなみに虚勢の腕輪の方は何の問題もなく起動した。

ラブレター争奪戦 前編（前書き）

GAU様、へるぷるへ様感想ありがとうございます。

へるぷるへ様の明久への腕輪の能力は検証させていただきます。

ラブレター争奪戦 前編

今日は何時もどつり、直人がクナイまみれになって入ってくる何時もどつりの朝のはずだった。

「工藤」「はい」「久保」「はい」

今は出席を取っている。

「近藤」「はい」「斉藤」「はい」

今日もいつもと変わらない平穏な日が始まる予定だったのに、雄二の一言ですべてがぶち壊された。

「坂本」

「……………明久と直人がラブレターを貰ったようだ」

『殺せええっ!!!』

雄二のかなり小さな声を聞き逃さずクラスメイト（殺人鬼）が砲口した。

「ゆ、雄二！いきなりなんてことを言い出すのさ!」

『どついうことだ!?吉井と霧乃がそんな物を貰うなんて!』

『それなら俺たちだつて貰っていてもおかしくないはずだ!自分の席の近くを探してみる!』

『ダメだ！腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない！』

『もっとよく探せ！』

『……出てきたっ！未開封のパンだ！』

『お前は何を探しているんだ！？』

別に二人が貰っても不思議じゃないと思うんだけどな。

「お前らっ！静かにしろ！」

シン

さすが鉄人だ。一喝でクラスメイトを鎮めてしまった。

「それでは出欠確認を続けるぞ」

鉄人が出席を再び取り始める。

「手塚」「吉井クロス」

「藤堂」「霧乃クロス」

「戸沢」「吉井クロス」

みんな返事が変わっちゃってるよ……

「皆落ち着くんだ！なぜだか返事が『吉井クロスと霧乃クロス』に

変わっているよ！」

「吉井、静かにしろ」

「先生、ここで注意するべき相手は僕じゃないでしょう！？このままだとクラスの皆は僕ら殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ！」

「新田」「霧乃コロス」

「布田」「吉井マジコロス」

「星野」「皆いい加減にして！これ以上言うなら皆ともう口きかないから！」

「……すみませんでしたーっつっ！！！！」「……」

みらいの一言によりクラス全体が土下座した。

その後は何事もなく出席は終わった。

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉学に励むように」

そう言うと鉄人は教室から出て行った。

「で明久、手紙には何が書いてあったんだ？」

鉄人が出ていくなり雄二が内容を聞いてくる。

「さあ、まだ見てないから。直人の方はなんて書いてあったの？」

直人に尋ねるが返事がない。

「なお君ならさっきから寝てるぜい」

美沙が寝ている直人を真正面から見ながらそう言う。おそろく寝起きドッキリでも仕掛けようとしているんだろう。

「よくさっきの騒ぎの中寝ていられるのう」

確かに。よっぽど疲れているのかなあ？

「なら今のうちに手紙見ちまおうぜ」

雄二が直人のカバンから手紙を取り出す。少しは人のプライバシーの事も考えようよ。

「出も気になります、一体誰が出したんでしょう？」

皆も気になるようで、美沙以外は雄二の近くへ集まった。

「早く読んでよ坂本」

「そうせかすな島田。何々……」

『久しぶり直人くん。Aクラス戦のあと、屋上で会った以来かな？』

書き出しから女子のようだった。

『あれから全然会えないけど時間帯がずれてるのかな？』

『この間のお礼も早くしたいし、もし時間が開いていたらお昼に屋上に来てね』

お礼ってなんだろう？

「それで、相手は誰なの？」

「相手は……響聖花……」

「……何だとおお……！！」「……」

クラスメイトが絶叫する。

『何で響さんが霧乃なんかと！』

『あんな不細工なくせに！』

『きつとあの悪魔が弱みを握っているんだ！』

「……そうだ！そうに違いない！！」「……」

現実から目を背けようと、クラスメイトは勝手な解釈を始めた。直人がそんな事する分けないじゃないか。

「……五月蠅い。一体何なんだ」

「オツハーなお君 やつと起きたね」

この騒がしさで直人も起きたようだ。

「……なんだ美沙？要でもあるのか？」

「目が覚めたらこんな美人が目の前にいるのに、他に言う事はないのかい？」

「最近疲れてるんだ。あまりツツコムきになれない」

「ぶ〜、つまんな〜い」

「ところでこの連中は何をしているんだ？」

皆が手を床について絶望しているのを見て直人が僕らに聞いてくる。

「気にしないほうがいいよ」

「そうか。まあ気にしてるだけ体力の無駄か。それと雄二何勝手に人の手紙読んでんだ、返せ」

「気づいてたのか。お前はもう読んだのか？」

手紙を返しながら雄二は尋ねる。

「まだだ、もう少ししてから読む」

そう言うとまた机に突っ伏して寝始めた。よっぽど疲れてるんだね。

その後は何事もなく時間が過ぎていった。クラスの何人かは、寝ている直人に襲いかかろうとしたが、反射的に持っていたクナイを投げつけられた以降、襲い掛かるものはいなくなった。

そして昼。

「それじゃアキ君私先生に呼ばれてるから」

「うん、またね」

みらいは鉄人に呼ばれているらしく、教室から出て行った。

「それでみんな、今日はどこで食べる？」

「明久よ、そんなことを言っている場合かの？」

秀吉がそんなことを言ってくる。何かあったっけ。

するとクラスメイト達が急に覆面をかぶり、僕を取り囲み始める。

「え！？なにみんな、一体どうしたの！？」

何で僕は取り囲まれているんだ！？

『坂本に言われてきずいたのさ』

『今なら俺たちを邪魔するものは何もない』

『霧乃がだめならせめて吉井』

みんなが一旦声を止め息を整える。

「「「お前の幸せを邪魔してやる！」「」「」

「君らは最低のクラスメイトだ!!」

「皆さん止めてください」

そこに救いの神が現れた。

「せっかく勇気を出して渡した手紙を取るなんてだめです!」

流石は姫路さんだ。彼女に抑えられFFF団の勢いが弱まる。

「吉井くん手紙はまだ読んでないんですよ?」

「うん。昼食べてから見ようと思って」

そう言つて手紙を出す明久。だがそれを見るなり姫路さんの表情が変わった。

「だ、だめです!その手紙を読んじゃ!」

「ええ!?何でさ姫路さん!」

一体彼女に何があつたんだ。

「と、とにかくだめなんです!」

『姫路さんの許可が出たぞ!取り囲め!』

「「「ラジャー!!!」」」

再び明久を囲い出すFFF団。

「畜生！！みんななんて嫌いだああ！！」

包囲が完成する前に教室から逃げ出す明久。

『逃がすな！』

『手紙を奪え！』

『部隊を分けてすぐに追え！』

須川くんらしき声が聞こえてくる。道理で今までおとなしかったわけだ！ねんみつに部隊まで分けている。あいつらここで僕を確実に殺る気だ。

『必ず落とすんだ！生死は問わん！サーチ&デスだ！』

「「「サーチ&デス！！！！」「」」

そこはせめてデストロイで！

畜生…これも全てこいつらに入れ知恵した雄二のせいだ。この恨みいつか晴らしてやる！！

「手紙絶対に読まないでください！」

最後に姫路さんの声が聞こえてきたような気がした。けど今の僕にそんな事を気にしている暇はない。

そんなことを考えながら明久はお昼の廊下を駆け抜けていった。

ラブレター争奪戦 後編(前書き)

雄「ところで姫路」

瑞「何ですか」

雄「あの手紙お前のだろ？」

瑞「な、なんで知っているんです」

雄「そりゃなあ、他人の手紙を奪っちゃ不味いよなあ」

瑞「あ、あの、明久くんには……」

雄「ああ、別に言いやしねえよ」

瑞「ありがとうございます」

雄「俺はあいつの幸せをぶち壊せるのなら何でもいいからな」

瑞「……………」

ラブレター争奪戦 後編

『G班！そつちに逃げたぞ！』

『C班とF班もやられたそうだが、敵が一人だとしても甘く見るな！』

「「「「了解！！」「」」」

『いたぞ！吉井だ！用具室に逃げ込んだぞ！』

団員の一人が明久を発見したようだ。

ガララッ！

おもむろに扉が開けられる。

『へへへ…追い詰めたぞ吉井』

『貴様だけ幸せになろうなんて不届きせんばん』

『今ならその手紙を引き裂いたあと、紐無しバンジーの刑で済ませ
てやる。わかつたら手紙を渡すんだ』

今の言葉を聞いて素直に渡すと思っているのだろうか。

「嫌だね、欲しかったら自力で奪って見れば？」

「「「「いい度胸だ！！」「」」」

挑発に乗って一カ所しかない扉から侵入してくる団員たち。

「……………今だ!!」

「……………ツツ!!?」「……………」

ふふ、驚いたところでもうおそい。

団員の頭上からサッカーゴールのネットがぶっってくる。

『くっ……………このネットビショビショに濡れてやがる』

『落ち着け! ネットのはじめに近いほうから脱出して行くんだ!』

そんな隙は与えない!

「バイバイみんな」

明久はそう言うと、先端をバチバチと光らせている物体を投げつけた。

『お、お前たち急いで……………』

叫び声を上げるが時すでに遅し……………無情にも投げられた物体は濡れたネットに着弾した。

「……………ギヤアアアアツツ!!」「……………」

クラスメイトの叫び声が用具室に響き渡る。

「ふん、人の幸せの邪魔をするからさ」

そう言うと明久はその場を後にした。

『どこだ？確かにこっちに来たはずだが』

『気をつける。きっと近くに潜んでいるぞ』

『C、F、に続きG部隊もやられたそうさ。油断はするなよ』

ここは旧校舎の古書保管庫。その中で緊張した様子のクラスメイトが囁き合っている。怒涛の勢いでクラスメイトを撃破してきたせい、随分と警戒しているようだ。

身を潜ませている本棚の影から様子を窺うと、互いに背を合わせ視角をつぶしていた。

一ヶ所に集まっていると動きがとりにくいだけなのになあ……

彼らの近くにある本棚まで素早く移動し、適当に本を抜いて僕がいる場所とは対角の方向に投げる。

『なんだ！？』

『吉井か！』

音に反応して全員が同じ方向を見る。

「よい……しよっ……」

『な……っ……』

『しまっ……!!』

倒れてくる本棚とは逆の方向に注意がそれていた彼らの反応は鈍い。その結果全員が本棚の下敷きになった。

「ハッハー！人の恋路の邪魔をしようとするからそんな目にあうのさ！」

本棚から脱出しようともがく三人を尻目に明久は古本保管庫から退出する明久。

『おのれ吉井！裏切りものめ！』

『覚えている！お前の幸せを必ずぶち壊す！』

……同じようなことしか言えないのか、この連中は。

そのころみらいは……

「それじゃあ西村先生、これでいいですか？」

「ああ、すまないな星野」

「いいえ」

仕事の内容は戦争の処理だった。やっぱりFクラスがAクラスに勝つたりしたから処理が大変なのかな？

「それじゃあもう戻っていいですか？」

「ああ、すまないな昼休みに」

西村先生が出て行く私にそう声をかける。アキ君たちはもうご飯食べちゃったかな？

教室にて

「おお、星野お帰りなのじゃ」

教室に戻ると木下くんが出迎えてくれた。なにやらクラス全体に人がいない気が…

「木下くん、みんなはどこいちゃったの？」

「それがの、星野がいなくなったのを切欠に、また暴動が起こってしまつての。今この場にいないものは明久を追いかけて行つてしまつたのじゃ」

「ええ！？でも普通直人くんが止めない？」

「直人ならほれ……」

木下くんが指した方向を見ると直人くんはすやすや眠っていた。

「まだ寝てたの！？」

驚くみらいの後ろを一人の人物がとる。

「おっ帰り〜 みらリン 早くご飯食べようぜい」

のん気に「飯を食べよう」といつてくる美沙。

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ！アキ君を助けないと！」

「うん…みらリンが言うならしょうがない 助けてみせよう アツキーを」

「直人くん起きて、アキ君を何とかして！」

完璧に無視されている美沙。

「オヤヤ！？無視かいみらリン。悲しい 眩しい 痺れるぜ」

意味がわからないことを言っている美沙。

「ふあゝあ…眠い」

「お願いだから早く目を覚まして直人くん。水でも飲んで目を覚まして！」

そういつて水を持ってくるみらい。

ゴクゴクゴク

「ぶはゝ、さてと…明久だっけ、それじゃあ助けに向かうとするか」

「うん！」

そして二人は教室を後にした。

そのころの明久は……

「くくくたばれ吉井イイ!!」「くくく」

「だれがくたばるか!」

現在食堂内を逃げ回っていた。

「くそ、食堂内なら襲ってこないと思ったのに」

明久は人が多くいる食堂ならば、襲ってくることを自重するだろうと予想したが、それは間違いだった。

「きゃあ!」

「おわあ!」

「俺のカレーが!!」

周りの人に迷惑かけすぎだ!ごめんなさい、関係のない皆さん。

ガッシャーン

『ああ!!俺のパフェが!!』

ん、なんか聞き覚えのある声。

「テメーラ!!なんてことしてくれたんだ!俺のパフェが…全部丸々毀れちまつたじゃねえか!!」

「……「ちょ、まつ、ギヤアアアアア！」……」

ナイス坂田くん 君のおかげで悪わ殲滅された。

「ふう、だいぶ片付いたかな……」

FFF団の追撃を逃れた明久は現在旧校舎内にいた。

「やっぱりここは屋上に…… ツツ殺気!!」

殺気を感じ明久が飛びのいた所には、シャーペンなどが付き刺さっていた。

「……やっぱり君か…ムツツリーニ」

「異端審問会は他人の幸せを許さない」

くっ、ここはやはり倒すしかないのか……

「覚悟しろムツツリーニ!!」

すまないムツツリーニ、ここでしばらく眠ってくれ!!

シュッ

目の横をカッターが通過する

「次は目を狙う……」

「オーケー…ここは話し合おう」

やっぱり友達どうし、穏やかにいかないかね。

「それじゃあそっちの要求を聞こうか」

「こちらの要求は…グロテスク…」

恐ろしく穏やかじゃない要求だ。

「ちよつと！そんな要求はないでしょ！？」

「交渉決裂……」

そう言うとムツツリーニはカッターを構えてくる。

くっ…何かムツツリーニの気をそらせる話題は……

「……安心しろ…目は狙わない……」

「全然安心じゃないからね!？」

カッターで刺したらどこでも致命傷だからね！

ムツツリーニが迫ってくる。

………そうだ!!

「ムツツリーニ！みらいのスリーサイズ知ってる？」

この話題ならムツツリー二にも……

「……そんなもの……一般常識」

「どんな一般常識!？」

なんで一緒に暮らしてるも同然な僕でも知らない事を知っているんだろう？

「……ムツツリー二、あとでその情報を詳しく……」

「……料金は三割増し」

うえ……ボッタくるな

「今は鬼のいぬまに洗濯だ……」

鬼って直人のことかな？そうか！最初から直人を起こしに行けばよかったのか！

「……誰が鬼だ」

ま、いいか。すでに後ろにいるし。

「ツツ!!なんでここが!」

「いや……あれだけ騒いでいたら誰でも気づくから」

「土屋くん……私ダメって言ったよね」

みらいに詰め寄られ後ずさるムツツリーニ。

「……………」

黙秘するムツツリーニ。

「勘弁してやれみらい。明久に実害はなかっただろう」

「直人くんがそう言うのなら……………」

「所で他のFFF団の勢力はどうなったの？」

「ああ、だいたいは始末してきた。後は……………」

ピピピッ

直人の携帯電話が鳴る。

『こちら李紗です。バカの始末完了しました』

「おう、さんきゅう。今いる場所教えるから来てくれ」

『わかりました』

ピピピッ

切ったと思ったらまたかかってきた。

『ワッチじゃ、こちらは始末し終えたぞ』

「さんきゅう、今いる場所教えるから来てくれ」

『わかった』

どうやら応援をたのんでいたようだ。

「これで始末完了だな」

「まだ美波がいるよ」

ある意味最強のカードが残っている。

「失礼ね！私がそんな事するはずないでしょ！」

「み、美波」

何時の間に…

「やつほ〜アッキー 鬼ごっこ楽しかった？」

捕まったらラブレターを引き裂かれ紐無しバンジーをさせられる鬼ごっこが楽しかったとでも？

「大変じゃったの明久」

秀吉が慰めてくれる。ああ、癒されるよ。

「ところで明久、ラブレターはどうした？」

「え？もちろんここに……あれ、あれ！あれれ！…ない！ないよ！」

まさか逃げ回ってる最中に落とした！

「結局アキは報われない運命なのね」

「うっ…なんてこった」

「落ち込むな明久、次があるさ」

「…うん」

それから数分後、李紗さんと、影野さんが来た。

「直人、こんな所に皆を集めてどうするの？」

「ん、あの手紙読んだんだろお前らも。いいものを見せてくれるって書いてあったじゃん」

あれってラブレターじゃなかったんだ。

そのまま僕らは屋上へと向かった。

そして屋上へ続く階段、二人の人が立っていた。

「…ゾロゾロ引き連れてきたな明久」

「雄二に姫路さん」

それにしても…雄二はともかく何で姫路さんまで僕の邪魔を…

「よ、吉井くん！あの手紙はどうしましたか！」

「え？実は逃げ回ってる最中に落としちゃって」

「そ、そうですか」

心なしかホツとしているように見えるのは気のせいだろう。

「明久……だからお前は明久なんだ」

「なんだこら！どつという意味だそれは！」

「落ち着け明久、ゴリラの挑発に乗るな」

「そうです。ラブレターも貰えないゴリラの癖みです。気にする必要はないでしょう」

「黙れこの毒舌コンビ！」

雄二が事実を言われ憤怒する。僕から言わせたら雄二の方がよっぽど毒舌だよ。

「……雄二、二人にそんな事言うのはよくない」

「げ！翔子！？なんでお前がここに！」

「……一緒にお昼ご飯…場所は霧乃が教えてくれた」

「てめえ！なんて余計な事をしてくれたんだ！」

「ペット（彼氏）の仕付け（教育）は主人（彼女）に任せるのが適格だろ」

「建て前と本音が逆になってんだよ！！」

「……雄二……早くしないとお昼が終わる………」

首根っこを掴まれて引きずられていく雄二。

「ぐわっ！離せ翔子。お前の料理はドクドクしいピンク色をしているから食いたくねえ！」

「……変なクスリなんて入ってない」

「ちくしょう！これも全てあの悪魔のせいだ！」

最後にそんな叫び声が聞こえてきた。

「……あのゴリラは一度始末する必要があるそうですね」

李紗さんの眩きがやけに耳に残った。さようなら雄二。来世でも一緒にバカやろっ。

そして姫路さんを加え屋上の扉を開けた。屋上には手紙に書いてあったとおり響さんがいた。

「……きたね。ずいぶんギャラリーもいるけど」

「別によかっただろ？」

「まあね。聞かれても困るものでもないし」

そう言う響さんはなんだか普段と違って見えた。

「それじゃあ時間もなし始めるね」

そう言ってバイオリンを構える響さん。見せたい物って演奏だったんだね。

くくくくくくくくくく

響さんの演奏はとても素晴らしく疲れがとれていくようだった。

ラブレター争奪戦 後編(後書き)

翔「……雄「アーン」」

雄「アーン、じゃねえ！そんなピンク色したもんが食えるか！」

翔「……雄「……」」

雄「なんだ、絶対俺は食わんぞ。だから俺を介抱し……」

翔「……ラブレターが欲しいなら言っで。いくらでも書くから……」

雄「ゲホツ、ゲホツ、な、何言っでんだお前！」

黒李紗参上！惨劇の時間（前書き）

黒李「ようやく私の出番か」

霧「が、頑張ってくださいーい」

「ほどほどにしてね」

（ちょっと、なんでこんなトンでもない時に呼ぶの！あの人師匠達みたいな威圧を感じるんだけど！）

（だって一人じゃこわいじゃん）

（あんた作者だろ！）

「何をこそこそしている？」

霧&作「「なんでもありません！」「」

黒李「そうか？それでは私の活躍見るがいい！」

黒李紗参上！惨劇の時間

ある日の放課後その出来事はおこった。誰しも予想しなかった出来事が。

今は休日のFクラス特別補習が終わり、Fクラスメンバー+『雄二が来るなら休日でも来る』と言った霧島、そして剣道の試合が合ったため学校に助っ人で来ていた李紗と屋上で昼食をとっていた。

「…雄二、アーン……」

「アーン、じゃねえ。自分で食うからそんな事しないでいい」
相変らずのラブラブっぷりだな。

「まったく、雄二もいい加減素直になればいいのにね」

「まったくだ」

「テメー等！人ごとだと思って勝手な事言ってるじゃねえ！」
人ごとだしな。一体なにが不満何だか。

「雄二はおいておくとして、遠野の食欲は凄いのう」

「ホントよ。よくあれだけ食べて体重が増えないのかしら」

「…そこまで私は食べていますかね？」

食べてるよ。っとそこにいた全員が思った。

「何か太らない秘訣でもあるんですか？」

やっぱり女つてのはスタイルを気にするのかな？

「秘訣が合ったら教えてほしいものね」

姫路も島田も一般基準から見たらよっぽどスタイルはいいと思うが。

「秘訣…ですか。…そうですね、毎朝の鍛錬とランニングを欠かさない、それとバランスのとれた直人の料理ですかね」

いや…あれだけ食べてたらバランスもヘッタクレもないからな。

「やっぱり運動しないとイケませんか」

「そこは女の子の悩みよね」

「わかるねん 運動した後って余計食べちゃうから逆に体重が増えちゃうんだよねん」

「美沙もそうなの。やっぱりそうよね」

「はい、暑くなってくるとジュースとかアイスとかで余計に増えちゃうんですよね」

「」「」「うんうん」「」

女子三人がうなずき合う。そこまでのことかね。

「その点みらリンはいいよねん 全然太らないし 体重もよ……」

「ちよつと！何余計なこと言おうとしてるの！というよりなんで私の体重知ってるの!？」

「みらリンの事なら任せるっさ」

「人のプライバシーを考えてよ！」

平和だな…その時俺はこんな平和が続くと思ってたんだ。そう雄二があんなことをやらかすその瞬間まで。

「……雄二、早くアーン……」

「だからいって……っとと」

「……ッッ!!」

詰め寄られた雄二が足をもつれさせ李紗の方に倒れる。とっさの事で避けられなかったのかそのまま倒れこんでしまった。

「あゝあ雄二」

食事中の李紗さんにあんなことをやらかして、どうなることやら。

「……雄二…浮気は許さない」

どこからかスタンガンを持ち出し雄二に迫る霧島。

「てて…ま、まて翔子！これはもののはずみで」

起き上りあわてて弁明をしようとする雄二。しかしそれを聞き入れない霧島も相変わらずだな。……ん？雄二のやつ何か手でつかんでないか。

「おい雄二、その手から出てる黄色いのなんだ」

雄二の手からは黄色っぽい束のようなものが握られていた。

「…んあ？……なんだこれ？」

雄二の手が開かれるとそこには……李紗のあほ…毛が…

「それ李紗ちゃんの、ぴよんて出た前髪じゃない？」

「ちよつと坂本！女の子の髪を抜くなんて何してるのよ！」

「…雄二、さすがに不味い……早く謝る」

三人がそんな事を言っているが今はそんな場合じゃない！

「…あ、ああ。すまなかつたな遠野。ものの弾みだつたんだ」

三人の勢いに雄二がたじろぎながらも李紗に謝る。しかし李紗は倒れたまま動かない。やっぱりか！

「あ、あの大丈夫ですか遠野さん」

「ひよつとしたら頭を強く撃ってしまったのでは」

「雄二！なんてことをしたのさ」

「い、いや。わざとじゃ…お、おい、大丈夫か遠野」

さすがに焦ったのか雄二が心配そうに言う。違う！今心配することはそんな事じゃない！

「全員静まれ！！」

突然直人が大声を上げる。一体なにがあったのだろうか？

「霧島、島田、姫路！今すぐここから離れる！」

「な、なにをいきなり」

「どうしちゃったんですか霧乃くん？」

「…雄二から離れたくない」

ええい面倒だ！

「いいからいけ！そしてこのまま今日は帰るんだ！霧島も今度雄二と一日デートさしてやるから頼む！」

「な、なんだかよくわからないけど分かったわ」

「そ、それではみなさんまた」

「……雄二……デート楽しみにしてる」

そう言うと三人は出て行った。よし、これで非戦闘員は去ったな。

「あ、おい翔子！テメエどういうつもりだ！」

「五月蠅い！今はそれどころじゃないんだ！」

そつだ。今は雄二なんか構っている暇はない！

ムクリ

すると倒れていた李紗が揺らりと立ち上がった。起きちまったか！

「あ、遠野さん大丈夫？」

「どこか痛い所ない」

やばい！今の李紗に近づくな、明久、みらい！

「なんか李紗リンのようすが違うような……」

美沙は少し気づいたか。

「おい、大丈夫か遠野。打ち所が悪かったのかと心配たぞ」

そう言いながら李紗の肩に触れる雄二。ばか！今李紗に触れたら。

ガシッ

雄二の頭を後ろから鷲頭かみにする李紗。

「……………は？」

どうも状況が呑み込めないようだ。

グシャアアア！！

「グハアアツ！！」

そのまま地面に叩きつけられる雄二。遅かったか。

「李、李紗ちゃんなにしてるの！？」

「いくらなんでもやりすぎじゃぞ！？」

李紗の飛んでもない行動に詰め寄る秀吉とみらい。

「……………クス」

若干笑みを浮かべる李紗。間に合うか！

ズガン！！

近づいてきた二人に向かって放たれる竹刀。それをすんでの所で直人が受け止める。

「ア、アワワワワ」

「い、一体なんなんじゃ」

余りの恐怖にしりもちをつく二人。なんとか間に合ったか……

「……ククク、久しいな直人」

「……ああ、本当だな」

「……なんだ、久しぶりに私が表に出たというのに不仕付けだな」

な、なんなのこの会話。

「な、直人これは一体どういうことなの？」

「………まるで別人」

明久と康太の疑問ももつともだな。

「……ふん、教えてやれ直人」

「相変わらずえらそうな」

「何か言ったか？」

「いいえ」

この威圧感だけは相変わらずだな。

「みんな、こいつはな……李紗の中にもう一人李紗だ」

『……え……ええーっ！っ！……!!?!?!?!?』

全員がもれなく驚く。そりゃあ無理もないわな。

「…えっと、それってつまり二重人格者ってことかな」

「そのとおりだみらい」

「でも何でいきなり」

「李紗が反転するのは二つの理由がある。一つは怒りがある一定量を超えたとき、もう一つは…」

『もう一つは？』

「頭のあほ毛が抜けたときだ」

『……ハアアアアーツツ！！』

「そ、そんなあほな理由で……」

「貴様にあほなどと言われたくないわバカ」

「なっ！？」

なんて失礼な！

「今の李紗はかなり毒舌だからな。気に障る事したらその奴見なくなるぞ」

指で地面に倒れ伏す雄二を指す直人。

「そ、そんな怖がる事ないよん 李紗リンは李紗リン あ、今は変わってるから黒李紗リンだねい」

「おい、その女」

「何かなん黒李紗リン」

「なに、たいした要はない」

笑顔で美沙に近づくと李紗さん。美沙が言ったとおりそこまで心配することなんて……

ゴスッ

「ウキヤ!?!」

……李紗さんの手刀を頭部にくらい目を回しながら倒れる美沙。よ、容赦がない。

「ちなみに女だろうが容赦はない。あれが例だ。まあ、黒李紗つづうのは否定しないがな」

直人まで! あんなことを言ったら美沙のにのまいだよ。

「クフフ」

笑いながら近づいていく李紗さん。

「変わらないのは直人も同じのようだな。昔どつりで何よりだ」

あ、あれ？なんか全然態度違くない？何だかいつもと違ってかなり色っぽく見える。

「貴様らに言っておく。私を黒李紗と呼んでいいのは直人だけだ。それ以外の奴がそう呼んだ場合はあの女のように制裁を加えるからな」

な、なんつう傲慢な…変わってないところといったら直人ラブの所だけのようだ。

グゥゥ

「…む、そういえば腹が減ったな。直人、何か作ってこい」

「わかったよ。そのかわりここにいる奴には手出すなよ」

「……できるだけ善処しよう」

「そついう訳だ。後は任せるぞ明久」

「え、ちょ、ちょっと待って直人！僕らだけじゃどうにも……」

僕が喋ろうとすると直人が耳打ちしてくる。

「いいか明久、黒李紗は腹がいっぱいになればもとに戻る…はずだ。だから時間を稼いでくれ」

「はずって、何ではずなの？」

「この前はそれで元に戻った。その残滓が塀がなかった俺の家だ」
塀がなかったのはこの人が原因だったのか……

「何をこそこそしている？」

「何でもないよ。さっさと作ってくるよ。みらいも手伝ってくれ」

「え？わ、私も？」

「ああ、ここにいるよりは安全だ。もとよりそのつもりで残したんだからな」

「そうだったんだ。分かったよ」

そう言って立ち上がるみらい。確かにみらいはここにはおいておけないよね。

「……おい、そのロリ巨乳」

「わ、私ですか？」

なんて呼びかたを…みらいも顔が引きつっているよ。

「直人にあまり近寄るな。分かったな」

「は、はひ！」

余りの威圧に舌をかんでしまったようだ。

「は、早く作ってきて直人！」

「ああ、行くぞみらい」

「うん」

バタンッ

そして屋上の扉が閉まる。

.....

き、気まずい

(き、気まずいよ秀吉)

(わ、わかっておるがどうしようも)

(.....しゃべったら殺されかねない)

ムツツリーニの言葉が冗談に聞こえないから不思議だ。

「.....う、ぐじう」

すると近くからうめき声だ。どうやら雄二が意識を取り戻したようだ。

「ててて.....あーこの野郎！よく.....もがもが」

「雄二イイイ！..ちよっとお話しようか！..!!」

なんてことをしようとしやがるんだこのクソゴリラが！

「……………今そのゴリラが何か言わなかったか？」

「な、何も言っておらんじゃ！気のせいなのじゃ！」

「……………ゴリラはしゃべれない」

「ふむ…それもそうか」

どうやら切り抜けたみたいだ。

（明久テメエどういっつもりだ）

（雄二、今の状況を教えてあげるから落ち着いて）

そして今の状況を雄二に伝えていく。

そしてまた沈黙が訪れる。

（明久、何時になったら直人は戻ってくるんだ？）

（わからないよ。取りあえず今は耐えるしかないんだ）

（取りあえず雄二はしゃべらんでほしいのじゃ）

（……………騒動のもと）

（どっという意味だそりゃ）

僕らがアイコンタクトで話していると遠野さんが口を開いてきた。

「お前たち。その薄っぺらい目で会話しようとする私にはもろばれだぞ」

「……ツツツ！!?」「」「」

なんてこった。アイコンタクトでも何をかわしているかわかってしまつのか。……今分かったのが幸いなんだろうな。

「……退屈だな、おいそこのゴリラ」

雄二、頼むから落ち着いてくれ。

「な、なんだ？」

よく耐えた雄二！グツジョブ

「退屈だ、直人が戻ってくるまで芸でも見せてみる。それしか能もないだろ」

「なんだ……ツツ！」

雄二が余計な事を言い出す前に目は積んでおく。雄二は明久に足を踏みぬかれ悶絶していた。

（（グツジョブ明久！））

二人からそんな事を言っている感じがした。

「使えないゴリラだな、それじゃあその男女、お前がやってみろ」

「わ、わしかの」

「そうだ」

秀吉の事は男女…まだ直人以外誰一人としてちゃんとした名前で呼んでないよ。

「そうだな……直人の真似でもしてもらおうか」

よし！秀吉は演劇部のホープ！しかも普段見ている直人なら再現率も高くできるはずだ！

「心得た。全力で演じさせてもらおう！」

演技をするためか気合いが入る秀吉。

それから暫く秀吉の演技が行われた。

「はあ、はあ、どうじゃ」

すごいよ。まさに直人のしぐさそのままだったよ。これなら李紗さんも。

「……直人とは似ても似つかんなへたくそが。それが今の貴様の全力か。情けない」

「……………グハッ！！」

「「「秀吉イイイ!!」「」」

なんてこった。秀吉がたった一言でノックアウトされてしまった。自分の演技をへたと言われてしまった秀吉は、屋上の隅にいつてうずくまってしまった。

「次は貴様だ変態、なにか特技を見せてみる」

「……お、俺？」

「そつだ。この中で一番の変態は貴様だろつ」

「……そんなことはない」

いや、それについては否定できないよムツツリーニ。

「で、何ができるんだ」

どうするムツツリーニ？

するとどこからかアルバムをもちだすムツツリーニ。

「ほつ、写真か。どれ、直人の写真を見せてみる」

「……これ」

写真を差し出すムツツリーニ。

「……これだけか？」

「…まだある」

「……ふむ……」

写真を見て息をする李紗さん。これはいったか？

「へたくそだな」

ビリビリビリ

そう言つと写真を破り捨ててしまふ李紗さん。ムッツリーニの写真をへたくそ呼ばわりするなんて……

「貴様の写真はどれもこれも直人が生かし切れていない。そこに残っている女の写真もそうだ。自分の邪念が入りせつかくの被写体の良さをつぶしている。お前の写真は紙くず以下だ！」

「……グハアア！！」

「ムッツリーニイイ！！」

ムッツリーニまで……これで犠牲者が二人目だ。ムッツリーニも隅にいつてしゃがみ込んでしまった。

(どうしよう雄二。どんどん犠牲者が増えていくよ)

(落ち着け明久、二人の犠牲によりあれは直人に関係があるものに興味を引かれるようだ。そこをつくんだ)

(なるほど、さすが腐っても神童だね)

(腐ってもはよけいだ)

「さあ、残りは貴様らだな」

「ふふ、僕らはさっきの二人とは一味違うよ」

「なめてたら痛い目に合うぞ!」

「ほう、では見せてもらおうか!」

「「いいだろう!」!」

この時直人に言われたとつりに、何もせず時間が立つのを待てばよかった。……いやどつち道遠野さんは僕らを誰一人として生かすつもりなんてなかったのだろう。

それから暫くして二人が戻ってきた。

「……予想はしていたがこうなったか」

「あ、アキ君……」

屋上に戻ってみると、秀吉とムツツリーニは心がへし折られていて、雄二はさっきより深く地面にめり込んでいて、明久は……

「ガチガチガチガチガチ……」

「あ、アキ君何があったの!?!取りあえず離して」

俺たちが入ってくるなりみらいに抱き着き震えだしている始末だ。

「……李紗、手は出すなと言っただろ」

「ふん、手は出してない、口を出したのだ」

「明らかに一人手を出されてる奴がいるんだが」

「気のせいだ」

平然と嘘つきやがった。

「…明久、何があつた」

「アウアウアウ…雄二が…ボーンで、ピューンだよ…ガチガチガチガチ」

それだけ言つとまたみらいに抱き着き震えだしてしまつた。

「なるほど」

「え！？アキ君なんて言つたの？」

「雄二が俺の弁当を自分のだと偽って李紗に与えて、半殺しにあつてそれから記憶がいまいだそつだ。おそらく余りの恐怖に体が耐えきれなかつたんだろつ」

「みんな大丈夫なの？」

みらいが心配そうに聞いてくる。

「ああ、まだ黒李紗と会って時間も無い、明日には綺麗さっぱり忘れてるよ」

「そう、よかった」

「明久も明日までは引っ付いてると思うぞ」

「ええ！？何とかならないの？」

「無理だな？これでも被害が少なかった方だ。そのために耐性が低そうな三人を先に返したんだからな」

こゝ、これでも被害が少ないの…それよりもアキ君離れてよ／／／

「直人、早く持ってこい。あいつ向けの料理は私には合わん」

「はいはい、ホント正反对だな。なんで好物がジャンクフードの類なんだよ」

「しらん。なぜか舌に合うのだ」

みんながこんな状態の時にのんきな。

それから暫くすると満腹になったのか李紗ちゃんは眠ってしまった。どうやらもとに戻った見たい。

「…処で直人くん。前に起きた時はどうなったの？」

「ああ、その時は迷惑な押し売りが来ていてな、そいつが暴力的な
のかかたくなに断る李紗の髪のを引つ張ってな」

「それでその人は？」

「……精神病院送りにされたよ。全治数週間になつてな」

この時ホント直人くんがいてよかったと思つたみらいだった。

その後皆はみらいが呼びに行つた鉄人の車に乗せられ家に送り届け
られた。直人が言つたとうり明久は翌日になるまでみらいの事をは
なさず、朝大騒ぎになつたのは言うまでもない。

ちなみにやられた人たちは、心は立ち直つたが黒李紗の事を忘れる
ことはなかった。これで少しは耐性のある奴ができたと思う直人で
あった。

黒李紗参上！惨劇の時間（後書き）

黒李「ふ、久々の外だったな」

「秀吉ファンやムッツリーニファンの方々、その他もろもろすみません！！」

霧「謝るくらいだったら書かなきゃいいのに」

未「アキ君離れて」

明「ガチガチガチガチ」

直「はあ、こんな小説が見放さないでやってほしい。これからもよろしく頼む」

文月学園清涼祭 プロローグ（前書き）

文月新聞

『僕が小さなころ、祖父がよくこう言っていました。“明久。泥棒でも何でも良い、一番を目指して精進なさい”今、僕は天国にいる祖父にこの事を教えてあげたいと思います。じいちゃん……これで、良いかい？』

以上

『女装が似合いそうな男子生徒ランキング1位』

『こいつにだけはバカと言われたくない生徒ランキング1位』

『モテそうな男子（同性愛編）ランキング1位』

の3冠を達成した、吉井明久さんのコメントでした。

ちなみに、予定していたもう一名

『学園一危険な生徒ランキング1位』

『こいつだけにはかわりたくないランキング1位』

『学園一嫌われものランキング1位』

その他もろもろの危険ランキングを総なめにした霧乃直人さんのコ

メントは、取材班がたどり着く前に何ものかにづたぼろにされたため、そして新聞部が何者かの襲撃に会ったため永久に中止。

ちなみにその時偶然学園を休んでいた私だけが助かった。遺言なのかセイバーという文字が残されていたが、意味はいまだに分かっていない。

文月学園清涼祭 プロローグ

『……雄二』

『なんだ？』

『……如月ハイランドって知ってる？』

『ああ。今、建設中の巨大テーマパークだったか？ もうすぐプレオープンらしいが……』

『……とても怖い幽霊屋敷があるらしい』

『廃病院改装したらしいな。面白そうだよな』

『……日本一の観覧車とか』

『かなりデカいらしいな。聞いた話だけでも凄そうだ』

『……世界でも三番目の速さを誇るジェットコースターも』

『速いだけでなく、いろんな方向に向いたり、ぐるぐる回ったりするんだっただか？ どんなモンか知らんが、想像するだけでもワクワクするな』

『……ほかにも面白いものがたくさんある』

『なるほど凄いな。きっと楽しいぞ』

『……それで、今度そこがオープンしたら、私と』

『ああ、お前の言いたいことはよくわかった。そこまで行きたいなら……』

『……うん』

『今度友達と行って来いよ』

『……握力には自信がある』

『ぐうおあああっ!?!ア、アイアンクローはよせえっ!?!』

『……私と雄二の二人で、一緒に行く』

『オープン直後は込み合ってるだろう?!俺はイヤだからなぐうおあぐあああっ?!?!』

『?……それなら、プレオープンのチケットがあったら行ってくれる?』

『プ、プレオープンチケット?相当入手困難らしいぞ?おー痛え』

『……行ってくれる?』

『んー。そうだなー、手には入ったらなー』

『……本当?』

『んあー、ほんとほんと』

『……それなら約束。もし、破ったら……』

『おいおい、俺が約束破るように見えるのか？翔子』

『……この婚姻届けに判を押ししてもらおう』

『天地神明に掛けて必ず約束を守ろう』

桜色の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始める季節。文月学園では、新学年最初の行事〈清涼祭〉の準備が始まりつつあり、所々で活気があふれている。

お化け屋敷、喫茶店、展示会、などなど、どのクラスも力を入れている。

そして、Aクラスの設備を恋心を利用するという汚い手段を駆使して略奪した我等Fクラスはというと……

「それじゃあ何か意見がある人……」

教壇にはFクラスの女神、星野未来が立っていた。

「……星野よ、やはりワシ等だけでは無理ではないかの？」

「だって…皆外いつちやたんだもん」

教室内には未来、秀吉、姫路、美波といった女性メンバーしか残っ

ていなかった。……え美沙？あの人が残っているとでも？

そして我等が代表坂本雄二と、今が楽しければそれでいい の笹倉
美沙達Fクラス残りのメンバーはというと……

「プレイボール」

……野球をしていた。

「吉井！ こいつ！」

「勝負だ、須川君！」

「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！」

「言ったな！意地でも打ち取ってやる！」

そう言い雄二からの指示を待つ。

<かあぶを……ばったあの……あたまに>

<すこれえとを……ゆう君の……股間に>

さすが美沙だ。Aクラス並の成績を持っているだけはある。僕は美
沙の指示どつりに球を投げた。

ガスッ

見事命中だ！

「あああ明久あああ！！！！何故だあああ！！！！！！」

股を抑え悶絶する雄二。

「ナイスコントロ〜ル」

「てめえの仕業か！！」

「いや〜こっちの方が面白いと思って」

「全然面白くねえ！！」

「そんな怒らなくてもちゃんと治療してあげるよん ほら痛いところ出して」

なん……………だと……………

「だ、出せるわけねえだろ！！」

「……………雄二…浮気はよくない」

「翔子！？お、落ち着け！俺は無実なん…がああああ！！頭蓋がああ！！！！」

「……………吉井！俺にもストレート一発！！……………」

美沙の一言でこの始末。相変わらずだなこのクラスも。

『お前たち！清涼祭の準備もせずは何をしとるかあああ！！！！』

遠くから鉄人の声が聞こえてくる。

「くっ?!鉄人かつ?!」

「みんな!散れっ!」

「せっかくのチャンスを……」

散り散りに逃げていくクラスメイトたち。俺も戻るとするか。

それから五分後、全員鉄人に捕まりクラスに連行された。

「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが……」

野球が中断されて皆が戻ってきて、坂本くんがやる気のなさそうに清涼祭の準備を……

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せる。誰かやりたい奴いるか?」

全部丸投げした。なんだかまったくやる気がなさそう。試験召喚戦争の時はあんなにやる気出してたのに、こっぴどい行事には興味ないのかな?

「はいはい　ここはもちろん私の出番　みんなを　まとめて　やっ
たるぜい」

美沙ちゃんが坂本くんとは対極的にノリノリで拳手をした。

「それじゃあ美沙に任せるぞ。サブとして明久手伝え。異論は明久以外認める」

「なんでさー!」

どうやらアキ君がサブをやるのは決定事項のようだ。

「じゃあ決まりでいいな？」

「」「」「異議なし」「」「」

「うう…なんで僕が。直人変わってよ」

「ん〜俺もあまりやりたくはないんだが、まあ手伝わただけなら」

「やった やっぱり持つべきものは友達だね」

「そんじゃアツキ〜にナオツチ 前に出てくるさ」

「わかった」

「今度はナオツチか……」

アキ君が普通にたち、直人くんがやれやれという顔で立ち上がった。

「それじゃあ意見のある人手を上げよう」

実行委員になった美沙ちゃんが前に立ち皆に意見を求めていく。二人は板書をするようだ。

.....

なかなかアイデアが出ない。私もなにかいいもの考えないと。

「おややく皆思考タイムかなん？それじゃあアイデアが採用された人に……」

「……人に？」

「美沙ちゃんがホッペにチューしてあげる

その瞬間クラスメイト（男子）の目が輝いた。

『……写真館』

『ウエディング喫茶なんてどうでしょう？』

『中華喫茶なんてどうだ？チャイナ服とか着るんじゃないかと、食べ物でせめて……』

上から順に土屋くん、瑞希ちゃん、須川くん……だっけ？が意見を言い始める。瑞希ちゃんは土屋君が言ったからつられてって感じだけど……一体皆どれだけ欲望に忠実なんだろう？須川くんはまだなにかうんちく語ってるし。

『お化け屋敷だ！』

『いや！焼きトウモロコシを売ろう！』

『簡単な劇をやるう！』

『小さいギャンブル場を作ろう!』

他にもどんどん意見が挙げられていく。

「いいね いいね どんどん出そう 板書の二人も頑張つて」

意見がどんどんあげられていくから板書（ディスプレイなので打ち込み）の二人がものすごく大変そうだ。私も手伝った方がいいかな？

「明久！俺がクラスの右半分を担当するからお前は左な！」

「わかった」

見事な連携で意見が次々と板書されていく。

直人くんの方は……

・焼きトウモロコシ屋 ・お化け屋敷 ・シヨート演劇などが

アキ君の方には……

・写真館 『秘密の覗き部屋』 ・ウエディング喫茶 『人生の墓場』
・中華喫茶 『ヨーロッパ』 などなどが

アキ君の方は何が何だか分からなくなってるよ…最後のなんて、中華なのかヨーロッパなのかめちゃくちゃになってるよ。

『ずいぶん進んでいるようだな。どんな案がでたんだ?』

すると教室の扉が開いて西村先生が入ってきた。この状態だけ見たら進んでいるように見えるね。

「今はこれだけ拳がってます」

先生が入ってきたため一時意見が中断され、アキ君がディスプレイをさす。

「……………ふむ」

先生がディスプレイを見てため息をつく。

「補習の時間を倍にした方がよさそうだな」

と言い、クラスの皆が抗弁します。

『せ、先生！ それは違うんです！』

『そうです！ それは吉井が勝手に書いたんです！』

『僕らがバカなわけじゃありません！』

みんなアキ君だけのせいにするなんて酷いよ。

「馬鹿者！ みつともない言い訳をするな！」

西村先生が一喝する。さすが先生！こんな理不尽な言い訳を許すわけ……………

「先生は、バカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だ行って

いるんだ!」

「先生。そうじゃないと思います」

余りの扱いに思わず言っちゃた。さっきの感動を返してほしい。

「まあまあ宗ちゃん 意見が出るのはいい事いい事 真面目にやっている証拠だよん」

「真面目にやっているのはいいが、笹倉、お前はいい加減教師に敬語を使え」

「はいはい すみません西村鉄人先生」

「鉄人を取れ!!」

美沙ちゃんは相変わらずだね。

「それじゃあ意見も出そろったとこだし…私が独断で決めちゃうよん」

美沙ちゃんの言葉に若干不満が出る。さすがにそれはやりすぎじゃないかな？

「え、それじゃあ自分の意見がいい人手を挙げて」

ザッ

クラスメイトが一斉に手を挙げる。

「ね これじゃ決まらないから私が選ぶの 安心して一番面白そうなのにするから」

美沙ちゃんがそう言うところのままでは決まらないのがわかったのか 皆がうなずき祈りを始める。

『神様！どうか俺の案を！』

『一生のお願いを使います！どうか俺の案を』

『いや俺の案を』

『いや俺のを！』

クラス全体から神様や一生のお願いをし始める。そこまですることなのかな？

「それじゃあレッツ お選びタイム」

美沙ちゃんがディスプレイを操作して没の案を消していく。

『ああ！！俺の案が！！』

『畜生！畜生！』

『神なんて大嫌いだ！！』

『神のバカ野郎！！』

消されたと思われる人たちが次々と悲痛を上げる。

そしてとうとう最後の二つが残る。最後の二つは

・中華喫茶『ヨーロッパアン』と・コスプレ喫茶『華麗に七変化』
が残っていた。

中華喫茶は須川くんが言ったのだけど、もう一つの方は誰だろうか？

「はいはい 泣いても笑ってもこれが最後 ラストチョイス！ス
タート」

すると二つの案がランプで照らされていく。一体いつの間にあんな
設定したんだろう？

そしてランプが止まり一つの案が残った。私達の出し物は……

・コスプレ喫茶『華麗に七変化』に決まった。

『ちつくしよおおおお！！！！』

決定と同時に聞こえる須川くんの絶叫。

「しゃらるる 大決定 Fクラス清涼祭の出し物はコスプレ喫茶『
華麗に七変化』これに決まり それでこれは誰の案？約束どおり、
美沙ちゃんのキスをプレゼント」

ホントにする気だったんだ美沙ちゃん。一体誰の案なんだろ？

「…えっと、僕」

そう言っておずおずと手を挙げたのは……アキ君？

『これより異端審問会を始める！』

「……始める……」

『罪状！吉井明久は笹倉美沙とキスをするという不埒な行為を行おうとした。これは事実にはおおいまいか？』

「……そおありません……」

『よし！拷問してから、死刑……！』

「ちょっとまって！まだ何もしてないよね！？それでそこまでの刑になるの！？」

「……死刑！死刑！死刑……」

だめだ！まるで話を聞いていない。もはや一種のコーラスのようにも思えてくる。

「くっ……そうだ！今は鉄人がいたんだ！助けてください先生！可愛い生徒の命の危機ですよ！」

「テツツーなら数分前に出て行ったよん」

なんてこった。万策尽きたか……

「ほらほら皆落ち着いて みんなで決めた事なんだからこれで怒るのは筋違い その女の子達も殺意を引っ込めよう」

「どうやら助かった見ただけで、美波はともかく最近姫路さんもFクラスの空気に侵されつつあるようだ。クラスは良くなったのに環境はある意味ではまるで変わっていない。」

「ん〜でも美沙ちゃんがキスしちゃうと皆の不満爆発しそうだね それじゃあアッキーには悪いけどここは一步譲ってヒデツチのキスで」

「なぜそこでワシを出すのじゃ美沙!？」

「え〜女の子がダメならヒデツチしかないじゃん」

「ワシは男なんじゃ! 明久だってワシのキスなんぞ……」

「秀吉: 優しくしてね」

「何を言っておるのじゃ明久!？」

「お願い秀吉! もう秀吉以外に道はないんだ! それ以外の人としての僕の命は……」

「凄まじい見幕で秀吉に迫る明久。 どうやら女の子のキスよりも命が大事なようだ。」

「明久、むしろ状況は悪化しているぞ」

「え?」

直人がそう言うので後ろを振り返ってみると、女の子二人から凄まじい殺気が伝わってくる。なんで！どうして！なんでこうなるの？

「も〜ミナミ〜もヒメツチもわがままなんだから それじゃあ二人のどっちかがする？」

何を言っているんだ美沙は。二人がそんな事をするわけが…

「な、なんでウチが……できるわけないじゃない！」

「あ、明久くんにき、き、き、キスですか！？で、できません！！！」

……わかってたけどなんか悲しい。

「それじゃあやっぱりヒデツチに……」

「それはダメ<ダメです>！！」「」

「も〜わがままだな〜。それじゃみらリンね はいけって〜」

「ま、まって美沙ちゃん。何を勝手に……」

「問答無用 ていや」

「わわっ！……」

みらいがこっちに向かって倒れこんでくる。

ばたん！！

「因で……」

「……しるか！！姫を傷物にした貴様は生かしておかねえ……！」

「……」

「……逃げる……！みらい、ホントにゴメン……！」

「……逃げたぞ！追え追え……！」

「ア……逃げられるとは思ってないわよね？」

「少しお仕置きが必要なようですね明久くん？」

クラスのほとんどが明久をおって出て行ってしまった。

「……美沙、やりすぎだ」

「てへ やっちゃったぜ」

「やっちゃったじゃねえよ。おいみらい、大丈夫か？」

「……」

「完全にトリップしてるな」

「幸せそうな顔してる このみらリンもまた可愛い」

そう言ってみらいを抱きしめる美沙。しかしみらいにリアクションはない。

「…んゝなんの抵抗もしないみらリンもまた」

「おかしな事するなよ。しかしどうしたもんか。あれは俺でも止めるのー苦勞だぞ」

普段の五倍は暴走しているクラスメイトに直人も厄介だという。

「大丈夫 こういうときには」

「ときにはどうするのじゃ？」

「鉄人二十八号の出番だよん」

その後騒ぎを嗅ぎ付けた鉄人が明久たちを見つけて連れ帰ってきた。みらいは皆が戻ってくる頃にはトリップから覚め。顔を真っ赤にしているのだしたと。

すみません

すみません

すみません

すみません

すみません

すみません

すみません

すみません

すみません

すみません

すみません

すみません

すみません

すみません

すみません

すみません

すみません

すみません

お知らせ

みなさんお久しぶりですカイトです。

この度は更新が停滞してしまったことを謝罪したいと思います。

そしてこの小説を見直してみte思ったのですが第30部から第36部までを一旦削除して書き直したいと思います。

勝手なことをしてしまい申し訳ないですがどうか理解してください。

書き直しが終了次第投稿再開致します。

それと今夜9時ごろ新しい小説を投稿致しますのでそちらの方もどうか見てみてください。

書き直しが終了次第このお知らせは削除したいと思います。

スケッチと学園長（前書き）

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください

「あなたが今欲しい物はなんですか？」

姫路瑞希の答え

「クラスメイトとの思い出」

教師のコメント

成程、お客さんの思い出になる様な、そういった出し物も良いかも
しれませんね。

写真館とかも候補になりうると覚えておきます。

土屋康太の答え

「Hな本（訂正）成人向けの本」

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか？

吉井明久の答え

「皆と楽しめる時間」

教師のコメント

模範的な解答ですね。

霧乃直人の答え

「平和な日々」

教師のコメント

君がつかれるとは意外です。

霧乃直人のコメント

「それはどういう意味ですか？」

スケッチと学園長

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください

「あなたが今欲しい物はなんですか？」

姫路瑞希の答え

「クラスメイトとの思い出」

教師のコメント

成程、お客さんの思い出になる様な、そういった出し物も良いかも
しれませんね。

写真館とかも候補になりうると覚えておきます。

土屋康太の答え

「Hな本（訂正）成人向けの本」

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか？

吉井明久の答え

「皆と楽しめる時間」

教師のコメント

模範的な解答ですね。

霧乃直人の答え

「平和な日々」

教師のコメント

君がつかれるとは意外です。

霧乃直人のコメント

「それはどういう意味ですか？」

昨日の騒動から一日が立ち、今日もFクラスのメンバーは清涼祭の準備に取り掛かるうとしていた。

「今日から本格的な準備に取り掛かっていくよん みんな用意は言
いかなん？」

「……イエス！姉さん！！」

クラスメイトたちは今日もノリノリなようだ。

「それじゃあ今日からは三班に分かれて貰うよん 教室セッティン
グ係は雄くんの所、調理係はツッチーの所、問題処理班は、メンバ
ー決めてあるから呼ばれたら私の所に来てねん それじゃあ散！」
「……了解！！」

美沙の掛け声とともに散らばって行くクラスメイト達。雄二が手伝
つているのは以外だったな。

「チューモーク これから処理班呼ぶよん まず問題解決係として
なお君」

……俺かよ。

「ほらほら返事は？」

「はいはい」

「よろしい 次はなお君サポート係としてアッキー」

「ぼく？」

調理班に向かっていた明久が振り返りこちらに来る。

「最後にマスコットとしてみらリン」

「なんでマスコット!？」

マスコットと言われて怒りながらやってくるみらい。

「それで何をやるんだ」

「うむ 直くとアッキーには他のクラスからスケットを連れてきてほしいのだよ」

「スケット？でも何で？」

「ほらね、うちもコスプレ喫茶に決まったわけだしねもう少し花が合った方がいいと思うのだよ」

確かにこのままだと男だらけのコスプレ喫茶になりそうだな。

「まあ私的にはそれでもありかな〜って思うんだけどね」

俺たちからしたら大問題だけどな。

「だから他クラスから女の子見繕ってきてくれたまえ」

「勝手なことを…それで、美沙は手伝ってくれるのか？」

「あは」

「聞くだけ無駄だったな、いくぞ明久」

「う、うん」

「頑張ってきてね〜 せめて七変化 なんだから最低二人はよろしくね」

二人ね…きつと五人の中には秀吉も入ってるんだろうな。

「行ってらっしゃい二人とも。……ところで美沙ちゃん私は何をしたらいいの？」

「え？みらリンはマスコットらしく私の欲求の処理を……」

「私も二人手伝ってくる」

「ああ〜みらリンが行ってしまう〜カムバックマイエンジェル〜」

結局三人で他クラスにスケットを申し出に行くことになった。

「それでどこのクラスから行く」

「一先ず知り合いがいるクラスじゃないと無理だよな」

みらいの言つとおりなんだが、それだとすでに三クラスに絞られる
んだけどな。

「まあ下のクラスからでいいだろ、Cクラスに向かう」
Cなら李紗もいるし交渉しだいならいけるだろう。

「Cからなの？Dクラスの清水さんなら喜んで手伝ってくれそうだ
けど」

確かにそうなんだが。

「それをすると島田に恨まれかねんからな」
俺も無駄に恨まれたくはない。

「あ、そっか。美波の怒りを買うのは良くないね」

「それじゃあCクラスに行こう」

そして俺たちはCクラスへと向かった。

「と言うわけで誰か人材を貸してもらいたいわけなんだが」
現在はCクラス代表の小山優香と交渉の最中だ。

「人材ね：まあ良いわよ。試験召喚戦争の時には迷惑をかけてしま
つたわけだし。ただし一人だけで構わないかしら？」

「ああ、そつちにも準備があるし一人で構わない」

無理に頼んでクラス間の仲が悪くなってもかなわんしな。

「それでは私が行きましょう」

「遠野さん。そうねそれじゃああなたに任せようかしら」

「それじゃあ借りてくぞ」

一人目は楽に手に入ったな。

「ところで直人、私は何を手伝えればいいのですか？」

「一先ずFクラスにいる美沙に一通りの事を聞いておいてくれ。俺
たちは他にも交渉を続ける」

「わかりました。それでは先に行っていますね」

李紗とはCクラス前で別れ次のクラスに行くことにした。

「これであと一人だね」

「次はめんどくさそうだけどな」

「そっか、Bクラスの代表は……」

そして俺たちはBクラスへと向かった。

「お前たちに手を貸せだど？嫌だね、なんでお前たちなんかに手を貸さないといけないんだ」

そう、Bクラスの代表はあの根本恭二だ。素直に手を貸してくれるはずがない。

「そこを何とか頼む。このとうりだ」

直人がこんなキノコ頭に頭を下げるなんて、明日は雪かな？

「ああ？よく聞こえないなあ？人にものを頼むときは土下座くらいしないとなあ？」

だんだん調子にのってくる根本くん。弱みを握られているのを忘れていたのかな？

「……仕方ない、穩便に事を済ませようと思ったんだが、明久、美沙から預かったあれを出すんだ」

「了解、はい直人」

そうそう、美沙からこれを預かってたんだよね。

「な、何のつもりだ？」

少し動揺を見せる根本くん。ふんっ！もう遅いよ。

「さあ根本、こいつを清涼祭当日校内にばら撒かれなくなったら、人員を一人かすんだ」

「そ、それは！？」

直人が取り出したのは試験召喚戦争時に手に入れた、“根本恭二写真集『生まれ変わった私を見て』（美沙命名）”だ。根本君の女装写真が詰め込まれた根本君にとっては墓に一緒に持っていくほどの代物だ。

「さあどうする？貸すか貸さないか、俺たちはどっちでもいいが」
「わ、わかった！貸す、何人でも貸すからそれだけは許してくれ！」

さつきまでの態度から一変して卑屈な態度になる根本君。もはや自分が土下座をしている。

「そうか、それじゃあ影野を借りていくぞ」

「わ、わっちか？」

「ああ、喫茶店で働いてるんだから丁度いい」
確かにね。

「根本いいか？」

「あ、ああ、すきにしてくれ」

「それじゃあ借りる、ありがとよ」

そう言うとBクラスから出ていく僕ら。

「それで直人、わっちはどうしたらいいんじゃない？」

「取りあえずはFクラスにいる美沙の所に行ってくれ」

「わかった。それでは先に行っている」

そして影野さんは消えていった。

「さて、一先ずノルマはクリアだけどどうする直人？」

「もう私たちも戻る？」

「……いや、一様Aクラスにも行こう。人数は多い方がいいだろ」
直人の意見で最後にAクラスに向かう事にした。まあもし貸してくれなくてもノルマは超えているし大丈夫だね。

「……貸す……むしろ私に行く……」

「そ、そうか」

Aクラスは以外にも即決してくれた。というか霧島さんの迫力が半端ない。

「しかしいいのか？代表が行ってしまったも？」

確かにそうだ。まとめやくの代表が行ってしまったてはクラスもまとまらないだろう。

「構わないよ」

「久保くん!？」

すると僕の後ろから突然久保くんが出てきた。何時の間に回り込んだんだろう？

「いいのか？代表が行っても？」

「ああ、僕らのクラスはほとんど準備が終わっているしね。代表がいなくても何とかなるだろう。それにFクラスの設備だ、お客も余り来ないだろうしね」

それを言われるとちよつと辛い。

「…なんかゴメン久保くん」

「よ、吉井くん!？そういうつもりで言ったわけではないんだ!どうか誤解しないでくれたまえ」

「あゝそれで代表の霧島を借りることはいいんだな？」

「あ、ああ大丈夫さ。他にも女の子を借りていてもいいよ。この設備でやるよりはそっちの設備でやった方がやりがいもあるだろう」

「……ゴメン久保くん」

「だ、だからそういう意味ではなくてね……」

明久はFクラスゆえ脾肉に敏感なようだ。

「他ね……助かるが来てくれる人いるか？」

.....

まあいいだろうな、俺嫌われてるはずだし。

「私行つてもいいよ」

すると一人の女子が名乗りを挙げた。

「…聖花か…いいのか？」

「いいよ。友達が困ってる時は手を貸すよ。いいよね久保くん」

「あ、ああ問題ない」

何だか以外そうな顔してるな。まあ俺が優等生で通っている聖花と知り合いなだけでも驚きなんだろうけどな。

その後俺たちは霧島と聖花をつれてFクラスにもどった。

「さあ集まってくれた女子集 これから頑張つて盛り上げていくぜい」

『お〜』

「なんでワシまで……」

戻ってくるなり美沙が女子全員集めて話し合いを開始する。

「てめえ！なんでよりもよつて翔子を連れてくるんだ！」

「五月蠅いな。いいじゃないか。大好きな霧島のコスプレが見られるんだから」

「そつだよ雄二、一体なにが不満なのさ？」

「全部だ！！」

雄二は相変らずわがままな……

「所で気になつたんですか」

「何かねスケツトAくん？」

「李紗です。まあそれはおいておくとして、あなたは他のクラスから人員を借りることの許可を取つたのですか？」

そついえばそつだよね。勝手にクラス間のやり取りしてちゃ不味いよね。

「……大丈夫 そんな時のための問題処理班 カムヒヤ〜なお君」

「……今度は何の用だ？」

直人が嫌そうに調理係の所から出てくる。

「次の任務は学園長の所に行って他クラスからのスケツトを許可を

取ってくるのだ」

「許可ね…それだと俺よりクラス代表の雄二の方がいいんじゃないか？」

「それもそだね それじゃあゆう君レッツゴ」

「なんで俺がいかなくちゃ…いやわかった、行ってこよう」

雄二のわりに妙に素直だね。……まさか！！

「ちよつと待った。もしかして雄二、霧島さんから離れたくてわざと不許可になるようにするきじゃないだろうね」

「ハハハ、マサカソナワケナイダロ」

「確実に明久の言ったとおりだな」

「……雄二…わかってる？」

そういつてスタンガンをちらつかせる霧島さん。

「お、落ち着け翔子。わかったからそのスタンガンをしまえ」

やっぱり雄二に言うことを聞かせるには霧島さんが一番だね。

「もし不許可になったらアルミホイル百噛みね」

……少しは遠慮してあげたほうがいいかな。

「心配だねん…ねんのためにさっき呼びに行ってくれた三名ついて行ってくれい」

「分かった」「うん」「了解」

こうして僕ら四人は学園長室へ向かった。

『……賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランド……』

学園長室前まで来ると、部屋から誰かが言い争っている声がきこえてきた。

「何だか中から声が聞こえてくるよ」

「そうか、学園長が居るとわかったんだから、入っちまおうぜ？」

「そつだな」

「失礼しまーす」

「ちよつと三人とも…」

みらいの静止も聞かずに扉を開け中に入っていく三人。

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

確かに返事はまたなつかたけど、生徒をガキ呼ばわりするあなたもよっぽど失礼だと思う。

そこにいたのは、長い白髪と妖怪じみた容姿が特徴の藤堂カヲル学園長。試験召喚システム開発の中心人物である。

「やれやれ、取り込み中だと言うのに、とんだ来客ですね。これでは話を続ける事も出来ません……まさか、貴方の差し金ですか？」それに相對していたのは、鋭い目つきとクールな態度で1部の女子生徒に人気が高い、竹原教頭。メガネをいじりながら、学園長を睨みつける。

「バカを言わないでくれ。どうしてこのアタシがそんなせこい手を使わなきゃいけないのさ？ 負い目があると言う訳でもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠しごとがお得意の様ですから」
なんかドロドロした話みたい。

「さつきから言っているように、隠し事なんてないね。あんたの見当違いだよ」

「……そうですか。そこまで否定されるなら、この場はそういう事にしておきましょう」

教育現場にはふさわしくない言葉がどんどん出てくる。…私たちもしかして来ちゃいけない所に来ちゃった？

「……………ふむ…」

何だか直人くんがさつきからあたりを見回している。一体どうしたんだろ。

「んで、ガキ共。アンタらは何の用だい？」

「今日は学園長にお話があつてきました」

「アタシは今、それどころじゃないんでね。学園の経営に関する事なら、教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀つてモンだ。覚えておきな」

礼儀的には当然のことだけどなんだか負に落ちない……

「失礼しました。俺は2年F組代表の坂本雄二」

「私もFクラス星野未来です」

「ぼ……そしてこいつらが学園を代表するバカと悪魔です」ちよつと……！」

アキ君の言葉に重なるように坂本くんがいう。なんでわざわざこんなことを……

「ほう……そうかい。あんた達がFクラスの坂本と星野と吉井と霧乃かい」

「ちよつと待つて学園長！僕たちはまだ名前を言つてませんよね！？」

「俺の悪評も広まったもんだな……」

怒るアキ君と切なそうな直人くん。

「あんたにはある意味で有名だからね。吉井はともかく霧乃はよく噂を聞くよ」

きつとそれはAクラスを倒しちゃったからだね。

「それに霧乃と星野の召喚獣は特殊だからね。よくこつちもデータをとつてみるのさ」

なんか観察されてるみたいで嫌だな。

「気が変わったよ、話を聞いてやるうじゃないか」

よかった。これでやつと話が始まるよ。

スケッチと学園長（後書き）

ようやくこちらにも復帰です。これからもう少しずつ投稿していきます。

それとすみませんができたら章の削除の仕方を教えてもらえませんか？

学園長との取引

「気が変わったよ、話を聞いてやるうじゃないか」

「ありがとうございます」

学園長がそう言い話を聞いてくれるていになった。まだ少し納得はしてないけど話を聞いてもらえるならいいだろう。

「礼なんか言う暇があったら、さっさと話しなウスノロ」

「わかりました」

さつき礼儀云々言つてたの誰だっけ？それにしても雄二がこれほど我慢強いなんて知らなかったよ。

「われわれFクラスはAクラスに勝ち設備を交換したことはご存知ですね」

「当たり前だろ。まったく面倒なことしてくれたもんだよ」

「それですね。設備は変わりましたが今回の清涼祭での人員不足に悩まされてね」

「不器用そうな男どもが集まった暑苦しいクラスだからね」

今のセリフはあんまりだと思ふ。

「それで他クラスから人員を借りるのを許可していただきたいのです」

「あんたらみたいなのに手を貸してくれる輩がいるのかね？」

さつきから学園の長としてはあり得ない言葉が連発される。それにしてもよく雄二は我慢してるな。

「いえいえ、妖怪じみて誰も近寄ってこないあなたと違って我々のクラスを手伝ってもいいという方がいらしているんですよ」

あ、なんか言動がほころんできた。

「そういう訳なのでとっと許可しやがれ毒舌クソババアという訳です」

うん。それでこそ雄二だ。

「ちよつと坂本くん！？なんてこと言ってるのー!!」

「……ふむ…丁度いいさね」

今学園長なんて言っただら？

「あの、学園長……？」

もしかして相当怒ってる？

「よしよし、お前たちの言いたい事はよくわかった」

「え？それじゃ、許可して貰えるんですね！」

よかった。案外話しの分かる人じゃないか。

「却下だね」

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」

「アキ君!!」

くっ、なんでみらいはこんな妖怪を擁護するんだ。

「あの学園長…二人が粗相をしたのはすみません。でもどうか許可

してもらえませんか」

みらいが学園長に頭を下げる。なんだか罪悪感が……

「ダメならダメでその理由を聞かせてもらおうか妖怪」

「直人くんまで!？」

そうだ、理由を聞かないと納得なんてできるわけがない。

「まったく、このバカ共が失礼しました。どうか理由をお聞かせ願
えますか、ババア」

「お前よりは失礼してないよゴリラ。すみません妖怪、このゴリラ
まだ言語を覚えてたてなんですよ。なので理由をお聞かせください」

「ゴリラの失礼は謝りますのでどうか理由をお聞かせくださいババ
ア」

「あんたらはホントに理由を聞かせて欲しいのかね？」

「すみません!!」

みらいがペコペコ頭を下げる。何か間違った？

「まあ、そのチッコイのに免じて話してやるうかね」

素直に話したらいいのに。

「簡単に言うとは今はそんな事を許可してる暇がないんだよ。お前たちがしてくれた戦後処理で手がいっぱいなんだよ」

確かにみらいが最近よく鉄人に呼び出されてるけどそんなに忙しいの？

「遠回しにいうのは止めたらどうだ？」

「は？何言ってるの直人？」

「ちよつと黙ってる明久」

そう言うと直人は部屋の隅の方に行き壁を殴りつけた。

「ちよ、ちよつと!？何してるの直人くん!？」

「…お、あつたあつた」

直人が壊した壁の一部から黒い小型の機械が出てきた。

「これは…盗聴器？」

「なんでそんなものがここに」

「その理由はその妖怪が知ってるだろ。さっきの教頭との会話とも関係してるだろうしな」

そう言いながら直人は取り出した盗聴器を握りつぶした。

「……もうそいつはないんだろうね？」

「ああ、一先ずはこれだけしかないはずだ」

「そうかい、誤魔化すのは無理そうだから言うけどね、今回の清涼祭で試験召喚大会があるのは知ってるだろ」

確か全学年でのタッグマッチの召喚獣バトルだったっけ？

「その賞品に問題があつてね？」

「問題？」

「優勝賞品は知ってるかい？」

「たしか…白銀の腕輪と如月グラウンドパークプレミアムオープン
ブレイチチケットだったか？」

「なんだと!？」

なんか雄二が驚いているけど今はほつとこつ。

「そうだよ。その優勝賞品のチケットに何か問題があつてね」

「問題？」

「ちよつと良からぬ噂を聞いてね。出来れば回収したいのさ」

「回収?それなら、商品に出さなければ良いじゃないですか」

「そうできるならしたいさ。けどね、この話は教頭が進めたとはい
え、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。今更覆す
訳にはいかないだよ」

「契約する前に気付いてくださいよ、学園長なんだから」
もつともな話だね。

「うるさいガキだね。腕輪の開発で手一杯だったんだよ!それに悪
い噂を聞いたのはつい最近だしね」

「……で、それだけか？」

「他に何かあるというさね」

「例えば…腕輪の欠陥とか」

直人くんの言葉に学園長が反応する。

「……あなたはホントに鋭いやつだね。やり難いつたらないよ」

「だいたい予想はつく。あんたみたいな妖怪がたかが良からぬ噂程
度でチケットを回収しようとするなんて思わないし、それにこの腕
輪の件もあるしな」

そう言つて虚勢の腕輪をちらつかせる直人くん。

「そういえばあんたらがその腕輪を持つているんだつたね」

「大方白銀の腕輪は黒金の腕輪の強化版つてどこか？」

「そうさね。片方は召喚フィールドの作成で、もう片方は点数を分割して副獣を呼び出せるのさ。あの時のデータをいかして少しはましになつただけどね、まだまだ完成とわいかないんだよ」

「それつて…僕ら実験台にされてたつてこと？」

「まあそうだな。俺たちの腕輪は無事だったが雄二たちの腕輪は壊れた。もし逆だつたらこつちの腕輪が賞品になつてたんじゃないか？」

「話を進めていいかい」

「ああ」

「さつき言つたとおりまだ腕輪には欠陥が残つている。フィールド作成の方はBクラスのレベルあたりまでなら耐えられるようになつただけどね、もう片方は平均点程度、もしくはそれ以下でも暴走してしまつかもしれないんだよ」

「なるほど。それで俺たちのお願いを渋つて明久たちあたりに召喚獣大会に出場させて、チケットと回収する代わりに許可をするつていう提案を持ちかけようとしたと」

「そうさね。あなたには見破られちまつたけどね」

「けど何でそんな事を……」

「最近教頭が何やら良からぬ事を企んでるていでね…噂では大学への進学の推薦を餌に生徒を釣つてるとか」

「となると…教頭の狙いは学園長の失脚つてどこか？」

「そうだろうな、大会後のデモンストレーションで腕輪を暴走させてしまえば学園長は失脚、そして自分は学園の全権を得るつてことだろ。まあそれでこの学園のスポンサーが下りちまつたら学園の存続も危うくなるだろうけどな」

「それってかなり不味いんじゃない……」

「だからそう言ってるだろ。あたしはこれで全部話したよ。あんたらの返事を聞かせてもらいたいね」

「返事も何も俺たちがイエスと言わなけりゃ学園がつぶれるんだろ
答えは決まってる」

「そうかい、それじゃあ頼むよ」

「それならペアはどうする？」

「明久と雄二、俺とみらいでいいだろ。俺と雄二でもいいがそれだと優勝した時暴走の可能性がある」

「それじゃ決まりだな。それとババア、一つ提案がある」

「何だいクソガキ」

「大会では一回戦数学、二回戦英語、というように進んでいくと聞いている。大会のオーダーが決まったら科目指定を俺たちにやらしてもらいたい」

「それならいいさね。点数の割り増しなら一喝しようと思ったがね。
それじゃあ頼んだよ」

「」「任せとけ」「」

「頑張ります」

「それじゃあさっさと出ていきな、クラス間のやり取りは認めてやるよ」

「ありがとうございます」

よかった。当初の目的を忘れられてるのかと思った。

こうして私たちはひよんな事から、学園の存続をかけた大会にできることになってしまった。清涼祭無事に終了できるといいけど。

みらいの不安を残して清涼祭は刻一刻と迫ってくる。

直人の苦悩（前書き）

この話では最初三人いた新キャラが二人に減っています。勝手な変更誠にすみません。

直人の苦悩

学園長との契約から数日、Fクラスの清涼祭の準備は佳境に入っていた。

『おい、釘もってこい釘』

『ペンキ取ってくれ』

『このメニューは名前をもう少し』

『おい、砂糖入れすぎじゃないか？』

セツティング係、調理係ともに準備ははかどっているようだ。そしてスケツトを加えたホール係はというと。

「李紗ちゃんに翔子リンもう少しにっこりできない？」

「むづ…難しいものだな」

「……難しい…」

「ん…翔子リンはお客を全員ゆう君に重ねてみるとか」

「……雄二は一人だけ」

「そうなんだけどね……ま、これはこれで愛敬があつていいか」

普段店で慣れているという湊ちゃんとはもかく、普段余り笑わない李紗ちゃんと翔子ちゃんは表情づくりに苦労しているみたい。

「湊、あなたはどうかやって表情を作っているのですか？」

「わつつちか？どうと言われてもな…店では吹っ切れてやってるから接客の時はその表情が染みついたとしか」

「やはりそうゆうものですか」

「ん…翔子リンはまだ味があるんだけど李紗ちゃんのはな…オツチ何とかならない？」

もはや直人くんを専属執事のようにこきつかかている美沙ちゃん。直人くんもいい加減うんざりしてきたようだ。

「俺にそんな事言われてもな……秀吉に表情いじくらせて笑顔作ってみたらどうだ？」

「ん〜じゃ、その案やってみよ ヒデミ〜よろ」

「せめて男のようなあだ名をつけてほしいんじゃが…それではいいかの遠野？」

「はい、お願いします」

李紗ちゃんの許可を取り表情をいじっていく秀吉くん。

「……できたぞい、これでどうじゃ？」

「おお〜なんて無機質な営業スマイル 鏡持ってくるからそのままね」

「それは褒めているのですか？」

褒めてるのかわからない台詞を吐き鏡を取りにいく美沙。

「はは、でも可愛いよ」

「ええ、美沙はああ言ってたけど結構可愛いわよ」

「はい、可愛いです」

「何だか普段は可愛くないみたいな言い方で少々気になりますか…まあみんながそう言うならいいのでしよう」

「そう言うなって、結構可愛いぞ」

「そ、そうですか」

直人くんに言われたときの顔がすぐできたらいいのに。私がそんなことを思っていると美沙ちゃんが鏡を持ってきた。

「はい鏡、これで練習してね」

「はい」

鏡を受け取ると、鏡に向かい秀吉くんに作って貰った顔を作れるよう練習を始めた。

「俺はもう行ってもいいか？」

「オーケー また要が合ったら呼ぶよん」

「もう呼ばないでくれ」

そんな事を言いながら直人くんは、調理係の所に戻って料理の指導を再開した。

「…ホント霧乃って何でもできるわよね」

「はい。料理もできるし、頭も回るし、苦手なものなんてなさそうですね」 「それが問題処理班トップのなのさ」

「なんで美沙ちゃんが威張ってるの…」

「でも確かに直人の苦手なものって知りたいね」

「李紗ちゃん何か知らないかい？」

鏡に向かって笑顔の練習をしている李紗ちゃんに美沙ちゃんが聞く。

「……そんなものを知ってどうするんです？」

確かに美沙ちゃんに教えても悪用しかしなさそう。

「ん〜別に何もしないよん ただ何となく知りたいだけだよん」

「……不安ですがまあいいです。直人の苦手なものは知りませんが、苦手な人なら知っていますよ」

直人くんは苦手な人なんていたんだ。 案外お父さんとかだったりして。

「名前は……言う意味がないですね。双子の女性だと言っておきましよう」

「名前を言う意味がないってどういう事なんですか？」

「私は偽名しか知らないの、もしかしたらまた名前が変わっているかもしれないですし」

「一体どういう人なんだろう？」

「直人的には絶対会いたくない人ですね。それは私にも言えることですが」

「一体どんな人なのよ……」

「簡単にいうと…変態ですね」

「どんな特徴!？」

「みらいは出会ったらすぐ逃げることをお勧めします」

「なんで!？」

「妹のほうが幼児愛倒錯者なので、みらいの容姿だとドンピシャですね」

「私高校生だよ!？幼児じゃないからね!」

「それが理解できるといいのですが…」なんか李紗ちゃん震えてない? 一体過去に何があつたんだろう?

「他に一言で表すのなら悪魔がぴったりですね」

「悪魔? ナオツチじゃなくて?」

「直人を悪魔と表現するのは止めてください。そもそも私が直人を悪魔と呼ばれることが嫌いなのはこの双子が原因でしてね。あの二人と同じ呼び名が通ってる事でも直人にとっても最大の不幸ですね」

「李紗がそこまで言うとなると相当なものだね」

「はい、私たちもできれば関わりたくなかったのですがその双子も役に立つことがあるので変態には目をつぶって付き合ってますが、一般人のみなさんは出会ったら関わりを持たずすぐその場を離れることをお勧めします」

「変態は目をつぶるところじゃないと思うんですけど……」

直人くんの苦手な人?の話も終わりました接客の練習が始まった。それからは何のアクセシントもなく解散の時刻になり、教室の中はいつものメンバー+スケツトの人たちだけになっていた。

「みんなご苦労様 もう少しで清涼祭だし明日も気合い入れていこう」

「はい ところで美沙ちゃん、たのんだお洋服っていつ届くんですか?」

「いい事聞いてくれたミスキー 明日には届くから、明日からは服を着て練習ねん」

「……………(くわ!!)」

その言葉を聞いて目を輝かせるムッツリが一人。

「やっぱりあれ着るのよね…今更ながら恥ずかしいわ」

「何をいうミナミー コスプレを恥ずかしがるなんて邪道だよん」

「……………雄二…明日は楽しみにしてて」

「一体何をだ……………」

明日は目の保養になりそうだなあ。

「やはりワシも着るのかの？」

「何を言ってるのさ秀吉。君が着ないで一体だれが着るのさ」

「ワシが着なくても女子せいがあるだろうに」

秀吉が着ないなんて知ったらクラスメイト全員が血の涙を流すだろう。

「それじゃあ後片付けさつさとすましちやおう」

美沙の一言で後片付けが再開された。

僕が教室の前の器財を中に運んでいると、誰かに声をかけられた。

「ちょっとそこの君いいかしら？」

「えつと僕ですか？」

「そうよ」

僕が振り返るとそこには二人の女の子がいた。二人は容姿はそっくりだけど一方は無邪気な子供のような感じがして、もう一方は大人びた雰囲気をかもしだしていた。

「……………見た感じ生徒ではなさそうだけど何か要ですか？」

「ちよつと人を探してるんだけど」

「へ〜誰ですか？」

「霧乃直人って言うんだけど見たことないかしら？」

「あ、直人の知り合いだったんですか。知ってますよ」

「そう、ちょっと連れて来てくれないかしら」

「あ、今中にいるんで入って大丈夫ですよ。直人とはどういう関係なんです」

「上手くいえないけど……保護者ってところかしら」

え、それって直人のお母さんってこと。

「まあいいや。とにかく入ってください」

「それじゃ遠慮なく」

僕は一旦器財を置いて二人の女の子を教室に招き入れた。

「おやや？アツキーその人達はだれかね？」

教室に入るなり美沙が話しかけてきた。

「直人に要があるんだって」

「ナオツチに？今呼ぶよん」

そう言うと美沙は直人を呼びに厨房に消えていった。変わりにクラスに残っていたほかのメンバーが寄って来た。

「なんだ明久、お前の知り合いか？」

「ううん、直人の知り合いみたい」

「直人の知り合いですか？いったい誰……っな！！　あなたたちは
！！！」

「久しぶりね李紗」

どうしたんだろ李紗さん？　何を驚いてるんだろ。

「俺に要がある人って誰だ？」

すると直人が美沙と一緒に厨房から出てきた。

「直人！来てはいけません！！」

「ナオくん~~~~！！！！！！」

「は？…オゲアアア！！！！！！」

双子らしき人の一人が直人に突っ込み厨房の方に吹っ飛んだんだ。

「大丈夫ですか直人!!!」

李紗さんが素早く厨房に向かうと、直人がさっきの人の首を握りしめながら出てきた。

「危機一髪だった……どうしてこいつがここに……」

「直人……あっちにもう一人……」

「ユズキちゃんの過剰のスキンシップわおいておくとして……久しぶりね直人」

あれがスキンシップ!? 下手したら後頭部強打で死んでたよ。……まあ久しぶりの対面何だからしょうがないのかも。直人はなんてかえすんだろ?

「今すぐこの変態を連れて帰れこの変態」

なんて斬新な返し方……

「……久しぶりに来た保護者に対して他に言いたい事はないのかしら?」

「何時お前等が俺を保護した? 俺の記憶では大半が嫌がらせて埋めつくされてるんだが、だいたい何しに来たんだ」

「別に、ただ通り道だったから寄っただけ」

「そうか、それならすぐ通り過ぎてくれ」

なにこの会話?

「李紗ちゃん? あの人たちなんなの?」

「……さっき言った直人の苦手、もとい嫌いな人ですよ」

「大丈夫なのあの人? さっきから首握りしめられてるんだけど」

その割にはニコニコしてるけど。

「大丈夫です。むしろ拘束してないほうが危険です」

それからしばらく経ちようやく場が落ち着いたところで自己紹介された。

「名のり遅れたわね、私はシズキこっちの李紗に押さえつけられるほうがユズキよ。」

「ね〜李紗ちゃん、離してよ〜」

「ダメです」

「さあ、無駄な自己紹介も済んだ。とつとこの町から出ていけ帰れ近づくな」

どこまで帰ってほしいんだろ？

「直人、無駄とはどういう意味だ？」

「女子勢は李紗から聞いたんだろ。こいつらが今いったのは偽名だ、覚える価値もない」

偽名って…何でそんな事を…

「それでは直人が本名を教えてはくれんか？」

「俺だつて知るか。それにこんな疫病神の名前を知る所まで関わりを持ちたくない。早く帰ってくれ」

「さつきからそればかりねあんたは」

「…嫌がったつて聞かないくせに」

「それでなんでこの街に来たんだユズキ」

李紗さんに押さえ付けられているユズキさんに聞く直人。素直に教えてくれるのかな？

「うとね、前までいた所にちょっと居られなくなっちゃってどうしようと考えてたらナオくんところ行こうって話しになってね……」

それだけ聞くとそれ以上の話しは無視しもう一人の確かシズキさん
て人の方に向き直った。

「ほ……どこが通おっただけだ！ 明らかに故意で来てるだろうが
！ 今すぐ通りすがれ！！」

「五月蠅いわね、一番近かったのがここだったのよ。いい加減あき
らめなさい」

「何開き直ってんだ！！」

ここまで頑なに拒絶する直人初めてみたよ。

「まあまあ落ち着きなさいなナオツチ」

「そうですよ。お仕事の都合で通りかかっただけなんですから」

「こいつらは仕事じゃない！ だいたいこいつらだってもう何年生
きてるかわかったもんじゃねえんだ」

「どづいこと？」

「言ってしまったていいんですか直人」

「まずけりゃとつくに止めてるだろ。いいかこいつらわなもう何百
年、何千年も生き続けている悪魔なんだよ」

「……は？ はあああ……！！？」

「誰が悪魔よ、ここではあんたの方が悪魔って言われてるじゃない
の」

「ぐっ……」

いやぐっ、じゃなくて

「本当なの直人くん」

「悪魔かどうかは知らんが残念ながら本当だ」

おそろおそろみらいが聞く。

「…本当よ、私たちは直人が言っただくらい生きているわ、ある目的のために」

「目的って？」

「あなた方は知らない方がいいわよ。まあどうしてもって言うなら教えてあげてもいいけど」

「それ以上かかわるなみらい。そいつ等に関わるとろくな事がない」
もう話が現実離れしてるよ。

「し、信じられないよ。こんな事が現実に起きてるなんて」

「そうでもないわ。貴方達が知らないだけで世界には不思議が満ちているわ。ここのシステムだってその一種よ」

「なんでお前がここのシステムを知ってるんだよ」

「あら、ここはある意味有名な霊的なスポットなのよ。私達が知らないわけじゃないじゃないってどうか私たちがこの場所をここの学園長に教えてあげたのよ。それと今の話は人に話さないでね。知られるのは余りよくないから」

あのババアこんなコネまであったんだ。さすが姿が妖怪じみているだけはあるよ。

「だそうだ。こいつらの事は秘密にしといてくれ」

話したってだれも信じてくれなさそうだけどね。

「……そろそろ私達はおいとまさせてもらっわ。李紗、ユズキちゃんを離してくれる」

「……わかりました」

「早く帰れ。そして二度と姿を見せるな」

「そんな〜」

「行くわよユズキちゃん」

「うっうはい姉さま。ナオくんまたね〜」

「またなんてない事を祈っている」

そして二人は教室内から出ていった。

「……ナオツチ、今までのこと本当なのかい？」

「ああ、早く忘れることだ。深く踏み込むとろくな事にならない」
直人がそう言ったあと今日は解散となった。

翌日

今はホームルームの最中だ。今日は何故か朝から直人の元気がない。
何があったんだろう？

『主な連絡はこのくらいだ。それと今日からこのクラスの副担任が
決まったそのかたを紹介する』

副担任？というか今までいなかったんだこのクラス。

『先生、女性ですか？男ですか？』

『女性だ』

『若いですか？老けてますか？』

『若い』

『よっしゃああああ！！』

みんなが歓喜の声を上げる。むさい男が増えるよりはいいよね。

『それでは挨拶をお願いします』

『はい』

ん？なんか聞いたことのあるような声が……

扉が開くとそこから入ってきたのは

「私はシズキといいますが皆さんよろしくお願ひします。今は親戚の霧乃家に居候しています」

「……何だと!! また責様かこのエロ悪魔め!!」「……」

みんなが直人の家に居候というところに反応するが、直人はそんな場合ではないようだ。

『静かにせんか!! それでは今日はこのクラスの状態を知っていただきたいのでこの後は授業を見学してもらいます』

「はい解りましたわ」

そう言うとシズキさんが教室の後ろの方の席に座る。昨日のことを知っていたメンバーは口があんぐりだ。

「……誰か俺を殺してくれ……」

今日始めて直人が泣いているところを見た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9401r/>

バカと未来と召喚獣

2011年10月28日03時18分発行